

# 國學院大學研究開発推進機構 日本文化研究所年報

Annual Report of the Institute for Japanese Culture and Classics  
Kokugakuin University

第4号

特集：宗教文化士制度発足



平成 23 年 (2011) 9 月発行





小高神社（福島県南相馬市）

撮影 松本久史



小高家神葬祭墓（福島県双葉郡浪江町）

撮影 松本久史



メノナイトの墓碑と会堂（カナダ）

撮影 平藤喜久子



新田神社（鹿児島県薩摩川内市）

撮影 平藤喜久子



# 國學院大學研究開発推進機構

## 日本文化研究所年報

### 第4号

特集：宗教文化士制度発足

## 目次

### 【プロジェクト活動紹介】

- 「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」 井上 順孝…… 1  
「近世国学の靈魂観をめぐるテキストと実践の研究—靈祭・靈社・神葬祭—」  
松本 久史…… 9

### 【2010年度のトピック】

- 宗教文化の授業研究会 …… 11  
第20回国際宗教学宗教史会議（IAHR・トロント）に参加して …… 13  
日本宗教学会 パネル「〈靈魂の学知〉と政治運動  
—19世紀の鈴屋と気吹舎を焦点に一」 …… 17  
国際研究フォーラム「イスラームと向かい合う日本社会」 …… 21  
公開講演会「観光と宗教」 …… 25  
「近世国学の靈魂観をめぐるテキストと実践の研究」プロジェクト  
相馬地方調査報告 …… 27

### 【特集：宗教文化士制度発足】

- 宗教文化士資格認定制度の意義と展望 土屋 博…… 31  
宗教文化士制度発足への歩み 井上 順孝…… 37  
心理学領域の資格をめぐる問題 斉藤こずゑ…… 45  
「宗教文化の授業研究会」の試み 平藤喜久子…… 55  
教材開発の現状報告 今井 信治…… 63

### 【研究論文】

- 圓仏教の現況と研究の動向—宗教社会学的視点から— 李 和珍…… 73

### 【スタッフ紹介】…… 87

### 【出版物紹介】…… 97

### 【テレビ放映・番組紹介】…… 100



## 「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

プロジェクト責任者 井上順孝

### 1. プロジェクトの概要

本プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」は、2010年度から3年計画で発足し、本年度は2年目にあたる。まず本プロジェクトは2009年に正式に運用が開始された國學院大學デジタル・ミュージアムについて、研究開発推進機構内の諸機関や図書館などと有機的に連携しながらその円滑な運営を図るものであり、これまでの運用に加えて、更なるユーザビリティの向上のためにシステム面の整備・改良を進める。

また、大学の学術資産をデジタル化し、データベースとしてデジタル・ミュージアムに組み込んで発信することによって更なる内容の充実を図る。日本文化研究所や研究開発推進機構内の諸機関によるものだけではなく、全学規模での多様な研究成果を対象として公開を進め、かつそれらを例えば教育など研究以外の方面へと活用していくことも念頭に置く。

これらに加えて、本プロジェクトでも独自のコンテンツを作成していく。例えば既にデジタル・ミュージアム上で運用している Encyclopedia of Shinto (以下 EOS) について、これのさらなる拡充を図り、日本宗教と神道に関する日本語の論文を他言語に、あるいは他言語の論文を日本語に翻訳することによって日本と海外の研究者の知識の共有を図る双方向翻訳を行う。さらに、宗教文化教育に関する動画コンテンツについて、その制作体制を整備した上で、実際に制作を進めて

いく。この動画コンテンツについて、これは後述する宗教文化教育とも結びつくものであり、本年度10月に実施する国際研究フォーラムでも動画コンテンツの問題に焦点を合わせる。

なお、関連分野への展開について、特に宗教文化教育・宗教文化士制度と連携していく。本プロジェクトの2010年度の活動において、同年度が最終年度となった科学研究費補助金基盤研究(A)「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」(研究代表者・星野英紀大正大学教授)と協力して宗教文化教育に関する事業を行っており、また2011年1月9日には「宗教文化士」資格の認定制度の運営を担う「宗教文化教育推進センター」(CERC、サーク)が日本文化研究所内に設置され、2011年11月に同認定試験の第1回が行われる予定となっている。さらに、上述科研を継承する内容であり、本プロジェクト代表者である井上順孝を研究代表者とする科学研究費補助金基盤研究(B)「宗教文化教育の教材に関する総合研究」が2011年度より4年間の計画で採択された。これらと緊密に連携を取りながら本プロジェクトは事業を推進していく。

このように、本プロジェクトは一方においてデジタル・ミュージアムの整備・運営を行い、他方において、制作体制の整備を含めて独自コンテンツの更なる拡充を図っていくものである。以下ではまず本プロジェクトの2010年度の成果を簡単に紹介し、その上で2011年度の計画について概要を記す。なお、2011年度のプロジェクトメンバーは以下の

通りである。

責任者 井上順孝

分担者

平藤喜久子、星野靖二、塚田穂高（専任教員）、ノルマン・ヘイヴンズ、黒崎浩行、斉藤こずゑ（兼任教員）、市川収、カール・フレレ（客員研究員）、市田雅崇、李和珍、ヤニス・ガイタニディス（PD研究員）、今井信治（研究補助員）、ケイト・ナカイ、土屋博、星野英紀、山中弘（客員教授）、マシュー・チョジック、キロス・イグナシオ、小堀馨子、エリック・シッケタンツ、高橋典史、ジャン＝ミシェル・ビュテル、山梨有希子（共同研究員）

## 2. 2010年度の成果

### (1) 機構全体に関わる成果

#### ◇國學院大學デジタル・ミュージアム関連

2009年度に正式に稼働したデジタル・ミュージアムについて、新機能の組み込み等を行いながら全体の改良を進めた。新機能の一つは地図連携機能であり、これは数値データとして保持されている緯度・経度情報をグーグル・マップの提供する地図上に表示するというものであり、例えばある神社の位置を地図上に表示することが可能になる。2009年度末にシステム上に実装されたのを受けて、2010年度は先行して同機能を組み込んだ「神道・神社史料DB」と「祭祀遺物出土遺跡DB」の担当者と意見交換しながら細かい調整を加え、他のデータベースにおいてどのように活用することができるのかについて議論した。

もう一つの新機能は絵巻物のような長い一枚絵を表示するシステムであり、画面上部に長い一枚絵のサムネイルを表示し、その一部分を選択すると、画面中央にその部分の拡大画像が表示されるという表示機能を設定し

た。これについては、絵巻物などを収録している「図書館デジタル・ライブラリー」に先行して組み込んだ。

また、画面表示の改良について、データのエン트리項目（例えば本の書名の項目）では一枚の画像を表示し、そこからそのエントリに含まれる複数の画像（例えばその書に含まれる頁ごとの画像）を表示する画面へと遷移する仕組みを構築した。これによって、書籍や資料群など、一つの意味のあるまとまりとして複数の画像資料を含むデータ群を取り扱いやすくなった。

更に、高精細画像を表示させる機能をシステムに組み込むことを念頭に置いて、それを容易にするソフトウェアについてシステム開発者から説明を受けた。これについては引き続き2011年度も検討していくことになる。

#### ◇国際研究フォーラム「イスラームと向かい合う日本社会」

2010年10月3日に、國學院大學学術メディアセンター1階の常磐松ホールにおいて、國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所と科学研究費補助金基盤研究（A）「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」の共催によって、国際研究フォーラム「イスラームと向かい合う日本社会」が行われた。

同フォーラムは10時から17時半まで行われ、5つの発題に続いて総合討議がなされた。発題者とタイトルは次の通りである。

第1セッション：三木英（大阪国際大学教授）「モスクが来た街」

第2セッション：イサム・ハムザ（エジプト、カイロ大学教授）「イスラームは日本の宗教になり得るか」

第3セッション：サリー・ユジェル（オーストラリア、モナシュ大学教授）“Is Islam part of the problem or solution?”  
[イスラームは問題なのか解決なのか]



第4セッション:グリット・クリンカマー(ドイツ、ブレーメン大学教授)“Germany - Problems and developments of religious and cultural Integration”[ドイツー宗教および文化統合の問題と最近の状況]

第5セッション:中西俊裕(日本経済新聞社編集委員)「イスラム世界との絆」

これらを受けて、コメンテーターである師岡カリーマ・エルサムニー氏からコメントがあり、その後に井上順孝の司会で総合討議を行った。

同フォーラムには100名近くが参加し、充実した発表を受けて活発な議論がなされた。なお、同フォーラムを1時間に編集したものが、精神文化映像社の番組としてスカイパーフェクTVの216chで2011年1月12日と26日に放送された。

また、同フォーラムに関連して前日の2010年10月2日に、講師に小杉泰氏(京都大学教授)を招いて公開学術講演会「現代イスラームと日本社会」を行った。この講演会は研究開発推進機構の主催によるものであるが、同フォーラムの基調講演としての性格を持つものであった。

#### ◇公開講演会「観光と宗教」

2010年12月11日に、國學院大學学術メディアセンター1階の常磐松ホールにおいて、國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所と科学研究費補助金基盤研究(A)「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」の共催によって、講師に井門隆夫氏(ツーリズム・マーケティング研究所主任研究員)を招いて公開講演会「観光と宗教」が行われた。

講演会は13時から14時20分まで行われ、井門氏は、ツーリズム・マーケティング研究所の経験に基づいて、宗教文化と観光が具体的にどのようにつながっているかということに

ついて、実際の事例を示しながら論じた。

また引き続き講演後の14時30分から17時45分まで、「宗教文化教育の教材を探る」というテーマでワークショップが行われ、教材開発について議論がなされた。この宗教文化教育の教材開発については、本プロジェクトの2011年度の活動でも継続して考究していくことになる。

#### (2) プロジェクト独自の成果

##### ◇EOSの拡充

2010年度は、引き続きEOSの新システム上への移行を進めた。2009年度中からの懸案であった項本文の英文の見直しの反映作業について、蓄積分についてはこれを完了させた。しかし、見直し作業自体は今後も継続して行っていくことになる。

本文以外のコンテンツの拡充も引き続き行われた。まず年表の英訳が進められており、また神道あるいは日本文化・日本宗教についてあまり詳しくない外国人を対象とし、そうした人々が画像を通じて神道の基本的な知識を学ぶことを目的としたウェブサイトであるImages of Shinto: A Beginner's Pictorial Guideの内容の充足を図った。現在のところ、境内図、社務所、神殿内部、年中行事、人生儀礼の概要などを示した計6点のオリジナルのイラスト・図を作成し、それぞれについて画面上でイラスト・図内のものの名称と簡単な解説を読めるようにしている。

更に、EOS本文の一部の韓国語への翻訳も引き続き進められた。2010年度は「第四部 神社」の翻訳が完了し、これをどのように公開するのかについて議論した。

##### ◇双方向翻訳

2010年度は次の3点の翻訳を行った。日本語から英語へ2点、英語から日本語へ1点である。

・日本語から英語へ翻訳された論文

今井信治「アニメ『聖地巡礼』実践者の行動に見る伝統的巡礼と観光活動の架橋可能性—埼玉県鷲宮神社奉納絵馬分析を中心に—」(英訳 Anime “Sacred Place Pilgrimages”: The potential for bridging traditional pilgrimage and tourism activities through the behavior of visitors to anime “sacred places” -- An analysis of “votive offering tablets” (ema) at Washinomiya Shrine, Saitama Prefecture 翻訳者: GAGNE, Isaac)

荒川裕紀「西宮神社十日戎開門神事における歴史的変遷」(英訳 Historical Transition of the TŌKA-EBISU “Open Gate” Ceremony in Nishinomiya Shinto Shrine 翻訳者: STARLING, Jessica)

・英語から日本語へ翻訳された論文

Mark R. Mullins, “How Yasukuni Shrine Survived the Occupation: A Critical Examination of Popular Claims” (邦訳「いかにして靖国神社は占領期を生き延びたのか——通俗的主張の批判的検討——」 翻訳者: 齋藤公太)

#### ◇教派神道及び神道系新宗教の教団基礎資料のデジタル化

旧日本文化研究所時代に収集した教派神道の教団資料について、かねてからデジタル化の作業が進められていたが、デジタル・ミュージアムの正式稼働を受けて、新システム上での公開に向けてデータの整備を行っている。画像データのデジタル化については2010年度中にほぼ終了しており、加えて公開方法や画像データに付与するメタデータなどについて検討した。

また神道系教団より委託された教団基礎資料について、教団から許可を受けて2008年度からデジタル化とデータベース化を進めているが、2010年度もこの作業を継続して行った。

#### ◇現代宗教に関する資料・データの収集とそのデジタル化

宗教文化士制度と関連して、主に宗教教育、宗教文化という観点から、現代宗教に関する資料・データを収集している。2010年度も引き続き、世界遺産と宗教に関するデータベース、映画と宗教に関するデータベース、高校の教科書にみられる宗教文化関連の用語データベース、宗教文化を学ぶに適した博物館・美術館のデータベースなど、幾つかのデータベースの構築を進めた。

#### ◇学生に対する宗教意識調査(第10回)の実施

2010年度に学生の宗教意識についてのアンケート調査を「宗教と社会」学会・宗教意識調査プロジェクトと合同で実施し、2011年2月に報告書を刊行した。この調査は1995年以来、日本文化研究所のプロジェクトと「宗教と社会」学会のプロジェクトが合同で行ってきており、今回が第10回となる。質問項目のうち半分程度は初回から通して同じものであり、この15年の変化を調べることができる貴重な資料となっている。

#### ◇科学研究費補助金基盤研究(A)「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」(研究代表者: 星野英紀大正大学教授)との連携

科学研究費補助金によるこの研究は、大正大学の星野英紀教授を研究代表者として2008年度から3年計画(最終年度:2010年度)で行われており、研究分担者としてプロジェクトメンバーの井上順孝、黒崎浩行、平藤喜久子の3名、また連携研究者として同じく星野靖二と、学術資料館より加瀬直弥の2名が加わっている。同科研の目的は大学における宗教文化教育の実質化を図ることであり、具体的には宗教文化士制度の実現を目指しているが、本プロジェクトはその前身である「デ

ジタル・ミュージアムの構築と展開」プロジェクト（2007～2009）から一貫して同科研と連携して事業にあたってきた。

2010年度は同科研の最終年度であったため、成果のまとめとなるシンポジウムやフォーラム、シンポジウムが開催され、また報告書が作成された。加えて2011年1月9日に同科研の成果報告会が行われ、かつ同日に「宗教文化士」資格の認定制度の運営を担う「宗教文化教育推進センター」（CERC、サーク）が日本文化研究所内に設置された。

### 3. 2011年度の研究計画など

#### ◇國學院大學デジタル・ミュージアム関連

2009年から正式に稼働している國學院大學デジタル・ミュージアムについて、2011年度も引き続きシステム面の整備、コンテンツ面での拡充を図る。これまでデジタル・ミュージアムの基本的なシステムは、各データベースの実務担当者を中心に組織したワーキンググループにおける協議を通じて構築してきており、本プロジェクトはこのワーキンググループの連絡調整、運営を行ってきた。2011年度も引き続きワーキンググループにおける検討を通じて、使用者とデータベース作成者の両者にとってより使いやすい方向へシステムを改良していくことを目指す。また従来通り、新規データベースの追加・公開については、個別の申請を受けて検討する。

コンテンツについては、デジタル・ミュージアムに収録している各データベース個別の改良作業に加えて、本プロジェクト独自のコンテンツ制作も進める。本年度は特に動画素材の制作・活用に焦点を合わせており、これは動画の制作に加えて、制作環境を構築することをも含む。これはさらに、後述する宗教文化教育の教材開発と本年度の国際研究フォーラムとも関連しており、合わせて総合的に展開していく。

また、研究開発推進機構における研究成果のデジタル化とアーカイブの作成について検討する。これは広く国内外において研究・教育面で活用してもらうためであり、本年度は、今後の研究成果をどのように体系的にデジタル化していくか、また旧日本文化研究所の紀要のように既にデジタル化されているデータを合わせてどのように全体を公開・活用していくかについて議論する。これに関連して、現在図書館を中心に國學院大學の機関リポジトリ作成が検討されているため、これと連絡しつつ、準備を進める。

#### ◇EOSの拡充

EOSについて、更にその内容を拡充していくが、本年度は以下のことを重点的に行う。

まずデジタル・ミュージアム上の新システムへの完全な移行を図る。EOSは当初単体のデータベースとして構築されたが、デジタル・ミュージアム稼働時に新システムへと移行した。現在コンテンツの改善は新システム上でなされているが、音声再生機能等など、まだ新システムへと引き継ぐことができていない要素があったため、こうした問題を解決して完全な移行を図る。

また現行の内容の吟味・改善を引き続き行う。EOSは多くの翻訳者の協力によって構築されているため、時間をかけて全体の統一性を確保していかなければならず、内容の改善についても適宜行っていく。

さらに、懸案である年表の翻訳作業を引き続き進め、日本文化・日本宗教についてあまり詳しくない外国人を対象とした入門用のサイトである Images of Shinto : A Beginner's Pictorial Guide についてもさらなる充実を図る。

EOSの韓国語訳について、本年度は引き続き「第八部 流派・教団と人物」の翻訳を進める。既に翻訳が完了している「第四部 神社」については、公開方法を検討した上で

新システム上に組み込み、公開する。

#### ◇双方向翻訳

日本宗教と神道に関係する論文の相互翻訳について、2011年度も4本程度の論文の翻訳を予定している。対象となるのは広く日本文化に関わる論文のうち比較的最近に刊行・発表されたものであり、その中から翻訳・発信の意義が高いと思われるものを選定する。中心となるのは日本語論文の英語訳と英語論文の日本語訳であるが、韓国語などそれ以外の言語との双方向翻訳も念頭に置いている。

また既に20本弱の論文が成果として公開されているが、これをよりアクセスしやすい形で公開・発信する方法について、現行の形式の再構成を含めて議論していく。

#### ◇教派神道及び神道系新宗教の教団基礎資料のデジタル化

旧日本文化研究所時代から現在まで長期にわたって、教派神道（神理教・神道修成派など）や神道系新宗教関係の基礎的文書資料を大量に蒐集してきた。そのうちの一部については既に翻刻がなされたり、内容が研究論文で紹介されたりしているが、以前から将来的な公開を目指してデジタル化の作業を進めてきており、これを引き続き行う。文書を画像データとしてデジタル化する作業については既にその大半を終了しているため、本年度の課題はその画像データにメタデータを付与して公開することである。まず神理教関係資料のデータを公開し、また神道修成派関係資料のデータについても公開の準備を進める。

また、神道系教団より委託された教団基礎資料（書簡類約二万点）について、引き続きそのデジタル化作業を進める。資料整理について一定程度的見通しがついた時点で、資料内容の分析に着手する。

#### ◇宗教文化教育の充実のための教材作成

2010年度に引き続き、宗教文化教育・宗教文化士制度と連携し、特に動画による教材の制作について、制作環境の整備を含めて重点的に取り組む。

また2011年1月9日に「宗教文化教育推進センター」（CERC、サーク）が日本文化研究所内に設置され、同センターが「宗教文化士」資格の認定制度の運営を担うことになった。2011年11月に第1回の同認定試験が行われる予定であるため、本プロジェクトも同事業に協力していく。

さらに、本年度において、本プロジェクト代表者である井上順孝を研究代表者とする科学研究費補助金基盤研究（B）「宗教文化教育の教材に関する総合研究」（2011～2014年度）が採択された。本プロジェクトは同科研費と連携して教材開発を進める。

具体的には、宗教文化の学習に有益な博物館や映画、あるいは世界遺産や参考文献などについてデータベースを構築して公開し、かつ「動画」を用いたオンライン教材の制作やまたその発信方法について、調査・研究を実施する。

#### ◇国際研究フォーラム

本プロジェクトは国際的な研究交流の推進を重視しており、毎年少なくとも1回は本研究所の主催で国際研究フォーラムを開催し、研究者の国際的ネットワークをより発展させることを目指している。

本年度は、宗教文化教育における動画の活用について議論するため、「デジタル映像時代の宗教文化教育一開かれたネットワークによる取り組み」というテーマで10月16日に国際研究フォーラムを開催する予定である。予定されている発題者5名とコメントーターは以下の通り。Erica Baffelli（ニュージーランド、オタゴ大学）、Alan Cummings（イギリス、ロンドン大学）、岩谷彩子（広島大学）、織田雪江（同志社中学校・高等学校）、

平藤喜久子（國學院大學）。コメンテーター： ルマン・ヘイヴンズ（國學院大學）が務める。  
岩井洋（帝塚山大学）。司会は黒崎浩行とノ





## 「近世国学の靈魂観をめぐるテキストと実践の研究—霊祭・霊社・神葬祭—」

プロジェクト責任者 松本久史

### 1. 事業概要

本事業（期間：2008～2010年度）は、近世国学における死生観や死に関わる諸儀礼（葬儀、霊祭など）について、実証的な方法で明らかにすることを目的としている。すなわち、テキストの内容分析、テキストの成立や流通などを含めた、当該テキストの社会史的な文脈の把握、地域の神職や国学者らによる葬儀・霊祭など社会的実践の実証的理解と、そこでのテキストの用い方や関係する情報の共有のあり方などの分析を通して、近世国学の霊や死後をめぐる思想と実践をトータルに理解しようとするものである。具体的な内容は下記の通りである。

- I 国学の靈魂観関係の主要テキストの分析
  - (1) 国学者の靈魂論・幽冥論
  - (2) 神葬祭関係書の収集と調査
- II 神葬祭・霊祭・霊社建立を中心とした社会的運動の分析
  - (1) 鈴門における靈魂観と実践—霊祭・霊社・神葬祭—
  - (2) 平田国学における幽冥観の拡散・多様化と実践
- III 研究成果の公開

代表者 松本久史

分担者

林淳、遠藤潤、小林威朗、小田真裕、鈴木斎彦、三ツ松誠

### 2010年度の事業実施計画

- I (1) 『靈能真柱』のデジタルテキスト化作業、国学の靈魂観関係の主要テキストの分析
- (2) 神葬祭関係書の収集と調査
- II (1) 鈴門における靈魂観と実践
- (2) 平田国学における幽冥観の拡散・多様化と実践
- III 校訂『靈能真柱』のネット公開、高玉家文書の本文・解題・索引の出版準備、日本宗教学会学術大会でのパネル「〈靈魂の学知〉と政治運動」

### 2. 2010年度の成果

#### I 国学の靈魂観関係の主要テキストの分析

国学者の靈魂観や幽冥論に関する著作を調査・収集し、その研究成果を発表するとともに、本居文庫本『靈能真柱』を精読する研究会（「靈能真柱を読む会」）を隔週で開催した。『靈能真柱』のHTML化については、年度末の段階で本文の入力作業をひと通り終え、字句の最終確認についても、下巻の後半部分を残すのみとなった。2011年度に補足的な作業を行っており、同年度内に終了する予定である。

「靈能真柱を読む会」では、下巻途中まで読み進めながら、内容について多角的な分析を行った。篤胤の思想については、『古史伝』をはじめとして引用されるテキストについて逐一、出典にあたって内容の関連性を確認しながら分析を進めた。さらに交友関係や時代背景にも議論が及び、全体として有意義な研究会となった。また、電子テキスト化された

『靈能真柱』を有効活用し、重要な用語の用例分析を行うなど、新しい形でのテキストの利用を踏まえた研究に着手した。

## II 神葬祭・霊祭・霊社建立を中心とした社会的運動の分析

高玉家旧蔵書簡の整理については、前年度から引き続いて平田鏡胤書簡の翻刻・年代推定を時系列で並べ、隔週で開催する研究会にて参加者のあいだで解説と分析を進めた。2010年度内にはデータ化したもの全体の8割程度の再確認を済ませた。『日本文化研究所紀要』で活字化した際の誤読の発見や難読文字の比定など、データの精度を上げることができた。また、内容についても、書簡に現れた人名・書名などについて基礎的な情報を明らかにすることから始め、具体的なあり方にこだわって分析することによって、書簡が著された当時の状況を明らかにしつつある。また、交友関係を手がかりに、当地および周辺での門人関係や神職組織のあり方の分析を進めている。

高玉家の所在していた相馬地方に、神社をはじめとする関係箇所の実地調査および関係文献の調査のための出張を2011年3月10～12日の予定で行った（詳しくは、本号【2010年度のトピック】中の「相馬地方調査報告」参照）。当地では気吹舎門人の神社・墓碑などの多くの写真を撮影した。3月11日、現地で震災に遭遇したため調査は中断された。震災直前の姿を伝える貴重な成果について

は、現地の方々にも役立てていただけるよう、今後、有効な活用方法を考えていきたい。

## III 研究成果の公開

2010年9月4日に東洋大学で開催された日本宗教学会第69回学術大会ではパネル「〈靈魂の学知〉と政治運動」を組織し、松本、遠藤、三ツ松、小田、小林が本研究事業の成果に直接関わる発表を行い、研究開発推進機構学術資料館（神道資料館部門）の加瀬直弥がコメントした。その詳細については、本号【2010年度のトピック】中の「日本宗教学会 パネル「〈靈魂の学知〉と政治運動—19世紀の鈴屋と気吹舎を焦点に一」」を参照していただきたい。また、個人の研究成果としては、『國學院大學研究開発推進機構紀要』3号に、小田真裕「嘉永・安政年間の宮負定雄」および小林威朗「『靈能真柱』の靈魂觀—宣長の継承者としての篤胤一」の2論文が発表された。

3年間全体として、データのウェブ公開など、若干の積み残しはありつつも、若手研究者養成の点も含め、その研究目的はおおよそ達成できたものとする。

なお、2011年度からは3年間の計画で、新たなプロジェクト「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の構築」（プロジェクト責任者 遠藤潤）が始動している。

## 宗教文化の授業研究会

この研究会は、2008～2010年度科学研究費補助金基盤研究(A)「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」(研究代表者 星野英紀大正大学教授)の一環として始まった。大学の授業の質向上が近年唱えられるようになり、また宗教文化教育を充実させていく上で、具体的な授業実践に焦点を当てて、大学の授業全般に共通する問題から宗教文化の授業に固有の問題まで課題・ノウハウを共有することが必要だと考え、とくに若手研究者・教員が活発に情報交換する場をつくることを企図したものである。また、2010年6月には「宗教と社会」学会で「宗教文化の授業研究プロジェクト」として承認された。平藤喜久子、岩井洋(帝塚山大学)、弓山達也(大正大学)、黒崎浩行の4名が世話人をつとめている。

2010年度は3回の研究会が開かれた。以下、その概要を紹介する。

### 第3回研究会「宗教の授業と調査法」 (2010年7月4日)

この回は、調査実習をとりいれた授業に焦点を当てて、社会学の授業と宗教学の授業それぞれの事例を発表してもらい、調査実習の具体的な授業展開のノウハウと、宗教文化教育に特有の問題、注意点を議論した。

川又俊則氏(鈴鹿短期大学)は「社会調査実習としての宗教調査―「2001年度の試み」とその後」と題して、川又氏自身のフィールドである現代日本のキリスト教を対象とした社会調査実習の授業展開と学生の反応、問題

点を報告した。授業は東洋大学で非常勤講師として行われたものだが、大学には調査実習をサポートする人的体制があり、それと連携しつつ行われたという。また、テーマ選択は学生の自由にさせたが、必ずしも現地でのインタビューや参与観察などを要するものでなく、文献調査やインターネット調査を含むものもあった。ディスカッションでは、宗教をテーマに選ぶさいに求められる教員の専門的資質と学生の最低限の能力や、宗教文化教育としてはただ身の周りの多様な宗教現象を見に行くということでのよいのではないか、といった点について議論が交わされた。

木村敏明氏(東北大学)は、「集団合宿調査の理念と現実―東北大学宗教学研究室「宗教学実習」のとりくみ」と題し、東北大学で長く続けている、「活きた宗教」の理解を目標とした集団合宿調査を紹介し、調査の実際と問題点を報告した。ディスカッションでは、調査実習を通じて学生に何を学ばせようとしているのか、すなわち、現地調査のテクニカルな面の習得なのか、宗教現象の内容面を深く知ることなのか、もしくは両者のどちらに力点をおいているか、おくべきなのか、といった点について意見が交わされた。

### 第4回研究会「調査映像を授業にどう使うか」 (2010年9月12日)

宗教文化を扱う授業では、実際のものごとを教室で見せるために、映像資料の活用が望まれるが、そこにおける注意点、問題点について、とくに担当教員自身が調査・撮影した

映像に絞って議論した。

井上順孝氏（國學院大學）は、1970年代に8ミリカメラを調査に持参して以来、より利便性にすぐれた映像記録方式や撮影機材に乗り換えながら、撮影した映像を授業に使ってきた経験を、初期のものから最近撮影したものまで実際の映像を見せながら紹介した。そして、調査映像を授業で使うさいの配慮として、学生にショックを与える映像の是非や、被調査者のプライバシーなどに触れた。そして、教員だけでなく学生にとっても映像記録と発信がより手軽になっていくこれからの展望を示した。

コメンテーターの西村明氏（鹿児島大学）は、現場の臨場感を教室に伝えるという映像メディアの利点を踏まえつつも、学生が映像の信憑性を判断するリテラシーをどう磨くか、と問うた。ディスカッションでは、学生の反応や調査映像の貸し借り・共有の可能性について議論した。

#### 第5回研究会「ニュージーランドにおける宗教文化教育」（2011年1月8日）

現代日本の新宗教とメディアについて研究しているエリカ・バッフェリ氏は、イタリアのカ・フォスカリ大学大学院で博士号を取得後、ニュージーランド南東部の都市ダニーデンにあるオタゴ大学に赴任した。オタゴ大学およびニュージーランドの大学における宗教文化教育のカリキュラムの実情と、とくに日本宗教を教えるにあたってどのような問題をかかえているか、また大学間、および宗教文化を教える者同士のネットワーク構築の状況

について報告した。日本の宗教文化については、英語文献も含めて教材が不足しており、日本でオンライン教材が開発されるとよいという。このほか、ニュージーランドの大学カリキュラムにおいては先住民マオリの言語、文化への配慮が求められることも特徴的であった。質疑応答では、旧宗主国イギリス由来でありながら独特のカリキュラムをもつニュージーランドの宗教文化教育をどう位置づけて日本の状況との比較を行ったらよいかということが問われた。また、今後も海外で日本の宗教文化を教える研究者同士のネットワークによる教材開発などの情報交換が活発になされるべきであること、そのための基盤づくりが必要であることが確認された。

#### 今後に向けて

宗教文化の授業研究会は今後、2011-2014年度科学研究費補助金基盤研究（B）「宗教文化教育の教材に関する総合研究」（研究代表者 井上順孝國學院大學教授）や、2011年1月に発足した宗教文化教育推進センターとも連動して、とくに教員間で共有可能な教材の開発に力を入れて取り組み、実効性のある成果を挙げていくことが確認されている。ただし、2010年度の第2回研究会でとりあげたカルト予防教育や第3回の調査実習のように他の方向にも問題意識は開かれているし、また教材となる素材映像の作成がどのようにしてなされるか（第4回）や、需要の広がり（第5回）についても引き続き目を配っていく必要があるように思われる。とりわけ若手研究者の参集と自由闊達な意見交換に期待したい。

（黒崎浩行）



## 第20回国際宗教学宗教学史会議 (IAHR・トロント) に参加して

2010年8月15日から21日にかけて、カナダのトロント大学を会場に、国際宗教学宗教学史会議 (The International Association for the History of Religions, 略称 IAHR) 第20回世界大会 (XX th IAHR Quinquennial World Congress) が開催された。IAHRは、1950年に設立され、40ヶ国にわたる学会等の研究団体が参加する、宗教学では世界最大の国際的な団体である。5年に一度、世界大会が開催されており、日本では1958年と2005年に開催された。今回の大会には本研究所から、井上順孝所長、星野靖二助教、そして研究開発推進機構の国際旅費補助を受けた平藤が参加した。本稿では、大会に参加して得られた知見、および感想と平藤が企画したパネルディスカッションについて紹介することとしたい。

### 1. 大会の概要と感想

大会期間中は、昼間の全体講演会のみが参加者が共通して参加するものとなっており、

それ以外は、午前と午後に、同時に20余のセッションが平行して進行されるという形式であった。そのため大会の全体的な感想といっても、筆者が参加できたのはごく一部であるため部分的なものにならざるを得ない。その上で感じた印象を述べてみたい。

今回の大会統一テーマは「宗教—人間の現象」であった。前回の東京大会では「宗教—相克と平和」がテーマであり、2001年の9.11同時多発テロ事件を受け、「文明の衝突」を宗教がどう乗り越えるか、そのとき宗教学はどういった役割を果たすことができるのかといった問題意識があったように感じられた。その東京大会に比べると、今回は人間が創り出したものとして宗教をとらえ、その現象にどう学術的に取り組むかというテーマが目立つように感じられた。

たとえば全体講演会 (Plenary Address) では、アメリカの David Sloan Wilson (Binghamton University) が “Religion as a Product of Evolution” と題する講演を、また



トロント大学

同じくアメリカの Robert McCauley (Emory University) は、“Taking a Cognitive Point of View: Religions as Rube Goldberg Devices” と題する講演を行った。前者は人類の進化の過程の産物としての宗教というとらえ方であり、後者は認知科学から宗教という人間の創り出した物語をとらえるという立場である。

これらの講演のテーマに代表されるように、大会ではとくに認知科学から宗教にアプローチした研究が多かった。実際に、今回の大会では“related academic sessions”として以下の研究プロジェクトによるセッションが連日開かれていた。

・ Cognitive Science of Religion (IACSR)

The International Association for the Cognitive Science of Religion (国際認知宗教学会) によるセッション。認知科学、神経科学から宗教的思考や行為を研究するプロジェクト。

・ The “Explaining Religion (EXREL) Project”

14の大学による研究プロジェクト。認知メカニズムの進化が宗教的観念や行為とどう関わっていったのかを研究する。

・ The Religion, Cognition and Culture (RCC)

デンマークの Aarhus 大学宗教学部の「宗教、認知、文化」プロジェクト。心理学や神経科学との協同により、宗教現象を研究するセッション。

開催中は、これらの分野のポスターセッションも行われており、海外の多くの若手研究者がこの分野に関心を寄せ、研究をはじめていることがわかった。

なお、こうした認知科学や進化心理学への関心の高まりは、筆者が所属する国際比較神話学会 (International Association for Comparative Mythology) でも顕著であり、瞑想時のビジョンや、シャーマンのビジョン

と神話のイメージを神経科学の観点から分析する研究などもある。こうした研究の重要性を認識しつつも、なかなかうまく咀嚼できず、研究に生かすことができないでいるが、今回の IAHR に参加し、あらためて神話学だけではなく宗教学でも認知科学、進化心理学的研究がきわめて重要な分析視点になりつつあることを確認し、さらに今後の研究動向に注目すべきであると感じた。

そのほか、メディアと宗教についてのセッションも複数みられた。なかでもメディアがつくる宗教に関するビジュアル・イメージをテーマとした研究は、筆者の問題関心にも関連するテーマであるせいか、興味深く聴いた。

大会終了後には、日本から参加している研究者を募り、12名でトロントの西の郊外にある、セント・ジェイコブズという街へでかけた。この街は、メノナイトの人々が暮らすことで知られている。メノナイトとは、キリスト教のオランダ再洗礼派(アナバプテスト)の一派である。迫害を受けたヨーロッパを逃れて北米に移住し、いまでも伝統的で禁欲的な生活を続けている。オールド・オーダー (Old Order) と称されるとくに保守的な人々は、いまでも電化製品を使用することを拒否し、自動車ではなく、馬車で移動する。女性たちは、黒か紺の質素なドレスを身にまとい、市場で手作りのクッキーや蜂蜜などを売っていた。その生活地域を、墓地や集会所、学校の様子を中心に見学した。本年報の口絵にメノナイトの墓地と集会所の写真を掲載している。墓碑には死者の名も無く、碑の大きさで亡くなったおおよその年齢を示すだけである。その簡素な墓碑群には圧倒された。

## 2. パネルディスカッション

本大会では、“Mythology and Japan” と題するパネルディスカッションを企画した。その背景として、2005年の第19回世界大会の際に筆者と和光大学の松村一男教授で「開か

れた日本神話」“Japanese Mythology from multidisciplinary perspectives”と題するパネルディスカッションを企画したということがある。このときのパネルディスカッションでは、日本神話への研究視点が多様になっている現状を踏まえ、臨床心理学、精神分析学、比較神話学の専門家を迎え、日本神話の扱い方について、それぞれの研究成果を発表してもらった。発題者は織田尚生（東洋英和女学院大学）、北山修（九州大学大学院）、吉田敦彦（学習院大学）の三名（いずれも所属は当時のもの）。コメンテーターは松村一男（和光大学）、司会は平藤であった。

このときの討議では、それぞれの研究手法の特徴が明らかにされ、対比的に論じることができた。そのことを踏まえ、5年後の今回のパネルディスカッションでは、あらためて民族学的研究と心理学的研究の動向に注目しつつ、日本神話研究の歴史を振り返り、その蓄積が神話学という学問にどう貢献しうるのかを討議することとした。今回の発題者とテーマ、コメンテーター（レスポネント）は次のとおりである。

#### 発題者

高橋原（東京大学）：Psychological approach to Japanese Myth and Nihonjinron

山田仁史（東北大学）：Japanese mythology from ethnological perspectives

松村一男（和光大学）：Western Impact on Study of Japanese Mythology

コメンテーター：井上順孝（國學院大學）

組織者・司会：平藤喜久子

ディスカッションは英語で行われたが、以下に日本語の要旨を掲げる。

\*\*\*\*\*

日本神話の研究は、19世紀以降、欧米の神話研究の動向と密接に関わりながら現在まで展開してきた。現在までに比較神話学や宗教学、民族学、民俗学のほか、考古学や、精神分析学、深層心理学の立場などからも研究

が行われている。

とくに民族学的な研究では、日本文化がどのようにして形成されたのかという問題意識のもとに、隣接地域との比較研究が行われ、成果を挙げてきた。また、心理学では、日本神話は日本人の心理的特性を探るための重要な手がかりと位置づけられ、実際の治療にも役立てられている。

今回のパネルディスカッションでは、あらためてこれら民族学的研究と心理学的研究の動向に注目しつつ、日本神話研究の歴史を振り返る。そして現在の神話学の研究対象として、日本神話がどのような位置にあるのかを踏まえ、日本神話研究の成果が神話学になにをもたらしうるのかを議論することとした。

\*\*\*\*\*

ディスカッションでは、はじめに平藤が、日本神話研究史の概略とパネルの趣旨について述べ、次に高橋が心理学的な日本神話研究について、とくに日本人論との関わりに注目してまとめ、論じた。山田は民族学的な日本神話研究の歴史を踏まえ、現在の民族学的神話研究の動向についても紹介した。松村は西洋の日本神話研究の歴史と現状を論じた。これらの発題を受けて、コメンテーターの井上は、将来的な日本神話研究の研究方法与手段について問題提起を行った。会場にはエジンバラ大学のEmily Lyleなどの神話学者も訪れ、活発な討議がなされた。

主に19世紀から現代にいたるまでの神話学と日本神話研究を振り返ったディスカッションとなった。進化論の強いインパクトを受けた19世紀は「無意識」が見いだされ、神話との関わりが注目された時代でもあった。20世紀前半までの植民地主義下では、民族学的な神話研究が隆盛となり、20世紀後半は神話の「構造」に目が向けられた。日本神話の研究も、こうした流れのなかでなされてきた。先に述べたように、現在、神話学、

宗教学は、認知科学や進化心理学という研究視点からも論じられるようになっていく。一見まったく新しいようであるが、研究史を振り返れば、進化や心というテーマはすでに先学たちが取り組んだものである。最近の神話学や宗教学の動向を踏まえて、日本の神話研

究史をあらためて振り返ってみて、認知科学や進化心理学などの視点が、これまでの研究とどういった点で本質的に異なっており、またどういった新しい地平を切り開くのかを検討する必要があると強く感じた。

(平藤喜久子)

## 日本宗教学会 パネル 「〈靈魂の学知〉と政治運動—19世紀の鈴屋と気吹舎を焦点に一」

### 1. はじめに

このパネルは、日本文化研究所における研究事業「近世国学の靈魂観をめぐるテキストと実践の研究—靈祭・靈社・神葬祭—」(2008～2010年度、責任担当者：松本久史)の研究成果の一部を日本宗教学会学術大会のパネルとして発表したもので、国学の中で展開してきた靈魂をめぐる学知について、本居宣長の門人組織である鈴屋と平田篤胤の門人組織気吹舎を焦点として、近世末／近代黎明期にあたる19世紀におけるこれら組織とそれに関わる人々の宗教性と政治性をともに検討した。

パネルの構成などは、以下の通りである。

年月日：2010年9月4日

会場：東洋大学

代表者：松本久史

コメンテータ：加瀬直弥

司会：遠藤潤

発表：

松本久史「鈴門国学者と因伯神葬祭運動」

小林威朗「『靈能真柱』に語られた神と靈魂」

小田真裕「下総における幽冥観の展開—気吹舎門人とその周辺—」

遠藤潤「黄泉国論争—平田国学の他界像と近代—」

三ツ松誠「飯田年平から見た国学」

### 2. パネル編成の趣旨

よく知られているように、「国学の靈魂観」というテーマについては、これまで数多くの研究が重ねられ、すでに重要な成果が存在し

ている。今回のパネルでは、これらとは異なった角度から議論したいと考えた。

大前提としてあるのは、国学の多面性・多様性について、それが第一義としては学問であるという点を確認したいという問題意識である。国学は、靈魂観・死生観に関連して、宗教的なものとしてとらえられることが少なくない。しかしながら、鈴屋や気吹舎といった組織は近世的な意味での学問の組織であり、そこでの活動は学びとしての実践に根ざしている。靈魂観・死生観を検討するうえでもその点を確認するため、ここでは一連の知に対して〈靈魂の学知〉という名称を与えて論じることとした。

このような〈靈魂の学知〉を考察するに際して、このパネルでは思想と実践あるいは思想と組織を有機的に関係づけて分析した。一般に、宗教思想はひとり自己展開する形で現実のさまざまな動きになるわけではない。しかし、他方、現実の運動のなかで、思想はその内容ゆえに人々を方向づけ動かすことが少なくない。19世紀国学の〈靈魂の学知〉をとらえるときにも、まさにそうした視点が欠かせないと考えられる。『靈能真柱』などにみられる〈靈魂の学知〉形成に重要な役割を果たした思想と、神葬祭をはじめさまざまな神職・国学者においてときに政治性をおびる運動をともに視野に収めることによって、近世末／近代黎明期の〈靈魂の学知〉のダイナミズムをとらえることができる。

また、国学の〈靈魂の学知〉をとらえる上で、平田国学を中心とした単系的理解もここでは退けたい。すなわち、靈魂についての国



学者たちの営みについて、極端に単純化された学統理解に回収することなく、その多様性を把握することを目指した。具体的には、鈴屋と気吹舎を二つの焦点としつつ、その学統だけでは理解できない動きも対象とする。

以上のような問題関心を前提として、研究所の研究事業のメンバーである松本、小林、小田、遠藤、三ツ松の5名が発表を行い、加瀬直弥（國學院大學研究開発推進機構）がコメントをした。各発表は次の通りである。

### 3. 発表の内容

(1) 松本は、宣長や篤胤が構築した〈靈魂の学知〉が、近世後期から幕末期にかけての神職による神葬祭運動に与えた影響を明らかにするという問題意識から考察を進めた。今回は、鳥取藩の神葬祭運動に焦点を当て、その中心人物で鈴屋門人だった飯田秀雄および子の飯田年平の行動と思想の関係について考察した。運動の過程を対象とした靈魂觀の直接の解明は困難である。飯田親子の学問の目的は、必ずしも神葬祭実現に限定されておらず、それは「神道の復古」という国学の学修から得た信念を背景としていたと考えられる。年平は篤胤に批判的であるが、政治的な運動にも積極的に参加するなど、鈴門と気吹舎門を対立的・相互排他的にとらえる従来の国学研究では把握できないあり方を示している。神葬祭運動は単なる宗教問題としてとらえられるべきではなく、18世紀後半以降の日本社会における神職集団の自立の問題と深く関わっており、すぐれて政治的な問題でもあった。

(2) 小林は、平田篤胤『靈能真柱』を対象として、そこに篤胤の独創性を見出す従来の傾向に対して、先行する宣長の神觀を受け入れ、あるいは反発した結果としてそれを読み直すことを目的として報告を行った。『靈能真柱』の冒頭部分における「靈の行方」と「魂の行方」について再考すべく、同書における「靈」

と「魂」の用例を具体的に検討してみると、それぞれが他方にはない意味を示している用例がある。その場合、「靈」は現世に直接的に何らかの影響を与える場合に用いられており、「魂」は黄泉国に行かない説明に登場する。宣長は二つの語の使い分けこそしないが、現世に影響を与えるミタマと夜見に行くミタマの分在を想定しており、後者が夜見に赴いたことによって、地上に残った前者は経年によって消滅するという。篤胤はこの二種を「靈」と「魂」としてとらえた上で、後者は夜見に行かないとして、現世に影響する「靈」も不滅と考えた。このように、この点に関して、実は篤胤は宣長の説を批判的に継承したといえる。

(3) 小田は、平田国学の学知の地域社会での受容という問題設定のもと、下総の代表的な気吹舎門人である宮負定雄の活動および彼と関係の深い人々における学問の受容について考察した。宮負は、村民に対する教誡の必要性を痛感する中で『靈能真柱』に遭遇し、気吹舎に入門した。入門後は平田国学の〈靈魂の学知〉と深く関わる形態での村政改革を行った。この改革には同村の気吹舎門人の多くが参加しており、彼らにも〈靈魂の学知〉への関心やそれと村政レベルの政治運動をつなぐ意識は見られる。ただし、平田国学や〈靈魂の学知〉に対する態度は一様ではなかった。定雄は安政期に幽冥界への関心を強め、三沢明『神界物語』を重視するとともに、居村の門人に写本を与えるなどしていた。〈靈魂の学知〉が定雄の理解や取捨選択を介して伝えられ、受け手も自身の関心から接し、知識・経験に照らして理解する、という一連のプロセスにはそれぞれの人々の思想を理解する手掛かりがある。

(4) 遠藤は、明治初年に宣教使が教化内容を確定する過程で生じた、ヨミの国の位置や形状をめぐる生じた論争（黄泉国論争）について論じた。篤胤の『靈能真柱』の内容につ

いて、当時の日本における対外的危機意識および日本の自立を確認するという文脈から改めて分析すると、政治性と宗教性の結びつきが明らかになる。同書は宇宙や国土の生成を神の〈たま〉から実体的に説明しており、〈たま〉を媒介にして国家の神話と個人救済が接合しており、国家と対外関係、地域社会の秩序、個人の救済という3つの次元が認められる。明治初年の黄泉国論争では、宣教使の組織に平田国学の関係者が多く含まれていたにも関わらず、篤胤の学説とは異なる、ヨミの国が地球の内部に存在するという地胎説が有力になろうとし、それをめぐって対立が生じた。この時期、平田国学の〈靈魂の学知〉は、内容に含まれるコスモロジーやそれを支える組織の問題も含めて、根底的な編成替えに直面していた。

(5) 三ツ松は、明治初年の新政府内部における国学者の布置を、平田派と津和野・鳥取派および考証派の対立図式で把握し、政府の祭祀・儀礼に携わることが多かった後者は前者と比較すると相対的に神霊への関心が薄いという一般的な理解を紹介した上で、後者に含まれる飯田年平を具体的に取り上げ、その思

想と実践について考察した。飯田年平の伝記的事実を確認した上で、近代の神祇行政における年平の動きを追い、さらに平田国学に対する年平の評価を分析した。幕末維新期は政治への志向性も強く藩の招魂祭にも関与した。教部省の教導政策が行き詰まったのちに著した「憂国私言」では「国体皇道」「尊内卑外」が説かれた。年平は靈魂実在を認めていたと推測されるが、死後審判を伴う靈魂論を否定した。日本人のナショナル・アイデンティティの確立にはコスモロジカルかつスピリチュアルな基礎付けが必要だと考えた篤胤の議論は、このような年平の立場からは有用なものとはいえなかった。

コメンテーターの加瀬は〈靈魂の学知〉が社会の中で展開した際の多様性について、地域社会における学知にかかわった人々の階層の問題などを例示しつつ、問題提起を行った。これに対する質疑の中で、神職や農民など階層によって対応が異なっていたことが示され、維新时期における靈魂の安定をめぐる対応では、報告では主として鈴門と気吹舎が対照的な側面が紹介されたが、実際には多様な対応があったことが明らかにされた。

(遠藤潤)



## 国際研究フォーラム「イスラームと向かい合う日本社会」

2010年10月3日（日）に國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所主催、科学研究費補助金基盤研究（A）「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」（研究代表：星野英紀）の共催により国際研究フォーラム「イスラームと向かい合う日本社会」を開催した。

グローバル化が進むなか、日本社会も多文化社会時代を迎えている。宗教の点でも、日本の宗教が海外に進出するとともに、日本で活動する海外の宗教教団の数も増加の一途をたどっている。たとえば韓国のキリスト教の布教活動はきわめて盛んで目立ってきている。そのほか台湾の教団やヒンドゥー教系の教団なども進出している。

そのなかで、イスラームの存在感は決して無視できないものになってきている。たしかに欧米に比べれば相対的な比率はまだ小さいが、街中でスカーフをかぶったイスラームの女性を見ることは珍しくなくなってきたし、大学では留学生として接する機会も増えてきた。今後、さらにグローバル化が進むことが予測されるなかで、日本社会がどうイスラームと関わっていくのかを考えることが必要になってきているだろう。

そこで日本文化研究所主催の国際研究フォーラムとして、イスラームと日本社会の問題を取り上げることにした。また、前日の10月2日に研究開発推進機構主催で開催された公開学術講演会を連携企画として位置づけ、イスラーム研究の第一人者である京都大学の小杉泰教授に依頼し、「現代イスラームと日本社会」と題して講演をしていただいた。

本講演については、『國學院大學研究開発推進機構紀要』第3号（2011年3月刊行）に講演録を掲載しているので、そちらを参照していただきたい。ここでは国際研究フォーラムの概要を紹介する。

今回のフォーラムは、5名のパネリストと1名のコメンテーターを迎え、2010年10月3日10時から17時半まで國學院大學学術メディアセンター常磐松ホールを会場に行われた。下記に発題者とテーマを発題順に記す。司会はすべて井上順孝教授が行った。

発題1：三木英氏（大阪国際大学）「モスクが来た街：地域住民のイスラーム『受容』」（日本語）

発題2：Isam Hamza氏（エジプト、カイロ大学）「イスラームは日本の宗教になり得るか」（日本語）

発題3：Salih Yucel氏（オーストラリア、モナッシュ大学）“Is Islam part of the problem or solution: An Australian immigrant experience?”（英語）

発題4：Gritt Klinkhammer氏（ドイツ、ブレーメン大学）“Germany - Problems and developments of religious and cultural Integration”（英語）

発題5：中西俊裕氏（日本経済新聞社）「イスラーム世界との絆—広がる交流のすそ野・産官学を軸に」（日本語）

コメンテーター：師岡カリーマ・エルサムニー氏（慶應義塾大学、獨協大学、アナウンサー）

次に各発題の内容を紹介する。

三木氏は科学研究費補助金基盤研究（A）「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」の研究で、日本に來ている海外の教団の調査を行っている。今回の発表はその調査の経験に基くものである。三木氏によれば、2010年10月現在、日本国内には59のモスクがあり、90年代以降、ビジネスや留学のために來日したムスリムの信仰の場となっている。調査を行った大阪モスク（旧出來島モスク）は100名を超えるムスリムが訪れる元専門学校の校舎を利用したモスクで、さまざまな立場の人々がかかわっているという。茨木モスクのほうは、近隣にある大学の留学生が集う新しい一戸建て住宅のモスクである。発表では、この2つのモスクと地域住民との関係について、媒介者の役割などを紹介しながら報告を行った。

Hamza氏は、長く日本に暮らし、日本の国学について研究を行った経験を持つ。その経験と学識をもとに、明治以來の日本とイスラームの関係、日本におけるイスラーム研究の歴史を述べ、その上でイスラームの日本化、すなわち「日本型イスラーム」になれるかどうか、日本で宗教の一つとしてイスラームが受け入れられるためにはポイントとなると述べた。

Yucel氏は、オーストラリアのモナシュ大学で、ムスリム移民の研究を行っている。多文化化が日本よりも早く進んだオーストラリアが、どうムスリムと共生しているかという点は、日本でも参考になる部分があると考え、今回発題を依頼することとした。発題は次の3つの角度から行われた。A)ムスリムはオーストラリアをどのように見ているのか。彼らの社会への貢献はどのようなものなのか。B)オーストラリアにおけるムスリムの生活の中でイスラームが果たす役割。C)日本人はオーストラリアのムスリム移民の事例から何を教訓として引き出せるか。

Klinkhammer氏は、トルコからのムスリ

ム移民が多いドイツの状況を紹介した。ドイツのムスリム移民は、第2世代に入っており、ドイツに生まれたムスリムの若者が増えている。彼らは、ドイツ社会のなかで問題として目立っているが、近年ではその問題を解決しようという新しいネットワーク構築なども進んでおり、差別の解消だけではなく、共同参画社会に向けた取り組みが生まれていることを論じた。

中西氏は、日本経済新聞社で長年中東問題や日本のイスラームの問題を取材してきた経験を持つ。その経験をもとに、政府、企業、大学が、現在イスラームへの理解を深め、つながりを深めようとしている現状を紹介し、それぞれどのように取り組んでいるのかを紹介した。そのなかで、専門家が不足しているという問題点を挙げ、日本人のムスリムが貢献する余地があることを論じた。

これらの発題を踏まえ、師岡氏がコメントを加えた。師岡氏は、エジプト人の父と日本人の母を持つ。現在ムスリマ（女性のイスラーム教徒）として日本で働き、生活を送っている。その立場からさまざまな指摘がなされた。まず、フォーラムのタイトルが「イスラームと向かい合う日本社会」となっていることについて、「向かい合う」という表現は、あくまでも他者としてイスラームを扱っていることを示しているという鋭い指摘があった。そのことに関連して、今現在日本社会のなかでそれほどムスリムへの排除感情がないのは、ムスリムが日本人にとって遠い存在、完全な他者というイメージがあるからであろうとし、今後日本人ムスリムが増えていき、日本社会での存在感が目立ってくれば、その感情はまた異なったものになってくるのではないかという。その場合、日本人ムスリムが見た目も含めてどう溶け込んでいくか、他者にならないためにはなにが必要かを考えるべきであると述べた。

その後の質疑応答では、イスラームが進化



論についてどう扱うのかという質問や、日本人が知識がないがゆえにマンガなどで宗教的表象を描いてしまうことについての問いかけなどがあった。それに対して、Hamsa氏より、エジプトでは知識として進化論は教えているという回答があった。またマンガについては、その形態が受け入れやすいということが問題であると指摘された。とくに進化論については師岡氏や Yucel 氏からも意見が述べられ、活発な議論になった。

会場には 100 名近くの参加者があり、トルコ協会の方など、日本在住のムスリムの方も

多数参加されていた。ムスリムの方からは、礼拝を行う許可を求められるという経験もし、前日の懇親会では、ハラール・フード（イスラームで食すことを許されているもの）を用意することが、日本でいかに面倒かを体験した。こうした体験は、今後多くの日本人が体験するものであろう。発題者からは、ムスリム側からの働きかけや工夫について、その必要性が指摘され、論じられたが、日本社会の側でどのような準備をすればいいのか、今後ますます議論を重ねていく必要があると感じた。

(平藤喜久子)



議論の様子



## 公開講演会「観光と宗教」

2010年12月11日(土)に、國學院大學 学術メディアセンター1階の常磐松ホールにおいて、公開講演会「観光と宗教」が開催された。講師は、ツーリズム・マーケティング研究所主任研究員で、関西国際大学客員教授でもある井門隆夫氏であった。この講演会は科学研究補助金基盤研究(A)「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」(代表者・星野英紀大正大学教授)が主催で、國學院大學研究開発推進機構が共催して行われたものである。

同科研による研究は7つの研究グループが設けられているが、今回の講演会はそのうちの第2グループ(幹事・井上順孝)が中心になって企画されたものである。第2グループでは、宗教文化教育の教材についての研究・調査が中心的な課題の1つであったが、観光と宗教文化との深い関わりに着目して今回の公開講演会となった。観光の対象としては世界遺産が目立つことが多くあるが、世界遺産にしても、その多くが宗教文化と深い関わりをもっていることが知られている。ただの物見遊山だけでなく、宗教文化を深く理解するための観光という視点も提起できる。すでに世界遺産と宗教に関するデータベースも作成中であったので、それに深く関わるテーマとして選ばれた。

講師の井門隆夫氏は、長年ツーリズム・マーケティングに携わってきた経験を有する。マーケティングであるから、顧客の獲得という経済的目的が第一に重要になるが、同時にツーリズムには文化的要素が大きく関わる。またこれは、旅は近代に始まったことではな

いので、それ以前からの歴史的展開も踏まえる必要がある。

井門講師の話は、江戸時代の旅の特質についての紹介から始まった。江戸時代、庶民は旅行を禁止されていたが、神仏への参拝の場合はその限りではなかった。参拝は旅の楽しみを伴うものであり、とりわけ「お伊勢参り」は庶民にとって一生の夢であった。また「丸金か京六か」と言われた讃岐の金毘羅大権現(今の金刀比羅宮)や、京都六条の東西本願寺への参拝も、同じく一大イベントであったことが紹介された。療養目的、遊興目的など、江戸時代の旅の目的について紹介した上で、それが現代にも続いていることを指摘した。そして巡礼が必然的に宿泊の需要を生んだことも述べられた。

これを踏まえて現代の旅において必要な要素が述べられた。それは、情報提供の充実、宿泊の魅力向上、体験交流メニューの充実、滞在を促進するイベントの実施、観光案内の充実、移動の快適化、歴史的建造物の改修・活用、観光案内所の整備といったものである。また、パワースポットなど、流行しているものを取り込むことも大事であるとされた。

ただ今日においては、観光事業の「大量販売モデル」から「付加価値モデル」への転換・誘導へと変わってきていることを述べた。つまり何か他にはないようなものが付け加わっていることの重要性である。宗教的な要素はここに大きく関連するということになる。

そして宗教に関する観光のタイプとして、団参、祭り・イベント型、現世利益型、年中行事型などがあるとされた。こうした一般的

な説明に続いて、具体的な事例が紹介された。1つは千葉県勝浦市の「勝浦ビッグひなまつり」がどのようにして盛大なものになったかについてである。勝浦ビッグ雛祭りでは、かつて家庭で使われていた古い雛人形が1200体集められ、階段60段に並べられた。これを見に来た人は10日で34万人に達したという。

この試みで最初にターゲットにしたのは、嫁いだ娘をもつ60～70代の世代であったという。これらの人々に勝浦市の観光協会が広報し、かつて娘のために買ったのだが、今は死蔵されている雛人形を提供してもらうように呼びかけたのである。集まった雛人形が神社の階段に並べられた。この企画が雑誌・メディアで紹介されると、次の年にはさらに多くの雛人形が集まった。見物客も増えていった。こうして5年後には34万人の観光客が訪れるような一大イベントになったのである。そして、この企画を成り立たせたのは、雛供養という古くからの習俗に根差すものであったからだと説明された。

もう一つの興味深い事例は長野県のホテルで企画された「パパとママとスタッフで贈る温泉でクリスマス作戦！」というものである。これはスタッフと親が相談して、泊ったホテルでサンタに扮した従業員が、夜中に子どもを起こし、プレゼントを贈るというものであ

る。むろん、何を贈るかはあらかじめ親と相談しておく。クリスマスはキリスト教の習俗ではあるが、現代日本では一般的な年中行事に組み入れられている。そして多くの子どもはサンタが実在するかどうか、疑ったり、信じようとしたり、迷う時期がある。ほとんど宗教性は乏しいものの、もとは宗教的な性格をもったこの習俗を、幼児をもつような家族構成の人たちをターゲットにして行った企画である。

この講演は、現代の日本人がどのような場合に宗教的習俗に強く反応するかについて興味深い事例を提供するものであった。つまり、研究者が宗教的習俗と呼ぶものは、実は多くの人にとって宗教性は日ごろほとんど意識されない。しかし、こうしたイベントにおいては、そうした要素があった方が、人々の心をつかみやすいということである。

なお、この講演会の後、学術メディアセンター5階の06会議室で、ワークショップ「宗教文化教育の教材を探る」が開催されたが、講師の井門隆夫氏もこれに参加した。観光と、宗教文化との関わりを再認識するとともに、学生に宗教文化という問題を身近なものとして受け止めてもらい、関心を深めてもらうための具体的な方法についての討議がなされた。

(井上順孝)



井門隆夫氏

## 「近世国学の靈魂観をめぐるテキストと実践の研究」プロジェクト 相馬地方調査報告

### 目的および計画

「近世国学の靈魂観をめぐるテキストと実践の研究」というプロジェクト名を掲げる当研究事業では、陸奥国相馬地方（福島県南相馬市）の気吹舎門人・高玉安兄の生家に所蔵されていた、幕末・維新期の平田鏡胤書簡の翻刻作業を進めてきた。高玉家の書簡は、「相馬地方における平田鏡胤書簡（I）～（VI）」として『日本文化研究所紀要』の誌面に掲載されているが、現在は、改めて公刊する際に読者の理解を助けるべく、難読文字の再確認とともに、年代推定・語句の説明といった書簡の内容に関する検討を行っている。2010年度は高玉家旧蔵書簡の整理については、前年度から引き続いて平田鏡胤差出分の再翻刻作業を進め、特に、語句の註釈・索引作成のための準備が進展した。また、当プロジェクトでは、平田鏡胤書簡の翻刻・年代推定を行い時系列で並べ、隔週で開催する研究会にてメンバー同士で読み合わせも実施した。年度内にデータ化したものの全てを確認することはできなかったが（全体の8割程度確認済）、以前活字化した際の誤読の発見や難読文字の比定など、データの精度を上げる成果を見ている。

相馬地方の気吹舎門人の特徴としては、社家の割合が多いことが知られており、国学の靈魂観の問題を实践面と深く関連付けて検討することが可能な対象でもある。高玉家旧蔵の書簡類には、高玉家以外の相馬・奥州の気吹舎門人たちに関する話題や、地域の動向が多く記されている。こうした記述をより深く理解するために、2011年3月9日から11日

にかけて、相馬周辺の門人たち（特に社家）に関する資史料の調査と巡見を計画し、実施した。なお、参加者は松本久史（研究代表）、遠藤潤の兼担・専任教員と、小田真裕、小林威朗の研究補助員および共同研究員の三ツ松誠の計5名であった。

### 神社の巡見

訪れた神社は以下の通りである。気吹舎門人関連の神社としては、高玉安兄が奉仕していた相馬小高神社（南相馬市小高区小高字城下173）および貴船神社、益多嶺神社甲子大国社（同市小高区大井宮前144）（田代三河）、蛭澤稻荷神社（同市小高区蛭沢字広畑175）（佐藤大和）、日鷲神社（南相馬市小高区女場字明地159）（西山伊賀）、熊野神社（同市小高区北鳩原字不動前133）（半谷日向）、白旗神社（同市原町区堤谷）（鈴木石見）、稻荷神社（同市小高区飯崎）（只野土佐）、標葉神社（双葉郡浪江町大字苅宿字鹿畑128）（苅宿伊豆）である。そのほかに、相馬領の主要な神社として、多珂神社（南相馬市原町区高字城ノ内）、相馬太田神社（同市原町区太田館腰139）、涼ヶ岡八幡神社（相馬市坪田字涼ヶ岡51）、相馬中村神社（同市中村北町140）も踏査した。

### 式内社をめぐる論点

これらの神社の歴史を概観すると、高玉安兄を中心に組織された相馬領の気吹舎門人社家には、興味深い共通点が浮かび上がってくる。それは「式内社」比定についての問題である。近世中期以降、全国各地で地域の学者



や神職による地元地域の式内社がどこであるかの研究が盛んになってくる。遠江国の国学者による式内社比定の事例について、かつて拙稿をものしたこともあるが（拙著『荷田春満の国学と神道史』弘文堂、2005年所収）、東北においては、17世紀後期に保科正之の実施した会津藩領の式内社調査が時期の早いものとして知られている。相馬藩でも文化12（1815）年に式内社調査が行われている。

その調査に際して、安兄の父である高玉丹波は、自身の奉仕する貴船神社こそ、行方郡の式内社八社のうち唯一の名神大社、多珂神社であるという主張を展開した。一時は認められるものの、再調査の結果、現在の多珂神社こそが式内社であると藩に認定されたため、高玉の主張は結局は認められなかった（式内社研究会『式内社調査報告』第14巻、皇學館大学出版部、1986年、914～919頁参照）。また、門人の田代氏が奉仕する益多嶺神社は、現在でも「甲子大国社」と通称されているが、文政期に益多嶺神社と称したという（小高町『小高町史』1975年、855頁）。おそらく文化12年の調査に際して田代氏が主張し、こちらは高玉のケースとは違い、そのまま藩に認定されたようである。ほかにも、苅宿伊豆（俊彦）が神主であった天王社（標葉神社）が、幕末期に式内社「標葉郡苅野神社」であると主張したケースも見られる。なお、苅宿伊豆は安政6（1859）年に藩の許可を得ずに吉田家から「大宮司号」を取得して藩から処罰され、職を奪われて子の玄蕃がそれを継いだという（浪江町教育委員会『浪江町史』1974年、417頁）。蛭澤稻荷神社も式内社「冠嶺神社」と称していた時期があったことも窺われる（『小高町史』861頁）。なお付言すれば、同社の神道護摩壇は國學院大學伝統文化リサーチセンター資料館に展示されている神道護摩壇のモデルでもある。

このように、高玉と関係する社家の奉仕する神社の多くが、自社を式内社であると主張

している。この事実が意味するものは何か。高玉安兄が気吹舎に入門した経緯は不明であるが、この文化～文政年間の相馬藩式内社調査にともなう争論が影響した可能性も推定される。また、門人の多くも式内社を主張していることも、その学問的な裏づけとして平田学を受容しようとした目的の一つであったかもしれない。今後、関係史資料を分析し、慎重に検討を加えていくこととしたい。

## 墓地

高玉家および苅宿家の神葬祭墓地も訪れることができた。益多嶺神社の近傍にある高玉家の墓地は近年改葬されており、当時の状況は分からなかったが、安兄やその子篤義などの生没年等は確認することができた。苅宿家については、中世からは姓は阿部氏であったが、天保12（1841）年に苅宿氏に「復した」とされ、『旧事紀』に記述される染羽国造足彦命の子孫と自称している（『浪江町史』、418～419頁）。浪江町にある苅宿家の墓石（口絵参照）にも「染羽国造」としっかり刻まれている。なお、福島県の民権政治家として著名な苅宿仲衛（安政元年；1854～明治40年；1907）は、玄蕃俊昌の子である（『浪江町史』、532頁）。このように、墓碑に注目してみても、歴代の社家として、「復古」の意識を垣間見ることができよう。これは同時に式内社の主張とも根底は共通しているとも考えられよう。

今回の調査では、引き続き3月12日に福島県歴史資料館にて、相馬地方を中心とした地方史料の閲覧を行い、銚胤書簡における話題の背景を探る予定であった。しかし、11日の14時46分に発生した東日本大震災により、調査自体を中断せざる得なくなった。われわれは中通地方の桑折町で震災に際会したのだが、幸いにして、調査メンバー全員が怪我もなく無事に帰着することができた。その

際、多くの方々にご心配と労いの言葉をいただいたことに改めて感謝したい。しかし、踏査した地域、特に相馬市、南相馬市の海岸部は、津波による甚大な被害を受け、多くの人々が犠牲になった。謹んで哀悼の意を表したい。

#### 相馬地方を再訪して

現在は、高玉安兄関連の門人社家の奉仕した神社は、全て東京電力福島第一原発の半径 20 キロ圏内の警戒区域の中にあり、立ち入ることができない状況になっている。2011 年 7 月 22 日から 25 日にかけて、「野馬追祭」が実施され、犠牲者の追悼と復興を地域の人々が祈念する様子はテレビや新聞等によっても報道された。松本は祭りにあわせて南相馬市を再訪したが、高玉をはじめ、門人社家の神社については、残念ながら状況を確認することはできなかった。同祭は本来であれば騎馬戦や甲冑騎馬行列などが催され、全国からの観光客も多い祭りであるが、それらは中止もしくは期日が短縮され、今回は 3 月の調査でも訪れた、相馬中村神社、相馬太田神

社、相馬小高神社の「三妙見」の神社祭礼を中核とし、規模を縮小したものとなった。ただし、かつて高玉安兄が奉仕した小高神社だけは、20 キロ圏内のため、圏外ぎりぎりに立地する近傍の多珂神社の境内を借りて小高神社の例祭が執行された。まさに、かつて高玉が式内社論争を挑んだ神社で小高神社の祭礼が行われたことにつき、深い感慨を禁じえない。野馬追祭に懸ける地域住民の篤い思いを目の当たりにして、現在でも多くの人々が避難所・仮設住宅暮らしを余儀なくされ、三重四重の苦難を受けているこの地域の人々にとって、神社の祭りは復興を期する人々の心の支えになっているのだ、と感じるところがあった。また、当該地域を調査対象とするわれわれも、歴史史料を保存し、次世代へ継承することにより、地域の復興の一助としたいという願いを強く持っている。

最後に、災害からの復興のために、われわれ人文系の研究者のできることを、一つ一つ考え、実行することが求められていると痛感していることを付け加え、筆を置きたい。

(松本久史)



馬を神前に奉納する上げ馬神事  
(多珂神社 (福島県南相馬市) 境内)



打上げられた漁船  
(福島県南相馬市)



## 宗教文化士資格認定制度の意義と展望

土屋 博

### 1. 学術的意義

今年の初めに、宗教文化教育推進センターの事業として「宗教文化士」資格認定制度が発足することになったが、その意義はさしあたり二つの面で確認できるであろう。一つは、20世紀後半以降の宗教学の新たな展開を受けた学術的意義であり、もう一つは、現代日本社会の諸問題を見据えた実践的意義である。しかしこの二つの区分は、見方を整理するための便法にすぎず、両者は本来切り離されるべきものではない。実践的試みは学術的認識によって裏付けられねばならず、また学術的認識は実践の結果をその都度反映するものとして、たえず更新されていかなければならない。したがって両者は相互媒介の関係にあり、そのさいの重要な媒介項として機能するのが「教育」である。ところが、教育はきわめて幅の広い概念であり、ここにはさまざまな政治的・社会的動機が影響を及ぼすので、センターの試みは、教育界およびその周辺領域から、単に「宗教学的」立場からの主張にすぎないとして相対化されてしまう可能性もある。したがってセンターの今後の活動は、その種の批判をも念頭に置きながら、理論的・実践的に息の長い展開を図っていく必要がある。

しかしながら、この制度の発足をもたらした学術的面からの要請に目を向けるならば、これが単なる特殊な思いつきにとどまらないことが分かるであろう。ここで「宗教文化」という概念が用いられた背景としては、20世紀後半以降国際学界のレベルで繰り返してり上げられてきた問題、すなわち、伝統的な「宗教」概念は再検討されなければならないとする問題が意識されている。この問題提起は、たまたま欧米の研究者から発せられたものであったが、欧米文化特有の価値観を無意識のうちに普遍的なものであるかのように錯覚し、学術用語と結びつけてきた従来の宗教研究に対する反省がその根拠となっていた。そうした反省は本来日本やアジアの学界から主張されて然るべきものであったが、国際的に宗教概念再検討の推進役となったのは、実は欧米のイスラーム研究者であった。現代の政治的・経済的状况からすれば、これは当然のことと言えるかもしれない。その中であって、ここでの試みのように、「宗教」を一段と幅広く動的にとらえなおすべく「宗教文化」という視点を導入することは、まだ国際的な学術用語として定着しているわけではないとしても、日本文化になじみやすい発想に根をもつ一つの問題提起となるであろう。この概念は、今後予想される若干の抵抗との折衝を経て、国際的論議にも寄与することができるのではないかと思われる。そのためにはまず、「スピリチュアリティ」などと共に、これを作業仮説として積極的に用いてみる必要があるであろう。当センターにはそのような役割を担うことが期待されていると思われる。

「宗教文化」という言葉を積極的に用いることは、「宗教」概念再検討の流れをくむものとはいえ、この名称でくくられる特定の研究分野を想定して、それを単純に「宗教」と置き換えようとするのではない。宗教は元来文化の次元で表出されるものであるとすれば、宗教

文化という言い方は、その媒介項を意識化して表現しなおしたものにすぎないとも言える。しかしこれによって宗教は、閉鎖的な実体であることをやめ、他の諸文化の表現形態と共通する地平へ自らを開いていくものであることが確認される。そこでは固定的ではないとしても、あくまで宗教文化という枠が想定されているわけであるから、宗教現象を文化の中へ完全に溶解させてしまうわけではない。ただしこの場合には、枠の境界がたえず脱領域的に広がっていく可能性が含まれているのである。教典や信条あるいは教団組織によって、枠の境界の安定とアイデンティティの確立に努力してきた既成宗教集団も、実際にはそうした可能性を完全にぬぐいさることはできなかった。グローバル化が進む現代においては、既成教団の境界設定がますます困難になりつつあるという状況認識から、宗教概念再考の気運が必然的に高まってきたのである。

さらに、宗教文化概念が浮かび上がったもう一つの学術的な背景は、第二次世界大戦後の日本宗教学会の歩みであった。日本宗教学会では、戦後いち早く、宗教教育に関するキャンペーンを繰り広げた。その動機としては、すでにそれまである程度の実績を上げてきた各種宗派立学校の立て直し、および、戦後の青少年をとりまく社会的環境に対する憂慮などがあったのではないかと思われる。その成果は積極的な講演会活動に始まり、数冊の著作となって結実した。しかし議論が進むにつれて、問題の難しさも明らかになり、容易に合意を見出すことはできなかったが、日本宗教学会を中心とする調査・検討は、それなりの実験的試みをも生み出していった。宗教教育の問題を片手間に扱う教育学研究よりも、宗教学からのアプローチは宗教現象を真正面から見据えるだけに、宗教教育論を深化させたのではないかと思われる。宗教文化教育という言い方は、そうした探究の歩みの中から、一つの可能性の方向として提起されたものであった。これによって宗教をめぐる学術的研究は、教育を媒介として実践的活動とも結びついていくことになる。

## 2. 実践的意義

教育学界の働きをも含めて従来の宗教教育論は、宗教教育を三つの場面に分けて考えようとするのが常であった。宗派教育・宗教知識教育・宗教的情操教育という三区分別がそれである。しかしこのやり方は、それぞれの区分を固定化してとらえるという結果をもたらし、議論の進展のためには必ずしもプラスに働くものとはならなかった。特に宗教的情操教育という概念はきわめてあいまいであり、これをめぐる理解の相違は、宗教教育論全体の停滞につながっていった。その相違を生じさせた原因は、何よりも政治的動機の介入であり、特定の政治的立場に通じる道徳教育が、宗教的情操教育と同一視されたことであった。この見方は形を変えて繰り返し現れ、そのたびに不毛な論争が起こることによって、結局一般には、宗教教育そのものに対する関心が薄れていった。また宗派教育について考えることは、とりあえず各宗派立の学校に任された形になったが、そのために公共的場面での話題とはなりにくくなった。しかも任された宗派立学校では、宗派教育が効果的に展開されたわけでもなかった。要するに結果的に見れば、三区分別そのものに問題があったのであり、なかんずく宗教知識教育の位置づけが十分に考慮されなかったことが、事態の行き詰まりの原因になったのではないかと思われる。

三分法は、元来相互に関連していた宗教教育の諸側面を、単純に切り分けてしまったよう



に見える。「宗派教育」は、価値観にかかわる宗教教育本来の部分をそれぞれの具体的教団と結びつけ、各教団の歴史的特徴と共に、全体としては相対化してしまった。そのため宗派と結びつかない国公立の教育機関では、教育に関わる価値的問題を主体的に取り上げる機会を失うことになった。また、宗派立の学校でなされる宗派教育は、本来「宗教知識教育」と重なり合うべきはずのものであったが、いつのまにか自派に関する狭い護教的知識に視野を限定していった。そうなると、宗教集団が相互に交流する現代社会にあっては、当然効果を上げることができない。さらに「宗教的情操教育」は、この概念を用いるとすれば、広い具体的な宗教知識に基いて公認されなければならないものであるにもかかわらず、その手続きが欠落していったために、ひたすらわかりにくくならざるをえなかった。そこに比較的単純な政治的主張が入り込む余地が開かれたのである。

宗教概念の再検討へ向かう学界の研究動向は、教育の場にそくして言えば、宗教教育三分法を考えなおすよい機会であると思われる。今日宗教教育を考えなおすために最も重要な視点は、最終的には「宗教知識」をどうおさえるかということであろう。宗教概念が流動化し、「宗教的なもの」をも考慮に入れなければならないことになれば、宗教知識の範囲はおのずから拡大する。また、従来しばしば歴史的な知識に限定されがちであった宗教知識は、現代的な問題意識から再編成される必要が生じる。「宗教文化」概念の導入は、このように宗教知識を拡張し、動的にとらえ直すためにはかなり有効なのではないかと思われる。ここには、狭い意味での教団活動だけではなく、また観念的な教義や信念だけではなく、個人のふるまいをも含めた広い意味での宗教的行動が想定されている。各種の芸術活動や社会的イベントとなった宗教儀礼なども、「宗教文化」の一環と考えられる。宗教教育はこれを踏まえるところから出発することによって、新たな地平を切り開いていくことができるのではないだろうか。

従来の三分法の問題点が、宗教的情操教育を宗教知識教育から切り離れた点にあるということは、すでに指摘したとおりである。日本の教育における知育偏重を批判する論者は少なくないが、こと宗教教育に関しては、これを声高に言い立てることは、宗教集団につきものの没知性主義を増長させることにつながる。この没知性主義は、批判的な意味で用いられた「ファンダメンタリズム」の特徴でもあり、宗教集団にしばしば見られる社会的マイナス面と結びつきやすい。宗教的情操教育で本来期待されるべきことは、宗教知識教育をおろそかにする方向ではなく、むしろ具体的・現実的な宗教知識を豊富に積み重ねながら、歴史を通じて人類が蓄えてきたプラスの知恵を学びとることだったはずである。本当は、宗教知識から宗教的情操へ向かう道が、いつのまにか無意識のうちに開けてきて然るべきなのである。しかし、「宗教的情操」という言葉自体が元来翻訳語であったことにもよるのか、そのニュアンスがずれていった。このさい宗教知識をあらためて宗教文化知識としてとらえ直すならば、その柔軟性が既成宗教集団の守備範囲を不明確にするという教団側の懸念にもかかわらず、少なくとも宗教知識と考えられてきた内容を一段と現代の人間の現実に近づけることによって、宗教教育論を再活性化するきっかけが生まれるのではないかと思われる。

### 3. 今後の展望

以上述べてきたような情勢分析に基づき、宗教教育を宗教文化教育として定位するときには、そこで扱われる問題の範囲は広がり、「非宗教的」領域との境界も流動化する。その結果、宗教知識教育が一般的価値や心情の問題にもごく自然に立ち入ることになり、宗教教育をめぐる論議の硬直化を避ける可能性が開ける。ただし、宗教文化に関する知識は広範にわたり、しかもたえず進む異文化相互交流の様相をもとりこんでいかなければならないので、これを知識として認識の対象にまで体系化するのは容易ではない。そのため実現を危惧する意見は絶えず、日本の教育界の現状を見る限り、それにも確かに十分な根拠がある。そこで、そうした難題を打開するきわめて現実的な方策として提案されたのが、今回発足した宗教文化士資格認定制度である。これは宗教文化教育の実現へ向かう一種の実験的刺激剤であり、まず宗教文化に関する知識の必要性を、実際の現場から掘り起こそうとするものである。もしこの制度の実施を通して、日本の宗教教育が一步新たな展開を遂げるならば、その現れ方如何にかかわらず、さしあたり制度の目的は達せられることになる。

しかしながら他方、宗教文化士資格認定制度の実施と並行して、宗教文化に関する知識の整理と体系化を進めることが当然求められる。それは、この制度にふさわしい教材の開発という形をとるのが適当であろう。最近時代の要請に対応して、宗教入門書的なものが書店にあふれている。ところがその内容は玉石混交であり、出版社の安易な商業的企画に踊らされた際物も少なくない。そこで、それらを分別することがまず必要になるとともに、新たな共同研究に基く望ましい教材の作製が急がれる。幸いにして、比較的大型の科学研究費補助金の受領が、その作業を可能にしてくれるであろう。視聴覚教育は今日、情報技術の発達により、思いがけず多様な広がりを見せている。これからの教材開発は、この新しい可能性をもたえず視野に収めておく必要がある。さらに教材の作成にさいしては、現に学校で使用されている教科書に対する評価も欠かすわけにはいかない。ここには意外に初歩的な誤解も少なからず存在することが、すでに指摘されているからである。その点での啓発活動も、宗教文化教育推進センターの重要な使命となるであろう。

ここで「誤解」とか「啓発」とかいう言葉を用いたが、それはあくまで、事実をめぐる知識に関してのものであることを確認しておかなければならない。これを安易に宗教的な価値や信念に対して用いることは避けるべきであろう。宗教文化教育は、「正義の宗教と邪悪な宗教」・「良い宗教と悪い宗教」・「真の宗教と偽の宗教」等々を識別することを目的とするものではない。確かに宗教集団が時折、社会的に見て多くの人々に被害をもたらすような行動にはしる場合があることは事実である。しかしそれは必ずしも特定教団のもつ本質的な属性であるとは限らない。程度の差はあるとしても、「正義の宗教」と考えられている教団が、立場如何によっては似たような行動を示すこともありうる。そうした行動を裁くのは別の公的な社会制度の役割であり、そこではあくまで、その都度の行動の結果を法に照らした上で、冷静な判断がなされるはずである。宗教文化教育は、そこに至る一步手前のところで、宗教的なものに関わる人間が、広い知識に基づいて自ら適切な選択をすることをうながすものである。ただしそのさい注意しなければならないことは、宗教的なものに関わる人間とは決して特殊な人間ではなく、すべての人間がこれに含まれるということである。その点をしっかりと押さえておかないと、宗教教育論の停滞は再びふりだしへ戻ってしまうであろう。

従来「宗教」という概念を用いて理解されてきた人間の営みに、現代的な観点からもう一度普遍性を取り戻すために導入された「宗教文化」概念は、作業仮説として実際に用いてみることによって、はじめてその効力が確かめられることになる。「宗教文化教育」は、そのための第一歩にならうとするのである。宗教学が教育の領域にまであえて踏み込もうとするのは、自らの扱う「宗教」が、人をして人たらしめる「信」のたたずまいに根差しており、その理解をめぐる混迷は、まさに現代日本社会に増殖しつつある混迷に通底しているのではないかと考えられたからである。とは言うものの、いきなりカリキュラムなど具体的な学校教育制度に手をつけるわけにはいかず、また多くの屈折が予想されるそのための議論にかかわることも、必ずしも実りをもたらすとは思われない。宗教文化教育推進センターが試みようとしているのは、多様な宗教現象を誘発する人間存在をめぐる根底的問題を視野におさめながらも、ごく日常的で些細な感覚から出発して、その問題の具体的なあり方を探り出そうとすることである。宗教文化教育はそれを目ざすのであり、宗教文化士資格認定制度は、そこへ向かって一つの現実的くさびを打ち込もうとするものである。この制度によって、宗教文化という表現でゆるやかにくくられる知識が、思いがけず豊かな内容をもってわれわれの生活に深くかかわっており、しかも、われわれが生きる上で避けられない問いを含んでいるという認識が広く共有されていくことが期待されている。しかしその期待が満たされるためには、各方面からのご理解とご支援が不可欠であることは言うまでもない。



## 宗教文化士制度発足への歩み

井上順孝

はじめに

2011年1月9日に宗教文化教育推進センターの発会式が國學院大學学術メディアセンターで行われた。これは宗教文化士制度が2011年度から正式に発足することになったが、その運営を行うセンターとなるものである。宗教文化士制度については2010年に刊行された本年報3号において、その趣旨の概略を述べておいた。その後、宗教文化教育推進センターの設置と陣容が正式に決まり、2011年11月13日に第1回認定試験を実施することも決定した。第1回の認定試験は同年6月26日になっていたが、3月11日に起きた東日本大震災の影響をかんがみ、第2回の試験日に予定されていた11月13日を第1回とすることにしたのである。

この制度が発足するにあたっては、数年にわたる調査・研究や、さまざまな試行錯誤的な努力が積み重ねられてきた。日本宗教学会と「宗教と社会」学会という宗教学関連の2つの全国学会が関わってここに至ったわけであるので、その歩みがどのようなものであったのか、その経緯を時間軸に沿って整理しておきたい。

### 1. 宗教教育プロジェクトによる調査・研究を足場に

宗教文化教育という発想は、國學院大學日本文化研究所のプロジェクトとして1990年から2001年まで12年間にわたって行われた宗教教育の成果を踏まえ、得られた知見を現実の学校教育の中にどのように活かしていけるのかを検討する中に生まれたものである。

宗教教育のプロジェクトは2期にわたった。第1期にあたる1990～95年度は「宗教と教育に関する調査研究」というテーマであった。これは現在の日本の宗教教育の現状を調べるための基礎資料や基礎的データの収集が中心的課題であった。広範な資料収集の成果は日本文化研究所編『宗教教育資料集』（鈴木出版、1993年）に収められている。また1995年には「宗教と社会」学会の宗教意識調査プロジェクトと合同で、学生を対象にした数千人規模の全国的な宗教意識調査が開始された。以後、この調査は継続的に実施されることになる。

第2期（1996～2001年度）は「宗教教育の国際比較」がテーマであった。台湾、マレーシア、ドイツなどとの比較も検討され、予備的な調査も個人的には行った。ただ、広範な国際比較はその段階では困難であると判断し、韓国との比較研究に的を絞った。この時期の研究成果は、國學院大學日本文化研究所編『宗教と教育』（弘文堂、1997年）、国際宗教研究所編『教育のなかの宗教』（新書館、1998年）などに収められている。

1995年から始められた学生に対する宗教意識は2001年までは毎年実施され、その都度報告書が作成された。それ以後は2005年、2007年、2010年に実施され、現在までに10回実施された。韓国の大学でもほぼ同じ内容のアンケートを4回実施した。1999年、2000年、2005年、2007年である。これもすべて報告書が作成された。

2002年3月にプロジェクトは終了したが、その前年の2001年2月に釜山の東西大学校に



において国際シンポジウムを開催し、日韓の宗教教育の現状と今後の展望について討議した。2002年6月には関西学院大学で開催された「宗教と社会」学会・学術大会のワークショップにおいて、「公教育における宗教教育」をテーマとする議論を行った。こうした過程で、今後、宗教について基礎的な知識を得て、国際的な視点から理解を深める教育を公立学校においても行う上では、「宗教文化教育」という視点を導入することが適切なのではないかという着想を得た。宗教教育プロジェクトのメンバー、その他の研究者の中にも、この考え方に賛意を表する人が一定程度出てきた。

## 2. 学会としての取り組み

その後、宗教文化教育というものの位置づけについて考察を続け、基本的構想が固まった。たんに宗教文化教育という概念を提起するだけでなく、大学教育で学生が意欲を持って取り組めるような仕組みを作ることが重要であると考えに至った。そしてその前提としては、それが現代日本社会においても、一定の意義が認められるものでなければならない。

こうしたことは少数のメンバーでの議論にとどめておくべきものではないので、学会レベルで討議するのを感じた。そこで、下準備の期間を経たのち、「宗教と社会」学会の常任委員会に打診し、計画に関して基本的に了承を得た。2007年6月の総会で、宗教文化教育を推進するための資格制度について議論するワーキンググループの結成を承認してもらった。メンバーは、磯岡哲也、稲場圭信、櫻井義秀、佐々木裕子、中牧弘允、山中弘の各氏と私であり、私が責任者となった。

一方、日本宗教学会にもはたらきかけ、当時学会長であった星野英紀氏に相談し、同年7月の理事会で「宗教文化士（仮称）検討委員会」の設置を承認してもらい、同年9月の総会でも承認された。委員会のメンバーは、大村英昭、澤井義次、塩尻和子、田中雅一、土屋博、藤原聖子の各氏と私で、私が委員長となった。

資格の名称についての議論も始まり、当初は「宗教文化教育士」という案もあったが、「教育士」という語感はあまり適切ではないのではないかということで、結局「宗教文化士」ということに落ち着いた。委員会の設置が決まると、社会調査士の設置にかかわった経験を持っている大村英昭氏より、調査・研究を推進するために科学研究費補助金を申請してはどうかという案が出され、翌2008年度からの申請を出すこととなった。

かなり大がかりなプロジェクトであるので、基盤研究（A）で申請するのが適切であるということで、日本宗教学会会長である星野英紀大正大学教授を研究代表者にお願いすることとし、2008～2010年度の3年間の計画として申請した。研究テーマは「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」であった。「宗教と社会」学会のワーキンググループのメンバーと、日本宗教学会の検討委員会のメンバー、そして新たに若干名に研究分担者あるいは連携研究者として加わってもらった。申請書には、最終年度には宗教文化士の制度を発足させることを目指すことを明記した。申請は採択され、約30名のメンバーからなる調査・研究が2008年度からスタートすることとなった。

## 3. 科学研究費補助金費による調査・研究

応募した科研費の採択により、研究・調査は新たな段階にはいった。3年の間に具体的な成果を出すための計画を練り、その結果、次の7つのサブ・グループを置くことにした。そ

れぞれで個別の課題を設定するとともに、相互の協力により、全体として研究目的が達成できるような組織を考えたのである。

- (1) 宗教文化教育の実質化のための総括的研究を行うグループ（幹事 星野英紀）
- (2) 宗教文化教育の教材についての調査・研究を推進するグループ（幹事 井上順孝）
- (3) 宗教文化士の資格を目指すときのカリキュラムを研究するグループ（幹事 藤原聖子）
- (4) 宗教文化士に関する社会のニーズと学生側のニーズを調査するグループ（幹事 弓山達也）
- (5) 日本に到来している国外の宗教の概要を調査するグループ（幹事 三木英・櫻井義秀）
- (6) 国外の研究者との研究交流により、国際的ネットワークを形成するグループ（幹事 稲場圭信）
- (7) 宗教文化教育に関連する国外の状況を研究するグループ（幹事 塩尻和子）

7つのグループの役割を簡単に説明する。第1グループは、研究の全体的統括を中心的課題とする。第2グループ以下の6つのグループが行った調査・研究を全体会議によって検討し、相互に理解を深め、成果を共有できるように図っていくことが主な役割とされた。

第2グループは、宗教文化教育を推進する上で不可欠な、教材についての調査・研究が担当であった。どのような教材が使われているかの現状調査とともに、これからどのような教材が必要になるか、とくに情報時代における宗教文化教育ということを念頭において研究が行われた。

この他、ニュースレターの刊行とホームページの運営も第2グループを中心に行われた。ニュースレターは3ヶ月に1回発行され、日本宗教学会の理事会メンバー、「宗教と社会」学会の常任委員に送付されるとともに、関連する大学にも送付された。同時にPDFファイルとしてホームページからもダウンロードできるようにした。研究遂行期間中に10号を刊行した。

教材に関する国際研究フォーラムも開催された。2008年10月26日には國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所と共催で、「ウェブ経由の神道・日本宗教」をテーマとしたフォーラムが開かれた。2009年9月20日には「映画の中の宗教文化」をテーマとするフォーラムが開かれた。2010年には第6グループと共催で「イスラームと向かい合う日本社会」をテーマとするフォーラムとなった。いずれも國學院大學学術メディアセンター（AMC）が会場であった。

第3グループは、宗教文化士に対応する大学のカリキュラムを考えるグループで、各大学にアンケートを実施するなど、現状の把握を行った。これにより、現在、宗教学関連の講座をもつ国立の大学や宗教系の大学などで宗教学関連の講義がどのようなシラバスになっており、どのような点が課題として教員に感じられているかの概要が得られた。これを踏まえ、2010年9月2日には、大正大学で、シンポジウム「宗教学教育の現状と課題—宗教文化士制度発足に向けて—」が開催された。

第4グループは、この制度がはたして社会や学生にどの程度ニーズがあるかを調べるための調査・研究を担当した。学生に対するニーズ調査は第2グループと共同で、初年度の2008年秋に実施された。この結果は次節で簡単に紹介する。

第5グループは、日本に増えつつある外国からの宗教の実態調査などの担当である。戦後しばらくまでの時期であると、外国から到来する宗教といえば、大半がキリスト教かキリスト教系の新宗教などであった。しかし、最近ではイスラーム圏からのムスリムも少しずつ増え、2010年時点で、日本全国に約60のモスクが建てられるまでになった。今後も増加すると予想される。またキリスト教も欧米からだけでなく、韓国からの布教が増えている。フィリピン、南米からの労働者の増加によりカトリック教会に来る外国人が増えた。このように日本の宗教事情が複雑になっているので、これに関する基礎的な資料・データの収集と、実態調査が行われた。

第6グループは、国際的研究ネットワークの形成であるが、宗教教育は欧米をはじめ、いくつかの国で関心の強まっているテーマであることを考慮している。宗教教育に対する関心が深まっている理由は国により異なるが、似たような問題を抱える国の研究者との学術交流は、日本における問題点を明らかにする上でも必要である。国外調査を実施する一方、2009年8月10日には国立民族学博物館で国際シンポジウム「大学における宗教文化教育」が開催され、ネットワーク形成の促進に努めた。

第7グループは、国外の研究文献を調べるとともに、第6グループとの緊密な連絡のもとに国外の研究者との情報交換を行った。

この他、社会の側、あるいは他の研究分野の研究者がこうした試みをどのように受け止めるのかを探るために、研究会を立ち上げた。「海外勤務経験者の話を聞く会」と「宗教文化を広い視野から考える研究会」である。これは第2グループが中心ではあったが、他のグループとも綿密に協力してなされた。実際に海外勤務の体験をもつ人たちの体験談は、宗教文化として何をどのような視点から教えていくかについて、具体的な示唆を得られるものであった。「宗教文化を広い視野から考える研究会」では、文学、建築学、法学、音楽学など、多様な領域の研究者と宗教文化の問題について議論する機会となった。

研究成果は、ニュースレターやホームページによって、その都度公開するようにしたが、日本宗教学会と「宗教と社会」学会の学術大会の折には、パネルなどを組んで、研究の進展について報告した。2008年9月14日には、日本宗教学会第67回学術大会のパネル「情報時代の宗教文化教育の教材」を通して議論を行った。2009年6月7日には、「宗教と社会」学会第17回学術大会のテーマ・セッション「教育資源としての〈宗教文化〉」で議論した。

#### 4. ニーズ調査の結果

2008年秋に実施された学生のニーズ調査は38の大学で実施され、5,005名の有効回答を得た。その結果は、2009年2月に刊行された『宗教文化教育に関する学生の意識調査報告書』に紹介されている。さらに同年9月刊行の本年報第2号にも、それを分析したものが論文として掲載されている(拙論「学生における宗教文化教育への関心について—2008年度アンケート調査の分析から」参照)。

このアンケート調査の目的は、学生の間で「宗教文化士」という制度がどの程度肯定的に受け止められるのかを、早い段階で調べることが第一にあった。それと同時に宗教文化教育の内容として期待されていること、あるいは求められている授業はどのようなものかも把握することもあった。

結果は予想以上に積極的な反応であった。とくに注目されたのは、宗教文化士という制度

が発足した場合に、この資格をとりたいと思うかどうかについてであった。

宗教文化士に関して、「大学で一定の単位（12～20単位程度）をとり、最終試験に合格した場合に、宗教文化士の資格を与える」という計画があることを示したのち、「あなたはこの資格をとりたいと思いますか。」という形の質問を設けた。回答の選択肢は、「とりたいと思う」、「条件によってはとりたいと思う」、「あまりとりたいとは思わない」、「とりたいと思わない」の4つであった。

「とりたいと思う」と答えた学生は14.5%で、「条件によってはとりたいと思う」と答えた学生が42.9%で、合わせると57.4%となった。「とりたいと思わない」というはっきりとした否定的な回答は16.9%であった。条件としては、単位数と検定料を想定していたが、提示した条件のままですべて受けたいと回答した学生が14.5%、727人いたということは、事前にメンバーの間で予想された数値より高いものであった。

また宗教文化に関するどのような授業を受けたいかについては、具体的に11のテーマを提示し、複数回答で選んでもらった。その結果、ベストスリーは、「世界の神話」（60.7%）、「宗教が文学・音楽・美術・建築・映画などの文化に与えた影響」（52.0%）、「生き方や死後の世界などについての、それぞれの宗教の教えの違い」（47.2%）であった。

また講義によってどのようなことを知りたいかについては、次の5つの項目のうち、4つまでが80%を超える高い割合であった。

「外国人に日本の宗教のことを少しは説明できるようになりたいと思いますか」（70.5%）

「宗教によっては、食べられない食べ物があることを知りたいと思いますか」（82.5%）

「国際情勢を深く理解するために、もう少し宗教の知識を増やしたいと思いますか」（81.6%）

「宗教が関係した事件や紛争の背景を知りたいと思いますか」（85.5%）

「国ごとの宗教による人々の生活の違いを知りたいと思いますか」（87.1%）

これらは宗教文化教育が実際的に身につけられるようにと考える内容であるので、宗教文化教育の目的には学生の大半がそれを意義あるものととらえていることが分かる。

このアンケート調査の結果は、宗教文化士の制度やその目的・理念が、調査対象となった学生たちの多くにとっても、好ましいものととらえられていることが分かり、宗教文化教育に関する研究・調査の意義をより強く感じさせるものとなった。

学生たちの宗教文化の講義に対する要望の概要が分かると、宗教文化教育に関する大学の講義をどのように行っていくかについて準備をする必要性が強く感じられるようになった。それまでの「海外勤務経験者の話を聞く会」、「宗教文化を広い視野から考える研究会」に加え、2009年12月から、「宗教文化の授業研究会」を発足させた。國學院大學を会場にして、複数回開催し、研究メンバーだけでなく、宗教文化教育に関心を抱く研究者との意見交換を行った。調査結果の講義での使い方、カルト問題についてどう教えるか、映像資料を用いる上での注意点など、具体的な講義方法を紹介しながらの研究会であった。ある意味で昨今のFDをきわめて実践的に行ったともいえるものであった。宗教文化教育を実際に行うのは、大学の教員であるので、こうした試みは、制度発足後も継続的に行うことが必要になることは言うまでもない。

## 5. 宗教文化士の制度発足へ

各グループによる研究・調査により、宗教文化教育という試みは世界的にも初めてのもの

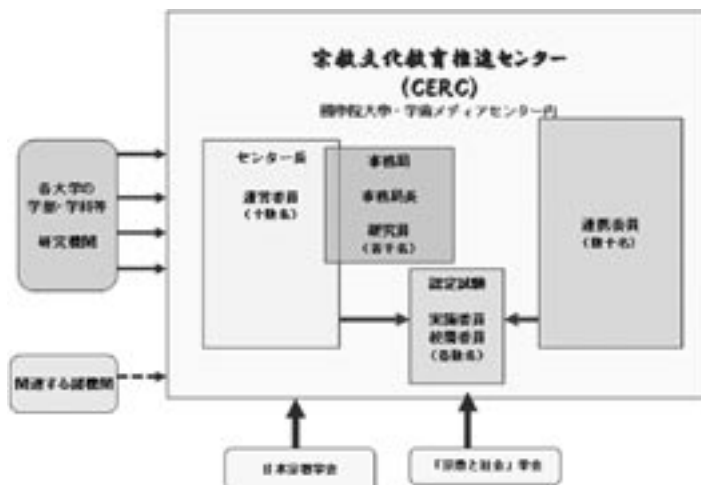


と言えることが分かった。グローバル化の進行する現代世界において、きわめて重要な意義をもつものであることが、メンバーの間でもしだいに強く確認されていった。ただ問題は、宗教文化教育を推進するためのシステムをどのように具現化するかである。いろいろな意味で、この課題に対処するインフラが十分とは言えない現状にあっては、一挙に大がかりな組織を設置しようとする、多大な困難が待ち受けていることも予測される。研究を続けるうちに、実現可能なプロセスを探り、すこしずつ充実させていくという方法をとるのが現実的であるという考えが、メンバーの間で共有されるようになった。

研究・調査の積み重ねと並行して、宗教文化士の制度設立のための具体的な方策の検討も開始された。設置場所、運営主体、認定試験の方法などについて検討がかさねられた。その結果、認定試験を行う母体として、宗教文化教育推進センターを設立し、事務処理を当面國學院大學学術メディアセンター内で行うことが決まった。センター規定も素案が固められ、おおよそ次のような機構が固まっていった（図参照）。

センターにはセンター長が置かれ、運営委員（監事を含む）、連携委員、事務局からなる。運営委員、連携委員には各大学の宗教学及び関連分野の教員があたる。事務局は事務局長と研究員若干名からなり、事務的な作業を担当する。日本宗教学会と「宗教と社会」学会という2つの全国規模の学会が認定試験に関して連携学会となる。認定試験は年2回行い、合格者には「宗教文化士」の資格を付与する。資格は5年間有効というものである。センターの置かれる國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所では、事業計画の中にセンターと連携して研究・調査を行っていくことをもりこんだ。

2010年1月24日には、公開シンポジウム「宗教文化教育に求められるもの」が國學院大學で開催されたが、このシンポジウムは、センターの設置と認定試験のスタートを前提としたものであり、社会の受け止め方を知るためにも、発題者にはさまざまな分野の人を招いた。認定試験のパイロット校の一つである東北大学の木村敏明氏の他、関西学院高等部教諭の澄田新氏、日本ユニシス株式会社 CSR 推進部長の多田哲氏、観光庁観光地域振興課地域競争力強化支援室長の坪田知広氏、東京大学文学部学生の長井恵美氏から、それぞれの立場から自由に意見を述べてもらった。4時間にわたる議論で、問題点が整理され、認定試験の実施方法についても、具体的なプランを描く段階に至った。





## むすび

以上のような経緯があって、科研による最終年度には基本的な案が固まり、2011年1月に冒頭に述べたように、宗教文化教育推進センター（CERC、略称サーク）の設置が実現したのである。初代センター長には土屋博・北海道大学名誉教授、また事務局長には井上順孝が就任した。運営委員、監査、研究員の人選も決まり、ホームページ上に公開した。また連携委員も依頼を進めた。

なお、CERCはCenter for Education in Religious Cultureの頭文字である。1月の設立記念会の様子は、スカパーの番組（ch.216「精神文化の時間」）で、2月24日（木）及び27日（日）のそれぞれ21:30～22:30に、『スタートする＜宗教文化士＞制度』というタイトルで放映された。

今後のCERCの活動にとって、國學院大學はきわめて重要な役割を担っている。パイロット校となっているのは、2011年度時点で次の8大学である。関西学院大学、皇學館大学、國學院大學、大正大学、筑波大学、天理大学、東北大学、北海道大学。むろん、これ以外の大学の学生、院生等も受験可能である。さらにこの資格のことを知った中等教育の教員からの強い要望もあって、教員にも門戸を開いた。第1回の認定試験の会場としては、首都圏は國學院大學となる。またCERCは当面は國學院大學に置かれる。この制度がどう展開するかは予測が難しいが、少なくとも宗教に関する豊富な講義を備えた國學院大學の学生にとっては、本学で学ぶ上でのインセンティブの一つになるはずである。

広く言えば、この制度は、さまざまな文化をになった人々が交流する度合いが高まる一方の現代世界における意義ということが想定されている。宗教文化士を目指す過程において、宗教文化の多様性を知り、それと向かいあう姿勢について考える機会をもつことは、文化間のコンフリクトを減らすことにおいて貢献できるはずである。もっとも、宗教文化の問題は一筋縄ではいかない。常に緊張とそして広い心をもって臨まないと、それ自身が新たな文化摩擦の原因ともなりかねない。心して将来に向かいたいものである。



## 心理学領域の資格をめぐる問題

齊藤こずゑ

1980年代に入って、心理学の領域では心理職の国家資格化のテーマが湧きあがった。この30年間にそれは実際に心理学領域内にさまざまな影響を及ぼし、その行方はますます混迷しつつ現在に至っている。筆者の専門領域は発達心理学であり、方法論や基礎発達の研究領域であるため、この国家資格化の中心となっている臨床心理学の領域からは少し距離がある。それでも、余波を受けていつの間にか「臨床発達心理士」という資格を持つ身分になり、仲間と会えば国家資格化の動向を話題にすることが久しく、それにも飽きてきたほどである。

今回、宗教文化士資格のスタートに際して、心理学領域におけるさまざまな資格の現状を整理し、資格に関する自身の視点を明確にする機会にしたいと思い至った。この機会を得て、改めて資格というものの心理学的興味深さを実感することもできた。とは言え領域外の身からは、臨床心理学領域の錯綜した状況に関しては、根拠となる資料も乏しく推測の域を出ないため、本報告は筆者の個人的観点と受け止めていただきたい。それでもなお、宗教文化士をめぐる環境とはまったく異なる様相を呈する心理学領域の出来事を提供することで、資格をめぐる考察の糧となれば幸いである。

### 1. 心理学界における資格化の動向

30年前の筆者の目には資格とは無縁に見えた心理学であったが、医療現場で活動する機会の多い臨床心理学領域では長い間に資格構想ができてきたようである。表1にまとめたように、財団法人日本臨床心理士資格認定協会によって1988年に「臨床心理士」資格が発足して以来、心理学界では数年おきに新しい資格が増えている。未だに国家資格のない心理学界のため、学会や協会などが省庁の認可のもとで資格認定組織を作りそれが実際に個々の資格を認定する。あるいはいくつかの学会の協同で資格認定組織を作るなどにより公的資格としている。表1では心理学関連の民間資格は省略した。

表1の最後には、比較のために、多くの国家資格の中から、筆者が関わることの多い保育士と言語聴覚士も入れた。また国家資格の最後の欄には、医療系の組織である医療心理士国家資格制度推進協議会が将来の国家資格として計画している（仮称）医療心理師も加えた。この資格に対抗して1行目の臨床心理士も国家資格への候補として押されてきたが、現在では過去に推進派であった財団法人日本臨床心理士資格認定協会自体が必ずしも国家資格化を推進していないとも言われており、筆者にはこの立場について語る方途が見いだせないため、未来の国家資格の一つに計上することができなかった（日本学術会議の分科会の提言（17）も参照のこと）。以下に項目を改めて個別の問題を考えていく。

表1 心理学関連資格

発定年度	資格名	資格認定組織	補定事項	学歴など	資格更新	資格者数	活動領域
	公的資格						
1988	臨床心理士	財団法人 日本臨床心理士資格認定協会 (7)	文部科学省認可財団法人(1990)	指定大学院	ポイント制5年	23,005 (H22)	教育、医療、 福祉、司法、 労働
1990	認定心理士	社団法人日本心理学会 (5)	文部科学省所管	大学/指定科 目36単位 (資格試験なし)	不要	33,183 (H22)	心理学標準 基礎学力と 技能の修得 証明
1992	産業カウンセラー	社団法人日本産業カウンセラー 協会 (9)	厚生労働省職業能力開発局所管公益法人	大学/養成 講習	ポイント制5年	37,000 (H22)	労働
1995	応用心理士	日本応用心理学会 (11)		大学/学会員 +業績	不要(会員 期間有効)	298 (H23)	教育、医療、 福祉、司法、 労働
1997	学校心理士	学校心理士認定運営機構 (1)	日本教育心理学会含む11学会	大学院+実務 1年/大学+実務5年	ポイント制5年	3,600 (H23)	教育
2002	臨床発達心理士	一般社団法人 臨床発達心理士 認定運営機構 (3)	日本発達心理学会、日本感情 心理学会、日本教育心理学会、 コミュニケーション障害学会	大学/専門学校	ポイント制5年	3,000 (H23)	教育、医療
2003	臨床催眠資格/臨床催眠 指導者資格	日本臨床催眠学会 (15)		大学/学会員 +講習会	研修制3年	記載なし	医療
2004	日本心身医学会 認定医療心理士	日本心身医学会 (10)		大学/大学院	単位制5年	89 (H23)	医療
2005	遠伝カウンセラー	認定遠伝カウンセラー 認定制度委員会 (14)	日本遠伝カウンセラー 日本人類遺伝学会 共同認定	養成課程設置 大学院	単位制5年	102 (H22)	医療
2009	認定健康心理士	日本健康心理学会 (13)		大学+講習会	ポイント制5年	未	教育、医療、 福祉
2010	認定音楽療法士	日本音楽療法学会 (12)	学会認定音楽療法士「新認定制度」2010制定	大学/専門学校 +講習会	未定	未	教育、医療、 福祉
	職業名						
1995	スクールカウンセラー (スクールカウンセラーに 準ずる者)	文部科学省の事業における資格要 件を満たし任用された心理職	文部省1995「スクールカウンセラー活用調査研究委託事業」、 文部科学省2001「スクールカウンセラー活用事業補助」、 日本臨床心理士資格認定協会2010、 「私学スクールカウンセラー支援事業」(16)	臨床心理士 精神科医 (修士+実務1年、 学部+実務5年、 医師研修年) 大学教員		12,119 校 29,075 (H20)	教育
	国家資格						
1949	保育士	児童福祉法による国家資格	厚生労働省管轄、児童福祉法第18条の4 (2008年) : 都道府県 知事の登録制、名称独占資格化 (8) (6)	厚生労働大臣 指定保育士養 成施設/保育 士試験		954,120 (H21) 登録者	教育、福祉
1997	言語聴覚士	言語聴覚士法による医療国家資格	厚生労働省管轄、名称独占資格 日本言語聴覚士協会 (2)	専門養成校+ 言語聴覚士国 家試験		18,960 (H23)	医療、教育、 福祉
将来	(仮称) 医療心理師	医療心理師国家資格制度推進協議 (4)	心理職国家資格 (厚生労働省)	大学/専門学校		未	医療・保健・ 福祉

注) カッコ内は文末の参考 URL 番号

## 2. 公的資格化のもたらした問題

表1に見られるように、臨床心理士資格取得者は発足後20余年で累計2万3千人を超え、心理学学部卒で取得条件のできる産業カウンセラー、認定心理士に次いで多くの資格取得者数となっている。臨床心理士資格は受験生に人気があり、どこの大学の心理学科でも受験者数を増やしたが、実際には財団法人日本臨床心理士資格認定協会の定める基準によって審査され合格した指定大学院に入ることによってのみ、臨床心理士資格を取得する条件が整う。この一協会の運営する指定大学院制度に関しては、発足時にこそ心理学界に反対する動きをもたらし、審査の厳しさへの疑問視もあったが、受験生を動員する資格の効力に、次第に指定大学院が増え、2010年には160校となった。2001年からは指定大学院が会員となる日本臨床心理士養成大学院協議会が協会内部に設立されている。また協会は、2005年より開設された国の認証による臨床心理分野専門職大学院5校の第三者認証評価機関として、文部科学省より認証を得ている（2009年、学校教育法第110条）。このような協会のリーダーシップは臨床心理士を社会一般に認知させる大きな役割を果たしたといえる。しかし、以下のような派生する問題ももたらした。

### ①資格の住み分けと序列化

表1に示すように臨床心理士資格発足後に起こった心理学の資格の乱立は、より大きな世の中の資格化の動きが原因となった可能性もあるが、心理学内の資格同士の関係が重要である。たとえば臨床発達心理士は、特に子どもをめぐる支援、治療などを行う専門資格だが、最近では生涯発達という考え方で、生まれてから死ぬまでの発達変化を扱う。そこでもともと成人も子どもも対象としてカウンセリング活動を行ってきた臨床心理士の活動分野と競合する。表1の活動領域が類似する資格は何らかの形で他と住み分けするための方法を見出さなければならぬ。そこで、心理学内部でも、限られた活動領域資源の配分をめぐって、資格の序列化によって軋轢を避ける方法がとられる。

たとえば後発の臨床発達心理士は、「臨床」という文字を外すよう求められたが、それに従うことなく資格名が決められた。国家資格には名称独占資格（その資格名を使えるのはその資格だけであり、資格のない人が使うと罰せられる）があるが、臨床心理士は国家資格ではないため「臨床」を独占できなかったのである。このブランド名「臨床」の争奪問題は、現在も起こっており、国家資格化に際して、臨床心理士という名称から「臨床」をとることが、医療サイドから求められているという。医療者のみが「臨床」に携わるからという理由である。表1の最終行の医療心理士に「臨床」という文字がつかわれていないことからわかる。そこで将来の国家資格としての臨床心理士は「心理士」となるかもしれない。

このような名前の独占争いは実質とどのように関係するのか疑問である。名前が国家資格にあるように業務独占資格（その資格を持つ人だけがその業務を行え、持たない人が行くと罰せられる）も備えているのなら、資格は活動領域を住み分けすることができる。たとえば表1に書いたスクールカウンセラーは、資格ではなく文部科学省の事業における職業名であるが、資格要件には序列があり、「精神科医」「臨床心理士」「心理学に関して高度に専門的な知識を有する大学教員」のいずれかが資格要件で、この人材が足りない地域などの理由があれば、「スクールカウンセラーに準ずる者」を任用する。それは学校心理士、臨床発達心理士などである。序列では優位な臨床心理士であるが、精神科医や準ずるものがスクールカウ



ンセラーに任用されること自体を阻むかのように、財団法人日本臨床心理士資格認定協会のホームページ(7)では「学校臨床心理士（スクールカウンセラー）」という表記が使われており「学校臨床心理士」という資格はないので大変混乱させるものである。

文部科学省でスクールカウンセラーを任用する学校は公立の幼稚園から大学までであるが、私立学校でもスクールカウンセラーを任用すれば、臨床心理士の活動の場は増大する。そこで、協会は協会の創立 20 周年を記念して独自に、「私立学校臨床心理士（私学スクールカウンセラー）支援事業」を、2010 年度より 5 年計画で実施している。これは名称独占と業務独占のセットである。近年深刻化、多様化している学校における子ども、教員、保護者のメンタルな問題に関しては、資格の住み分けを優先するのではなく、実績をもとに協同体制をとる必要があるだろう。

資格の序列化の弊害として言語聴覚士の知人の経験をあげておきたい。表 1 に載せた言語聴覚士は、国家資格化するまでに長い年月を費やした。それは資格条件としての学歴に大学院修了という高度な学力を求める言語治療者サイドと、学歴を低く見積もる医療サイドの攻防のせいだと言われている。医療現場はさまざまな業種の人の協同の場であるため、仕事の効率化のために医師のリーダーシップのもとで看護師や他の医療者が働くことが想定されている。そのような場で言語治療者を高度な資格として独立させたくなかったともいわれている。結果として国家資格となった言語聴覚士は、高度な学歴を納めることになったものの、現場ではやはり医師の指示のもとで業務する立場である。別な知人は脳梗塞のため失語となった家族の言語治療に付き添っていた。言語聴覚士が家族の能力検査を行い後日主治医から結果を知らせるという手筈になっていた。その日に主治医を訪ねると、検査結果を容易に見つけられないだけでなく、でてきた結果のシート内容を読めず、検査結果に言及せずに家族は痴呆だと決めつけたという。知人が直接言語聴覚士に尋ねたところ、専門性の高い言語治療の検査結果を医師が読解できないことはよくあるということだった。このような例は、資格の形式的な序列化ではなく、専門性のある資格の独立を保ち、医療情報を患者に正確に伝えることを重視した資格のチームワークが必要なことを示している。それこそが本来の業務独占の目標ではないかと思われる。

## ②心理学下位領域のバランスの崩壊

日本臨床心理士資格認定協会の指定大学院制度では、臨床心理士に必要なカリキュラムを整備するために、必要な教員数も指定している。表 2 は、ある私立大学の心理学科で大学院における科目と専任教員の専門別人数を示している。この院は臨床心理士指定大学院として認定されている。表 2 から分かるようにカリキュラム内容は共通するものもあるが心理学専攻よりも臨床心理学専攻で多く、教員数も臨床 5 対非臨床 5 である。非臨床には心理学の 4 つの下位領域が入っていることを考えると、臨床という一つの下位領域が教員数の半数を占めるという不均衡にすぐ気付くはずである。臨床心理士養成指定大学院数が現在 160 だとして、800 人の臨床心理領域の専任教員の需要がある。大学の専任ポストは限られているので、昔からある心理学科に臨床心理士指定大学院を作るときにはどの大学でも専任ポストをめぐる問題が生じた。新しいポストが作れなければ非臨床領域の教員のポストを減らす必要があるからである。

このような苦渋の策で臨床心理士指定大学院を作った後は、研究者養成上のアンバランス

表2 事例 私立大学心理学科大学院	
心理学専攻開講科目	
心理学特殊研究 3	犯罪捜査心理学の最前線
心理学特殊研究 4	言語心理学とその関連領域
心理学特殊研究 5	集団・組織心理学
心理学特別研究 8	人間工学：人間－機械系の心理学
心理学演習 2	「喪失」の社会心理学
心理学演習 4	社会的認知における意識と無意識
臨床心理学専攻開講科目	
臨床心理査定演習	臨床心理職技能としての査定習得
臨床心理学査定特論	投影法検査の習熟と事例理解
心理療法特論 1	全体的存在として人間を理解する
心理療法特論 1	全体的存在として人間を理解する
心理療法特論 3	イメージの定位と跳躍
心理療法特論 4	精神分析的なセラピーに向けて
心理療法特論 5	学校臨床心理学
心理療法特論 6	児童福祉施設における心理援助
事例研究法特論	事例研究の本質とその力について考える
臨床心理関連行政論	臨床心理の社会的責務について考える
障害児心理学特論	発達の視点から発達障害をとらえる
精神医学特論 1	精神医学とはどういうものか
社会心理学特論 1	社会的認知における意識と無意識
臨床心理基礎実習	臨床心理学実践の基礎
	臨床心理学 5
	社会心理学 2
スタッフ	認知心理学 1
分野別人数	発達心理学 1
	教育心理学 1

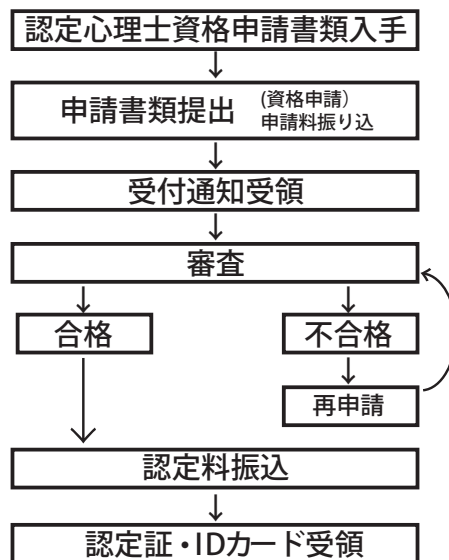
が年を経るごとに際立ってくる。つまり、非臨床領域の教員の減少が指導院生の数を減らし、結果として非臨床領域の専門家となる研究者が育成できない。さらに臨床心理士資格への人気もあり、非臨床領域の院は定員に至らない大学も少なくない。ならば臨床心理学領域の研究者育成に成功するかといえば、これも必ずしもそうではなく、臨床心理士資格を得ても臨床家として働く現場のポストは少ないにもかかわらず、スクールカウンセラーなど非常勤ポストは多く時給も高いため臨床領域の学者になるよりも実践家になる率が圧倒的に高い。したがって、臨床心理士資格ができて20年を超え、日本の心理学界における下位領域の専門家の人口バランスは資格の発足前後で大きく変わってきている。これが今後の心理学界にどう影響するのか、非臨床系心理学研究の枯渇が心理学の終焉をもたらすのかなど、安易に杞憂とは言い切れない問題が予見されている。

ここまで述べた内容からは、あたかも臨床心理士資格に問題があるとする主張に受け取られるかもしれないが、それは筆者の本意ではない。カウンセラーの仕事の専門家である臨床心理士は職能として人々の心の問題の解決に十分に役立つ、人間の優れた叡智そのものである。その内容については文献(佐々木・大貫,2002)にゆずり、ここではそれとは全く独立に、資格化に伴うポリティカルな手続きにさまざまな予想外の問題が含まれることを指摘した。

### 3. 知識保証タイプの資格

臨床心理士資格の隆盛に対して、非臨床系心理学の存亡をかけて作られたというわけではないが、日本心理学会ではほぼ同時期に認定心理士資格を作った。表1にあるように、活動領域は特になく、業務を目的とした資格ではないことが分かる。資格試験や更新がない代わりに、心理学関連の指定科目の履修要件が細かく決められている（文末 表4 認定心理士認定資格細則別表参照）。表3の認定心理士資格認定制度規程では、この資格の目的は「心理学専攻者の専門性の向上に資するため、その基礎的資格を審査し、「社団法人日本心理学会認定心理士（以下、認定心理士という。）」の認定を行うものである。」とあり、心理学の知識を保証する役割をもつ。その意味で検定試験に近いが、試験は行わず単位認定なので「認定心理士」というわけである。図1は認定心理士資格を申請してから取得するまでの流れである。資格試験はないので、合格不合格はあくまで大学での受講カリキュラムとその単位取得が基礎になる。不合格の場合は補足受講や単位取得を経て再申請することになる。

図1 認定心理士資格申請の流れ



・出典 (5)

この資格を持つことでどのようなメリットがあるのかは人それぞれといえるが、むしろ資格を制定した日本心理学会や心理学教育をする側に、専門性への自覚や責任を促す効果が高い。資格を取得する側にも、それがすぐに職業などと結びつかないからこそ功利的な目標に左右されず、自己の本質的なアイデンティティに関わる資格だと言えよう。この認定心理士資格をめぐる問いと答えが、日本心理学会のホームページ(5)に載っている。以下に例を挙げる。

Q1：認定心理士ってどんな資格？

A1：「公益社団法人日本心理学会」が認定する心理学の基礎資格で、大学で心理学に関する標準的な基礎知識と基礎技術を修得していることを認定するものです。この制度は、

心理学専攻者としてのアイデンティティを持ち、専門性の向上に資するために設けられました。

Q4：認定心理士ってどんな仕事ができるのですか？

A4：認定心理士は心理学の基礎資格であり、職能の資格ではありません。大学で心理学を専門科目としているということは証明されますので、そのことを生かした仕事は出来ると思われまます。

このように職能に関してはむしろ消極的である。したがって、臨床心理士資格のように、名称や業務をめぐる他資格と競合することなく、資格取得者自身の自己啓発やアイデンティティに関わっている。この資格が他資格と優劣を競わないように、この資格取得者も他者との優劣関係や序列化には意味がないことを理解するはずである。それは、知識習得というのが他者との比較での順位とは全く独立に、自己の知識の理解そのものをしめしているからである。

以上に見てきたように、資格といっても多様であるが、どの資格にも共通に言えることは、その役割を担うことで自覚が促され自己実現への一步が保証されることだろう。このような資格の機能を十分に理解した上で、資格の排他性と独自性を利用し、あらたな資格化によって、ユニークな技術や知識の専門性を高め維持することに貢献できるはずである。

#### 〈参考文献〉

佐々木正宏・大貫敬一『カウンセラーの仕事の実際』培風館、2002年。

#### 〈参考 URL〉（最終アクセスはいずれも 2011 年 9 月 25 日）

1. 一般社団法人学校心理士認定運営機構 <http://gakkoushinrishi.jp/aboutkikou/teikan.html>
2. 一般社団法人日本語聴覚士協会 <http://www.jaslht.or.jp/index.html>
3. 一般社団法人 臨床発達心理士認定運営機構 <http://www.jocdp.jp/kiko/org/02.html>
4. 医療心理師国家資格制度推進協議会について <http://www.onyx.dti.ne.jp/psychosuishinkyogikai.html>
5. 公益社団法人日本心理学会 <http://www.psych.or.jp/about/index.html>
6. 厚生労働省：子ども・子育て：保育関係 <http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/hoiku.html>
7. 財団法人日本臨床心理士資格認定協会 <http://www.fjcbcp.or.jp/outline.html>
8. 児童福祉法 <http://law.e-gov.go.jp/htmldata/S22/S22HO164.html>
9. 社団法人日本産業カウンセラー協会 <http://www.counselor.or.jp/about/about.html>
10. 社団法人日本心身医学会 <http://www.shinshin-igaku.com/>
11. 日本応用心理学会 <http://www.soc.nii.ac.jp/jaap/sub01.html>
12. 日本音楽療法学会 <http://www.jmta.jp/about/index.html>
13. 日本健康心理学会 <http://jahp.world.coocan.jp/>
14. 認定遺伝カウンセラー制度委員会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GC/About.html>
15. 日本臨床催眠学会 <http://www.hypnosis.jp/>
16. 文部科学省 スクールカウンセラー等活用事業補助 [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/](http://www.mext.go.jp/b_menu/)

17. 心理学・教育学委員会 健康・医療と心理学分科会「提言 医療領域に従事する『職能心理士（医療心理）』の国家資格法制の確立を」（2008）www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-20-t62-8.pdf

<b>表 3 認定心理士資格認定制度規程</b>
1 本制度は公益社団法人日本心理学会定款第4条(7)に基づき、心理学専攻者の専門性の向上に資するため、その基礎的資格を審査し、「社団法人日本心理学会認定心理士(以下、認定心理士という。)」の認定を行うものである。
2 資格認定の業務は、認定心理士資格認定委員会規程に定める認定心理士資格認定委員会(以下、認定委員会という。)が行う。 2 資格認定は認定委員会が行う審査に基づいて理事長が行う。
3 認定に必要な要件は別に定める認定資格細則による。
4 認定の申請及び手続きは別に定める。
5 認定を受けた者は認定心理士名簿に登録される。登録された者には認定証を交付する。
6 認定に従事する者は、公正にその職務を遂行し、その職責に応じて守秘義務を負う。 2 理事長は守秘義務の監督の責任を負う。
7 本規程の改正は、理事会の承認を得るものとする。
<b>認定心理士認定資格細則</b>
1 認定心理士資格認定制度規程第3条に基づく認定資格は、本細則の定めるところによる。
2 認定資格の条件は次の各号を満たすものとする。 (1) 16歳以降通算2年以上日本国に滞在した経験を有する者。 (2) 学校教育法により定められた大学、または大学院における心理学専攻、教育心理学専攻、または心理学関連専攻の学科において、別表に掲げる科目を履修し、必要単位を修得し、卒業または修了した者及びそれと同等以上の学力を有すると認められた者。 上記の条件を卒業見込みの学年度において満たしている者は、申請することができる。
3 第2条の規定にかかわらず、連続して5年以上この法人に正会員として在籍し、本務校において心理学関連科目を担当する大学等(四年制大学、短期大学、高等専門学校、専門学校)の教員は、所定の様式によってこれらの事項を認定委員会へ届けることにより、資格審査を受け、資格認定を受けることができる。
4 第2条(2)に定める科目取得の認定にあたっては次の各号による。 (1) 別表の科目名を参照しながらも、それぞれの大学ないし学科の実情に応じ、名称に捉われないで当該内容が含まれるか否かによって判定する。合計は36単位以上とする。 (2) 心理学概論は、一般教育や教職教養における科目をもって充当することもできる。 (3) 複数領域にまたがる科目を該当させることもできる。ただし、その科目をもって複数科目を修得したとすることはできない。 (4) 基礎科目のa、bは各4単位以上、cは3単位以上修得し、合計で12単位以上となること。 (5) 選択科目d～hの5領域のうち3領域以上で、各領域4単位以上、合計16単位を満たしていること。 (6) 残り8単位はa～hの任意の科目または「その他の科目」(i)で充当すること。 (7) 卒業論文は、卒業論文を単位として授与する機関に限り、その機関で授与している単位数のうち最大4単位までを認定のための単位としてその他の科目iの単位として充当できるものとする。
5 本細則の改正は、理事会の承認を得るものとする。

・ 出典 (5)



## 表4 認定心理士認定資格細則別表

認定心理士の資格認定を受けるためには、修得単位に関する基礎資格として、下記のような科目の修得が必要とされる。すなわち、「基礎科目」はa, bの各領域4単位以上、cの領域3単位以上で、小計が12単位以上であること、「選択科目」はd, e, f, g, hの5領域中3領域以上で各領域4単位以上、かつ、5領域の小計が16単位以上であること、これに「その他の科目」(i)の単位を加えて総計36単位以上であることが必要とされる。ただし、「その他の科目」以外の各領域は「基本主題」と「副次主題」のいずれかに分類される。各領域で必要な単位は4単位以上であるが、この4単位中少なくとも2単位は「基本主題」に属する単位でなければならない。残余の単位分は「副次主題」に属する単位でもよい。「卒業論文」は、最大4単位までが「その他の科目」(i)の領域の単位として認められる。

### 基礎科目(12単位以上)

#### a. 心理学概論

- 基本主題 心理学概論, 教育心理学概論, 基礎心理学, 一般心理学, 心理学中心の行動科学概論・行動科学など
- 副次主題 心理学史, 社会心理学概論, 学習心理学概論, 人格心理学概論, 発達心理学概論, 臨床心理学概論など

#### b. 心理学研究法

- 基本主題 心理学研究法, 教育心理学研究法, 心理学実験法, 実験計画法, 心理測定法, 心理検査法(人格診断法を含む), 心理統計学, 計量心理学, 情報処理演習(ただし, 心理学実験データ処理に関する講義・実習)など
- 副次主題 心理統計学でない一般統計学, 心理学実験を目的とした情報処理技法, 教育評価法など

#### c. 心理学実験・実習

- 基本主題 心理学基礎実験, 心理学実験, 心理学実験実習, 心理学実験演習, 行動科学基礎実験, 人間行動学実験実習, 教育心理学実験実習, 社会心理学実験実習など
- 副次主題 心理検査法実習, 臨床心理学実習, 心理学実験を対象としたコンピュータ実習など

### 選択科目(16単位以上)

#### d. 知覚心理学・学習心理学

- 基本主題 知覚心理学, 感覚心理学, 認知心理学, 学習心理学, 思考心理学, 情報処理心理学, 数理心理学, 言語心理学, 感情心理学, 行動分析学, 認知科学(心理学的立場による)など
- 副次主題 色彩心理学, 人間工学など

#### e. 生理心理学・比較心理学

- 基本主題 生理心理学, 比較心理学, 動物心理学, 比較行動学, 精神生理学, 神経心理学など
- 副次主題 神経生理学, 行動薬理学, 行動生理学, 動物生態学など

#### f. 教育心理学・発達心理学

- 基本主題 教育心理学, 発達心理学, 児童心理学, 青年心理学, 生涯発達心理学, 教育評価, 教育測定, 教科学習心理学, 教授心理学, 学校心理学, 発達臨床心理学, こども学(心理学的立場による), 進化心理学など
- 副次主題 教育学, 学業不振児の心理, 教師の心理, 親子関係の心理など

#### g. 臨床心理学・人格心理学

- 基本主題(臨床心理学, 人格心理学, 性格心理学, 健康心理学, 福祉心理学, 異常心理学, 精神分析学, 自我心理学, 心理療法, 行動療法, カウンセリング, 児童臨床心理学, 障害者心理学, 行動障害論, 適応障害論, 適応の心理, 臨床心理学実習, 心理検査実習, 犯罪心理学, 非行心理学, 矯正心理学, 教育相談, 精神保健学, 精神衛生学など1)
- 副次主題(精神医学, 行動医学, 心身医学など)

#### h. 社会心理学・産業心理学

- 基本主題(社会心理学, 実験社会心理学, 集団心理学, グループ・ダイナミックス, 心理学的人間関係論, 対人関係論, 対人認知論, コミュニケーションの心理学, マスメディアの心理学, 家族心理学, コミュニティ心理学, 環境心理学, 産業心理学, 組織心理学, 労働心理学, 消費者の心理, 職業心理学, 文化心理学, 社会心理学調査実習など)
- 副次主題(社会学的な社会心理学, 心理学的な労働科学など)

### その他の科目

#### i. 心理学関連科目, 卒業論文・卒業研究

原則的にa~hの複数の領域にかかわる心理学関連科目。卒業論文, 卒業研究は最大4単位まで



## 「宗教文化の授業研究会」の試み

平藤喜久子

### 1. はじめに

「宗教文化士」制度の検討がなされるなか、宗教文化に関する授業が各大学でどのように行われているのか、ほかの研究者はどのようなことに悩み、授業運営を行っているのかということへの関心が高まっていった。問題意識を共有し、情報提供し合う場があれば、互いの授業運営に資することができるのではないだろうかということで、科学研究費補助金基盤研究(A)「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」(研究代表：星野英紀・大正大学)で行う教材研究の一つの試みとして、2009年12月に「宗教文化の授業研究会」が発足した。世話人は岩井洋(帝塚山大学)、黒崎浩行(國學院大學)、平藤喜久子(國學院大學)、弓山達也(大正大学)である。2010年6月には「宗教と社会」学会のプロジェクトとして承認され、「宗教文化の授業研究」プロジェクトの名の下に活動を続けることとなった。また2011年には科学研究費補助金基盤研究(B)「宗教文化教育の教材に関する総合研究」(研究代表：井上順孝・國學院大學)プロジェクトがスタートし、この研究課題と密接に連携しながら活動を行っている。

本稿ではこの「宗教文化の授業研究会」の活動について、その発足の背景、これまでの活動内容を紹介し、今後の展望について述べることとする。

### 2. 研究会発足の背景

はじめにこの研究会発足のきっかけとなった宗教文化士制度について述べておきたい。グローバル化が進み、日本も多文化社会になってきている。そうした状況から、自国や他国の宗教についての基本的な知識を得る必要があるとの認識が強まり、宗教文化に関する教育の必要性が認識されることとなった。しかし中等教育については2002年11月中央教育審議会の中間報告で「学校で子どもを宗教に触れさせようとしても、様々な宗教を教えることができる教員は少ないなどの問題がある」と指摘されるなど、宗教を教えられる人材の育成が課題となっている。これは高等教育機関である大学における宗教文化教育のあり方にも再考を促すものであろう。筆者は宗教文化士資格の発足について、こうした社会的要請に応える試みの一つであると理解している。

宗教文化士制度の特徴として、受験資格に大学で宗教文化士の到達目標<sup>(1)</sup>と関連した科目の単位を16単位以上取得していることを挙げているという点がある。大学での授業を重視しているということは、先に述べたような宗教文化を教えられる人材の育成ということに込めることになるだろう。しかし、そのぶん大学で宗教文化に関わる授業を教える教員は、これまで以上に授業の充実が求められることとなる。このことは授業経験が浅い筆者にとっては、あらためて授業のあり方について考える機会となった。

筆者が大学ではじめて授業を担当したのは2000年であった。それから現在までに担当し

た授業の科目名を数えてみると、17科目ほどになる。もちろんすべてが専門としている神話学、日本神話の授業というわけではない。日本の宗教や世界の宗教、作文、日本文学、比較文化論のほかに、留学生向けに英語で行う日本宗教の授業や日本文学の授業も含まれている。

専門としている領域に関する授業であれば、授業や教材に研究の成果を反映させていくことも可能であろう。しかし専門から少しずれると、はたしてこの教材は適切なのだろうか、用語の用い方に間違いはないだろうか、最近の研究状況を反映できているだろうかといった点で、不安は大きくなる。はじめて担当する授業、分野であれば、なおさらである。このように専門としている分野以外の授業を担当するということは、筆者に限らず、今では当たり前のこととなっており、多くの研究者が経験しているだろう。

他方、大学でも授業の質を高めることが課題となっており、それぞれの大学でFD (Faculty Development) という名の下に講演会やワークショップ、授業評価アンケートなどといったさまざまな取り組みがなされている。たしかにマルチメディア教材やインターネットの利用方法、メディアリテラシーの向上など一般的な課題については、ほかの授業科目とも共通する課題であり、大学としての対応もある程度可能だろう。しかし学問領域ごとに抱える固有の課題もある。宗教文化にかかわる授業であれば、「宗教」、「信仰」を扱うということから起こる問題や授業運営上の困難さがある。こうした困難さについて、大学のFDで応えられることは、あまりないのではないだろうか。

たとえば筆者がとくに宗教文化に関する授業で、困難さを感じたのは、留学生と日本人がともに学ぶという授業であった。基本的には留学生を対象とし、現代の日本社会と宗教との関わりについて考えるリサーチ・アンド・プレゼンテーションの授業である。発表担当の学生のプレゼンテーションを踏まえ、ほかの学生とディスカッションをする。その際に、ある宗教団体の実名を挙げ、入信した友人の変化を述べ、その教団の問題点を述べるという発表があった。たしかに社会的に問題の指摘されている教団ではあったが、自分で調査をしたことがあるわけでもない。学生から「この教団はカルトですか？」という質問を受け、どう返答してよいのか大変困惑した。この質問は、留学生が勧誘を受けることもあるため、授業以外の場でもよく聞かれる。知っている事実があれば、そのみを伝えるように心がけているが、価値判断を求められるような場合、ほかの研究者はどのような対応を取っているのか、問いかけたいと思った。

このほかこの授業ではこれまで政治と宗教の問題、靖国問題、同性愛と宗教の問題、イスラームのスカーフ問題、死刑制度の問題など、学生が提起した話題は多岐に亘り、戸惑う議論が展開することも多い。このような多文化教室で「信仰」を議論することは、今後も増えてくるだろう。

こうした宗教文化のさまざまな領域にわたる授業に対応しなければならない状況におかれ、さらに大学における宗教文化関連授業全体の質を上げていく必要にせまられたとき、個人の資質でさまざまな問題を解決していくのではなく、直面している問題を共有し、情報交換をしていく場を作ることが必要になると考えた。具体的には、どのようなテキスト、教材を使っているのかというレベルの問題や、宗教施設見学に連れて行く場合、注意する点はなにか、先に挙げたような問題を指摘されている宗教団体を授業で取りあげる際の距離の取り方をどうするべきか、といった問題について議論を重ね、共同調査なども行いたいと考えていた。

そこで科学研究費補助金基盤研究（A）「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」（研究代表：星野英紀・大正大学）に参加し、問題意識を共有していた岩井洋、黒崎浩行、弓山達也と筆者の4名が世話人となって宗教文化の授業研究会を発足させることとなった。岩井氏は、宗教社会学が専門であるが、教育デザインの分野でも活躍しており、とくに大学の初年次教育に造詣が深く初年次教育学会の理事もつとめている。黒崎氏も國學院大学神道文化学部で教務委員を務め、またメディアリテラシー教育や教材としての画像利用などについての研究も行っている。弓山氏は大正大学でさまざまなスタイルの教育方法を実践しており、討議型の授業は雑誌『SAPIO』の『『ハーバード白熱教室』が日本にもあった』でも取り上げられている（2010年10月）。いずれも大学での教育について、問題意識をもって取り組んできた研究者である。そのほか中堅から若手を中心にメンバーが参加しており、MLで情報を流し、研究会を重ねてきている。

### 3. これまでの活動内容

本研究会では、2011年の前期までに5回の研究会と1回の宗教施設見学研究会を開催した。以下に概要を記す。

#### 第1回研究会

【日時】 2009年12月26日（土）14時～

【場所】 國學院大學学術メディアセンター5階会議室06

【討議内容】「今後の研究会の活動内容について」

#### 第2回研究会

【日時】 2010年2月28日（日）13時～

【場所】 國學院大學学術メディアセンター5階会議室06

【討議内容】「カルトの教え方」

【発表者】 櫻井義秀（北海道大学）、弓山達也（大正大学）、近藤光博（日本女子大学）

#### 第3回研究会

【日時】 2010年7月4日（日）13時～

【場所】 國學院大學学術メディアセンター5階会議室06

【テーマ】「宗教の授業と調査法」

【発表者】 川又俊則（鈴鹿短期大学）、木村敏明（東北大学）

#### 第4回研究会

【日時】 2010年9月12日（日）10時30分～

【場所】 國學院大學学術メディアセンター5階会議室06

【テーマ】「調査映像を授業にどう使うか」

【発表者】 井上順孝（國學院大學）

【コメンテーター】 西村明（鹿児島大学）



## 第5回研究会

【日時】 2011年1月8日(土) 15時～

【場所】 國學院大學学術メディアセンター 5階会議室 06

【テーマ】 ニュージーランドにおける宗教文化教育

【発表者】 Erica Baffelli (ニュージーランド・オタゴ大学教員)

## 第1回宗教施設見学研究会

【日時】 2011年7月10日 13時半～

【場所】 ニコライ堂、神田神社、湯島天神

【参加メンバー】 猪瀬優理、平藤喜久子、溝口大助、ヤニス・ガイタニディス、天田顕徳

【参加大学】 國學院大學、東京外国語大学、東洋英和女学院大学、法政大学、龍谷大学、首都大学東京、埼玉大学、明治学院大学

第1回の研究会、および第2回の研究会については、『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所紀要』第3号で黒崎浩行氏が「宗教文化の授業を考える研究会」と題して詳しくまとめているので、そちらを参照していただきたい<sup>(2)</sup>。

ここでは第3回目以降の内容を簡単に紹介していく。第1回の研究会では、世話人から研究会で取り上げるべき問題の提起を行い、参加者と討議をした。その際に、宗教調査を採り入れた授業の展開方法とその問題点について、今後取り上げていくことが確認された。そのことを受け、学生が宗教調査を行う授業を指導した経験を持つ川又俊則、木村敏明両氏に発題を依頼した。川又氏は「社会調査実習としての宗教調査—「2001年度の試み」とその後」と題する発表を行い、学生に日本の現代キリスト教に関する社会調査を体験させた際の方法や問題点などを報告した。木村氏は、「集団合宿調査の理念と現実—東北大学宗教学研究室「宗教学実習」のとりくみ」と題する発表を行った。東北大学の宗教学研究室では、毎年地域を定め、集団合宿調査を行っている。長年の取り組みから見えてきた最近の傾向や問題点が指摘された。調査法は、研究者にとっても関心の高いテーマであり、多様な方法が可能であるため、討議の際には活発な議論が交わされた。

第4回の研究会では、調査で撮影された映像や画像をどう授業に活用していくかを検討することとした。「調査映像を授業にどう使うか」というテーマで、井上順孝氏が発題した。1970年代に8ミリカメラの使用をはじめてからのツールの変遷や、撮影した素材を授業に使用するときの編集の仕方などについて、実際の貴重な映像や画像を示しながら論じた。研究者が撮影する映像は自ずとほかとは異なってくるということがわかり、学ぶ点が多かった。コメンテーターの西村明氏を中心に、総合討議では学生の宗教に関する映像のリテラシーの向上をどうするべきか、また授業で利用する際の注意点はどこにあるのか、などの点について議論を行った。

第5回のニュージーランドのオタゴ大学で教鞭を執る Erica Baffelli 氏が、「ニュージーランドにおける宗教文化教育」と題するテーマで発題を行った。Baffelli 氏は日本宗教が専門であることから、日本の宗教を海外で教える際の教材について語った。ニュージーランド固有のこととして、マオリ族の文化に対する一定の配慮が求められるといった点なども紹介された。

2011年度は、科学研究費補助金基盤研究（B）「宗教文化教育の教材に関する総合研究」（研究代表者：井上順孝）の研究と連動し、宗教文化教育の教材に関する議論を深めることや、模擬授業、宗教施設見学といった学生参加の研究会も行っていくこととなった。そこで、7月には、筆者が中心となり、第1回宗教施設見学研究会を開いた。訪問先は、神田、お茶の水を中心に、ニコライ堂（ロシア正教）、神田神社、湯島神社とした。

筆者は東京外国語大学国際教育プログラム（ISEPTUFS）において留学生と日本人学生向けの日本宗教の授業を担当している。この授業のエクスカージョンとして、毎年都内の神社ツアーを企画してきた。数年前より、このツアーを國學院大学の神道文化学部学生とともにを行い、外国人に神道を伝えられるようになることも目標に加えた。このツアーを、本研究会のメンバーにも開き、共同で行うことを企画した。そのような経緯から、今回の宗教施設見学研究会についても、企画は筆者が2010年度國學院大学で担当した「神道と国際交流」の受講生が中心となって行った。

参加者は國學院大学の神道文化学部の学生、同じく國學院大学に留学している学生のほか、東京外国語大学、東洋英和女学院大学、法政大学、龍谷大学、首都大学、埼玉大学、明治学院大学の留学生、日本人学生30名余りが参加した。国籍も多様で、中国、韓国、台湾、アメリカ、カナダ、イギリス、イタリア、スペイン、チェコ、オーストラリア、ベナンなど十数ヶ国に及んだ。

ニコライ堂では、國學院大学研究開発推進機構PD研究員のヤニス・ガイタニディス氏が東方正教会、ロシア正教、ニコライ堂について説明を行った。堂内では、ボランティアの方が丁寧に建築の特徴などの説明を行って下さった。日本人や中国人の学生の多くは、キリスト教の教会を訪問するのがはじめてということであった。ここではボランティアの方から、入堂の際に脱帽だけではなく背負っているリュックも下ろすよう指導があり、宗教施設を訪問するときのマナーや信者にとっての教会の意味が印象に残ったと話す学生もいた。



宗教施設見学研究会の様子（ニコライ堂）  
撮影：天田顕徳

神田神社と湯島神社では國學院大學の神道文化学部の学生が各神社の歴史や信仰の説明、神社建築、絵馬やお守り、参拝作法などについて説明を行い、必要に応じて筆者が補足を加えた。説明を行っている場面の写真を付しておく。



宗教施設見学研究会の様子（神田神社） 撮影：天田顕徳

とくに近年神田神社で増えている痛<sup>いた</sup>絵馬と称されるマンガやアニメのキャラクターを描いた絵馬は、学生たちの関心も高く、写真撮影を行っていた。日本人の学生の多くは、毎年初詣などの機会に神社を訪れているが、神社の由来や祭神、参拝の作法を学ぶのははじめてであり、さまざまな質問を投げかけていた。

案内をした神道文化学部の学生たちのほとんどは、卒業後神職を目指している。彼らは、手水の際に口をすすぐよう指導するかどうかを議論したり、ほかの学生たちからさまざまな質問を受ける経験をしたりすることで、あらためて神道を伝えることの難しさを感じたようであった。

さまざまな大学の教員が共同で学生を引率し、宗教施設の見学を行うことは、今回が初めての試みであった。学生の国籍や年齢、専攻分野などに広がり生まれ、学生への教育効果は高いのではないかと感じた。しかし、予想していた以上に学生の参加希望者が多く、そのぶん移動時間に時間がかかったり、境内での説明が難しかったりという問題点があった。神社という日本人にとって身近な宗教施設であるはずのものでも、専門的知識のある人から説明を受けて、見学したいというニーズが高いということだろう。担当教員としてはうれしいことでもあるが、運営の仕方については、訪問先のことも考え、今後検討していく必要があ

ると感じた。



痛絵馬をみる留学生たち（神田神社） 撮影：天田顕徳

#### 4. 今後の展望

第1回の宗教施設見学研究会を企画し、宗教施設を訪問したいという学生側のニーズが高いこと、また連れて行きたいと考える教員も多いこと、そしてそのためには訪問先の宗教についての専門的な知識の提供者の存在が望ましいことがわかった。そこでこのテーマについては2011年度の後期にも取り組んでいくこととした。10月には、國學院大學の井上順孝教授の企画で創価学会の本部見学も行う。新宗教の教団見学は、学生の関心が高いものの、教団そのものとの関わり方や交渉をどのように行っていくのかについては、難しいことも多く、新宗教研究を行っていないほかの分野の専門家には難しい。そういった技術的な側面についても、学ぶ機会としたい。2012年1月には、星野英紀大正大学教授・國學院大學客員教授のご厚意により、福蔵院の節分行事を対象として行う予定である。研究会のメンバーの構成から、必然的に開催地が都内になっているが、関西でも複数の大学の教員で共同の見学会をとという要望があることから、関西の見学研究会も今後企画していく。さらに、宗教施設にかぎらず博物館見学も課題となるだろう。国立民族学博物館など、宗教に関連する充実した資料を所蔵する博物館を授業でどう利用していくかについても、一度取り上げる必要があると考える。

そのほか従来行ってきた授業方法についての研究会も企画していく。科学研究費による「宗教文化教育の教材に関する総合研究」と連動し、宗教文化教育の教材にかかわるテーマに取り組んでいくことになる。視聴覚教材の共有方法、教科書の選定方法といった課題のほか、落語や歌舞伎などの伝統芸能を教材としてどう活用するかなどの具体的なテーマなども考え

られるだろう。

今後も宗教文化の授業をあらたに担当するような若手の研究者の参加を国内外問わず促していき、情報交換を行いながら、あらたなテーマにも取り組んでいくこととしたい。

#### 注

- (1) 宗教文化士の到達目標は次の3つである。
  1. 教えや儀礼、神話を含む宗教文化の意味について理解ができる。
  2. キリスト教、イスラーム、ヒンドゥー教、仏教、神道などの宗教伝統の基本的な事実について、一定の知識を得ることができる。
  3. 現代人が直面する諸問題における宗教の役割について、公共の場で通用する見方ができる。
- (2) 黒崎浩行「宗教文化の授業を考える研究会」（『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』第3号、2010年9月）、21-23頁。



## 教材開発の現状報告

今井信治

### 1. はじめに

本稿は、2011年1月9日に設立し、國學院大學に事務局を置く宗教文化教育推進センター（Center for Education in Religious Culture、以下、略称にてCERCと呼称）が行っている教材開発の現状を確認する。そして、宗教文化に関わる情報が若者にどのように享受されているか、またどのように教材を公開することが利便的であるかを、ポピュラーカルチャーの領域——とりわけマンガ、アニメ、ゲーム——に着目して俯瞰していきたい。

ここでポピュラーカルチャーを事例に挙げるのは、現在、宗教文化に関わる情報がかつとも断片化され、消費されている領域の1つと目されるからである。また、宗教文化士制度が主な対象としている大学生らが慣れ親しんでいる領域でもあり、極端な例では「宗教へのチャンネルがアニメとマンガにしかない」という話を学部生から聞いたこともある<sup>(1)</sup>。ここまで言わなくとも、マンガやアニメ、ゲームなどから得た情報を元に質問を受けた経験は、大学で宗教に関わる講座を持つ者であれば少なからずあるのではないだろうか。それを間違った知識として一笑に付すことはたやすいが、果たして、何をソースにしてそのような質問をするにいったのか、一考の価値があるだろう。学生と教員の持つ知識に最も齟齬が生じるのも、このポピュラーカルチャーに関わる領域であり、それを等閑視することなく宗教文化教育の端緒とすることができないだろうか。

宗教文化士制度が対象とするのは、もちろん大学で宗教学を学んだ学生である。しかし、CERCの沿革に科学研究費補助金・基盤研究（A）「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」（2008～2010年度）があるように、CERCが提供する教材は、大学で宗教文化教育に携わる教員も活用できるように考えられている。ただ、後述するが、現在公開されている教材の中に宗教文化と関わるポピュラーカルチャーを紹介するものはなく、開発中である。宗教文化に関わる映画やマンガを蒐集したデータベースは構築中であるが、その断片的な宗教情報の利用も相まって、どのように公開するのが利便的であるのかを模索している。本稿では、そうした教材開発の一助となればと考え、CERCで公開・作成している資料・データの紹介と共に、宗教文化に関わるポピュラーカルチャーについての論考をまとめることに紙幅を用いたい。

### 2. 教材開発の現状

まず、CERCのWebページから、教材開発の目的を確認しておこう。

認定試験は宗教を理解する研究方法や宗教史、あるいは現代宗教について幅広く問いますので、授業だけでは十分でない場合があります。そうした人のために、センターではホームページで参考文献、参考資料・データなどを順次公開していくことにしています。<sup>(2)</sup>

宗教文化士の認定試験を受けるには、大学において3つの到達目標に対応した科目を履修し、合計16単位以上取得しなければならない。その3つの到達目標とは、1)「教えや儀礼、神話を含む宗教文化の意味について理解ができる」こと、2)「キリスト教、イスラーム、ヒンドゥー教、仏教、神道などの宗教伝統の基本的な事実について、一定の知識を得ることができる」こと、3)「現代人が直面する諸問題における宗教の役割について、公共の場で通用する見方ができる」ことである。こうした到達目標を掲げ、宗教についての広い知識を問うているため、上記受験資格を充足することは可能でも、「授業だけでは十分ではない場合」がある。たとえば仏教やキリスト教を中心にカリキュラムを組んでいる大学では、その他の宗教について手薄になることが多々あるだろう。2011年11月に行われる第1回認定試験の前に、その点をフォローすることが喫緊の課題であった。

こうした状況において、いち早く着手され、現在公開されているのが「宗教文化を学ぶための基本書案内」および「宗教文化に係る基本用語クイズ」である。また、受験者に認定試験のイメージをつかんでもらうため、同Webページ開設と同時に認定試験のサンプル問題が公開されている<sup>(3)</sup>。

「宗教文化を学ぶための基本書案内」では、宗教全般についての辞典・事典と単行本、各宗教について学ぶための辞典・事典と単行本がリスト化されている。また、単行本については、参考のために目次も載せてある。先述したように、これは各大学の講義で手薄となる分野を受験者が独学できるように公開されているものであり、出版されている宗教学関連書を網羅することを目的とはしていない。そのため、「基本書案内」で挙げられている冊数は、現在、辞典・事典が6冊、単行本が15冊である。宗教学を専門とする研究者からすれば少なく感じるかも知れないが、認定試験を受けるにあたって受験者が読破するには、それなりの労力が必要であろう。今後多少の増減があったとしても、これが受験者のための「基本書案内」である以上は、ある程度冊数を絞るのが必然と言える。

「宗教文化に係る基本用語クイズ」は、高校の教科書（日本史・世界史・地理・倫理）に出てくる宗教文化関連用語を主なキーワードとし、自学自習できるようにしたものである（図1）。これは、多数ある問題からランダムで出題される方式、またはリスト化されたキーワード群から選択して設問に挑む方式の2種類が用意されている。別途Webページに挙げられている認定試験のサンプル問題が5つの選択肢から正答を2つ選ぶのに対し、こちらは3つの選択肢から1つ正答を選ばばよく、問題もいくらか易しく設定されている。本番の試験に比して、まさしく「クイズ」という性格が強い。高校までに学んだ用語を主に問題を作成しているため、大学で宗教学に関わる講義を受けた学生ならば気軽に挑戦できるだろう。ただし、問題を作成するにあたって、用語の羅列ではない活きた知識を養えるようにという留意がなされている。単純に歴史的知識を問うことを避けるという配慮は、「クイズ」と試験のサンプル問題、その他教材開発に通底するところである。また、こうしたオンライン上での問題提供は、独習に際してのモチベーション向上に役立つと言われており<sup>(4)</sup>、CERCでもその効果を期待している。

# 宗教文化教育推進センター

Center for Education in Religious Culture (CERC)

日本語 | English

**TOP**

[新着情報](#)  
[施設案内](#)  
[所在地・連絡先](#)

**宗教文化士について**

[宗教文化士とは？](#)  
[取得要件・申請方法](#)  
[単位認定・到達目標](#)  
[認定試験について](#)  
[参加大学](#)  
[資格の更新について](#)

**センター概要**

[施設](#)  
[沿革](#)  
[組織](#)

**教材**

## 宗教文化に関する基本用語3択クイズ

ランダムで5問ずつ出題されます。

**問1** アンコール・ワットについて適切な記述を次から1つ選びなさい。

- 12世紀にカンボジアに創建されたヒンドゥー教の寺院。
- ベトナムがフランスの植民地になったとき建てられたカトリック教会。
- パングラデシュが18世紀にイスラーム化したときに、建設されたモスク。

**問2** 飛鳥寺について適切な記述を次から1つ選びなさい。

- 瀬戸内政教が現在住居を移める瀬戸内海に面した寺である。
- 日本における少林寺僧法隆の地として世界遺産に登録された。
- 飛鳥時代、蘇我馬子が崇拝の地に建立した寺である。

**問3** 赤心楼学で使われる「回心」の事例として適切なものを1つ選びなさい。

- それまで宗教を信じていなかった人があるとき信仰を持つようになること。
- 宗教がいやになってやめること。
- なかなかひとつの宗教を信じられずに、いろいろ迷う状態。

**問4** 「因果応報」に当たる事例として適切な記述を次から1つ選びなさい。

図1 「宗教文化に関する基本用語3択クイズ」(CERCのWebページより転載)

ここまで、第1回認定試験に向けて公開されている試験のサンプル問題と「基本書案内」、「クイズ」について紹介してきた。ここからは、教材として作成中の資料・データの紹介となる。

現在作成中の資料・データは、「宗教文化に関する映画」、「宗教文化に関する世界遺産」、「参考になる美術館」、「参考になる博物館」、「宗教文化に関するマンガ」が、まず挙げられる。そして計画中のものに、CERC独自の「宗教文化に関する動画」の作成がある。上記作成中の資料・データについては、ある程度の網羅的なデータ蒐集を終え、公開に向けて情報を精選しているものから、テンプレートを先んじて構築し、一定の件数を超え次第公開に踏み切る予定のものまで、各々の資料・データに適した公開手段を模索しながら作成しているところである。

具体的に、資料・データの蒐集がほぼ終わっていながらも公開に踏み切らずにいるのは、上記「映画」と「マンガ」である。まず「映画」に関しては、宗教文化に関するドキュメンタリー番組も含めてCERC事務局でDVDを蒐集・保管している。確かに、既に大学の講義でも映画を資料として用いている教員が多いだろうし、井上順孝編『映画で学ぶ現代宗教』(弘文堂、2009年)という単行本も出版されている。しかし、講義で観賞するにしても前掲書を参照するにしても、専門家による詳細な解説があるから映画が教材としての意味を持つように思われる。「宗教文化に関する」からといって映画のタイトルをただ挙げれば済むというものではないだろう。また、次節にて再度確認するが、「マンガ」はより難しいよう

に思われる。たとえば、中村光によるマンガ『聖☆おにいさん』（講談社、2007年 ― 連載中）を例に挙げよう。公式サイトによる作品紹介は以下のようなものである。

目覚めた人ブツダ、神の子イエス。世紀末を無事に越えた二人は、東京・立川でアパートをシェアし、下界でバカンスを過ごしていた。近所のおばあちゃんのように、細かいお金を気にするブツダ。衝動買いが多いイエス。そんな“最聖”コンビの立川デイズ。<sup>5)</sup>

ブツダとイエスが登場する以上、「宗教文化に係る」ことは疑いない。作中でも聖書のエピソードをパロディしながらギャグが展開するなど、多少なりとも宗教学の知識があればより楽しめる作品であると言える。ただ、行きすぎたギャグと聖書の記述との境界を、読者が正確に線引きできているのかは疑問である。単に独習教材として提示するには危険が伴うと言えるだろう。

対して、テンプレートが先んじて構築されているのは「世界遺産」である。作成中の同教材では、Google との機能連携により、世界遺産の所在地や写真などが参照できる。また、各々の世界遺産に対して解説が加えられる予定である。試験勉強に直接役立つとは言わないが、宗教文化に関する活きた知識を得るには適した教材だろう。

「参考になる博物館」および「参考になる美術館」については、座学などでは賄いきれない部分を、実際に博物館・美術館に足を運ぶことにより補うことが目的とされる。各々の博物館・美術館の特色や関連展示資料の詳細説明に力を入れ、教材利用に際しての簡便さを高める予定である。認定試験を受ける前はもちろん、継続的に宗教文化に関わる素養を育むことができるかと思われる。

以上が、教材開発の現状である。続いて次節にて、ポピュラーカルチャーの領域で断片化されつつ消費されている宗教文化について、井上順孝が提唱する「ハイパー宗教」概念をフックにしながら考察していく。

### 3. 断片化される宗教情報—ポピュラーカルチャーを事例に—

#### 3.1 学生の興味のありか意識

CERC の教材開発において公開に困難がつきまとうポピュラーカルチャー関係の資料・データであるが<sup>6)</sup>、それに反して、これが学生の興味・関心が高い領域であることは間違いないだろう。それゆえに、この領域では教員と学生の知識量が逆転することもある。たとえば表1は、海外の日本語教育の現場における教師と学習者の間に生じている知識の乖離である。表を見れば、日本のポピュラーカルチャーについて、海外の学習者は日本語教師よりも多くアニメやマンガを知っていることがわかるだろう。ならば、日本の学生がそれよりも多くの知識を持っていることは想像に難くない。もちろん、「だから教員もアニメやマンガを見るべきだ」とは思わない。ただ、学生の興味・関心と、何がそれを誘引しているかを確認する必要はあるだろう。



表1 「知っているアニメやまんが」(B国の回答から)<sup>(7)</sup>

教師	学習者
ドラえもん、 クレヨンしんちゃん、 NARUTO、 ちびまる子ちゃん、 名探偵コナン、 コボちゃん、 忍者ハットリくん …	エヴァンゲリオン、美少女戦士セーラームーン、るろうに剣心、 犬夜叉、ワンピース、ヒカルの碁、キャプテン翼、スラムダンク、 テニスの王子様、GTO、カードキャプターさくら、フルーツバスケット、 ガンダム、デジタルモンスター、ポケットモンスター、遊戯王、 ドラえもん、クレヨンしんちゃん、名探偵コナン、NARUTO、 Samurai Deeper KYO、だぁ！だぁ！だぁ！ …

『第10回学生宗教意識調査報告』によれば、学生が最も講義で扱ってほしい内容は「日本や世界の神話」であるという<sup>(8)</sup>。そして、平藤喜久子が別途行ったアンケート調査では、マンガ・アニメ・ゲームの経験者らが北欧神話に関連する用語——オーディン、ベルセルク、ラグナロク、ロキ——を未経験者よりも多く知っていたことなどから、「学生たちにとって、神話についての知識を供給する主たる媒体は、ゲームやマンガ、アニメであると判断することができる」と述べている<sup>(9)</sup>。このように、学生らはポピュラーカルチャーから神話的な知識を得ていることが確認される。ただしここで重要なのは、そうした用語・知識は、本来の文脈から切り離されて一人歩きしたものだということである。平藤は同論文にて幾つかの人気ゲームを挙げつつ、「様々な宗教や神話に関する用語が、それぞれの宗教的な背景、神話の文脈、本来の神格からまったく切り離されて使用される。つまり、神話が文化的な資源として、断片化・素材化されている」状況を、井上の「ハイパー宗教」になぞらえて「ハイパー神話」と呼んだ<sup>(10)</sup>。なお、『現代宗教事典』において、「ハイパー宗教」は以下のように定義されている。

もともとハイパー・トラディショナルな宗教という意味であり、それぞれの国における宗教的伝統との連続性が薄く、異文化の宗教的要素、あるいは宗教以外の要素も積極的に取り込みながら形成された宗教組織や宗教運動を指す。<sup>(11)</sup>

ここで井上が想定しているのはサイエントロジーやラエリアン・ムーブメントであり、ポピュラーカルチャーを享受している若者がそれと同様の組織・運動を形成しているとは言い難い。しかし、「ハイパー宗教」が前提とする「世界のあらゆる宗教の素材を自由につないでいくことにためらいのない意識」<sup>(12)</sup>が、こうしたポピュラーカルチャーの領域では顕著に表れていると言える。そして、脱文脈化・断片化された宗教情報が氾濫し、それが学生の興味を誘引している現状において、宗教学者が行うべきことは2つあるだろう。1つは、学生の中で散り散りになっている宗教情報を拾い集め、元来の文脈に収めること。2つ目は、このような状況を受け止めて原因を検討することである。

### 3.2 宗教教団からの距離を基準にした作品分類とその可能性

さて、「宗教文化に関係するマンガ」は、ただ資料・データを蒐集しただけでは教材として容易に活用できないことは先述した。ここでは問題点を整理するために、先行研究から宗教文化に関係するマンガ・アニメの分類について確認する。マンガについては山中弘が、ア



アニメについては弓山達也がそれぞれ別稿にて論じているが、おおまかに言えば、両者共に宗教教団からの距離を基準にして3つに分類することでコンセンサスが取れていると言えよう。それをまとめたものが表2である。

表2 宗教文化に関するマンガとアニメの分類<sup>(13)</sup>

		マンガ	アニメ
教団からの距離	近	宗教の宣伝媒体としての教団マンガ	宗教団体によって製作され、明確な宗教的な意図を持っている教団アニメ
		広義の宗教マンガ a) 心霊・オカルトマンガ b) 宗教的語彙を多用するマンガ	宗教者や聖典をモチーフとした宗教アニメ
	遠	宗教的テキストとしてのマンガ	宗教伝統とは切り離されているが、人間性や世界観を注視するスピリチュアルなアニメ

当然のことながら、教団からの距離が最も近いマンガ・アニメでは宗教情報の脱文脈化・断片化が起こらない。そう言いたいところだが、必ずしもそうではない。布教に際して積極的にマンガ・アニメを活用している宗教団体それ自体が、井上の指摘する「ハイパー宗教」に当てはまる場合が多々あるからである。代表的なものは、幸福の科学によって制作されたアニメ映画であろう。同教団が制作したある作品ではヘルメスやアフロディーテによる冒険譚、またある作品では歴史上の偉人の転生物語と、「ハイパー・トラディショナルな宗教」の典型を示していると言いうる<sup>(14)</sup>。仮に「宗教文化に関するマンガ」や同「アニメ」を作品に関係の深い教団で分類するだけならば容易だが、こうした特徴について、研究上留意する必要があるだろう。また、教材としても、同カテゴリ内のアニメ・マンガには教団独自の歴史や科学の解釈が多々ある。CERCが特定宗教に寄る組織ではない以上、取り扱いには注意を要するだろう。

対して、教団からの距離が最も遠いマンガ・アニメは「宗教文化に関する」作品としてどのように考えられるだろうか。山中・弓山共に『風の谷のナウシカ』に代表される宮崎駿作品——あるいはスタジオジブリ作品——を大きく取り扱っており、実際、同作品群に宗教的要素を見出す論者は多く存在している。國學院大學で2009年に開催された国際研究フォーラム「映画の中の宗教文化」で、発題者にスタジオジブリ作品を題材に論文を書く者、あるいは講義を行う者がいたのは記憶に新しい<sup>(15)</sup>。

もちろん、弓山が指摘するように、こうした「スピリチュアルなアニメは裾野が広い」<sup>(16)</sup>。特定の宗教から素材を借用していないだけに、人間性を問うもの、自分探しを題材とするもの、独自の世界観に視聴者を誘うものなど、広義に解釈しようとするれば、対象の拡大は容易である。たとえば、スピリチュアリティ関係の雑誌が組んだ特集内に「読者が選ぶスピリチュアリティを感じるアニメ30選」があるが、作品を知っていてもどこにスピリチュアリティを感じているのか理解しがたいものもある<sup>(17)</sup>。よって、作者・制作者による明確な意図が発されていない作品を研究するにあたっては、詳細な作品分析を行うか、あるいは作品に関する価値判断を停止し、作品受容者の声に耳を傾けることになるだろう。ただし、どちらの立

場に拠るにしても、研究者もしくは作品受容者の主観に偏ることは否めない。教材開発にあたっては、何らかの基準を設ける必要があるだろう。

最後に、宗教教団からの遠近が前2者の中程になる作品群について。これはモチーフや語彙を宗教教団から借用して、作品の主題としているものから単なる小道具・舞台装置にしているものまで、カテゴリ内にも濃淡が認められる。こうした濃淡はあるが、総じて断片化・素材化された宗教情報を援用して作品が作られているとも言え、平藤の言う「ハイパー神話」と親和性が高いのも、このカテゴリと言えらるだろう。また、作品に宗教教団による監修がなく、そうかと言って全く切り離されてもいないだけに、学生が誤った知識を得る怖れが最も大きいカテゴリでもある。しかし、宗教教団制作のマンガ・アニメが市場に出回ることが稀であることを鑑みれば、学生の得る「宗教へのチャンネル」がこのカテゴリに多く拠っていることは想像に難くない。「学生からの質問に対して典拠を尋ねたらマンガ・アニメだった」という場合、大部分がこのカテゴリに属するものであろう。3分類の中でも、宗教知識教育の側面からは注意を要し、かつ市場に大きな影響力を持ったカテゴリである。

学生の興味を誘引するという意味では、もちろん講義への活用は有用だろう。特に、日本語学習者には「マンガを読んだりアニメをより楽しむために、日本語を学習したいと希望する人」がおり<sup>(18)</sup>、言葉で説明しにくいところで図像・映像を使えるというのは大きい。ただし、それなりに取材をしているように見えても、念仏を唱えるべきところで題目を唱えるといった無理解や、背景に置かれている祭具の配置がおかしいなど、突っ込み所の多い作品が散見される。作品の鑑賞手段として正しいとは思わないが、「間違い探し」をするにはもってこいの素材である。また、こうした消極的な用法の他、現代宗教論としても取り扱われて良いかと思われる。一般に知られたものとしては、アニメ『らき☆すた』（監督：山本寛、武本康弘、2007年）が挙げられるだろう。同アニメの舞台となった埼玉県鷲宮神社（作中では「鷹宮神社」）の初詣には、アニメ放映前の2006年と2011年を較べると5倍以上になる47万人が訪れた<sup>(19)</sup>。更に、2010年6月の上海万博で「らき☆すた神輿」が担がれるなど、日本を代表する文化として大きく取り上げられている。アニメが確かな影響力を有している証左と言えよう。

同カテゴリを導入として講義をするにしろ、アニメ・マンガそれ自体を取り扱うにしても、やはり専門家による解説がなければ教育の意味は薄い。再度『らき☆すた』を例に採れば、主要登場人物の実家が神社であり、巫女であるという設定から上記のような盛り上がりを見せているわけだが、その設定が作中で大きな役割を果たしているとは言い難い。同作品は特に宗教文化を小道具・舞台装置として用いている側面が強く、それを観ることが直ちに宗教文化を学ぶことにはならないだろう。

総じて、ポピュラーカルチャーに属する作品を宗教文化に関係するものとして提示する場合、受験者向け独習教材として公開するのは困難であることが、改めて確認される。むしろ当教材は、教員・研究者向けとしての可能性を強く持っているのではないだろうか。この領域における学生と教員との知識が乖離していることは既に述べたが、この教材は、その乖離を埋める一助になるだろう。網羅的なリストが作成されれば、講義の準備、あるいは学生から受けた質問に対するリファレンスとして有用かと思われる。また、研究に際しては、別の可能性も考えられるだろう。たとえば、教団作成のアニメ・マンガであれば、どのような宗教教団が、いつごろから積極的にアニメ・マンガを布教や宣伝に活用するようになったのか

を知ることができる。一方、宗教教団から離れた場面では、昨今の「宗教情報ブーム」を観察する資料になるだろう。井上の言う「宗教情報ブーム」とは、実際の教団の活動・運動の活発化とは必ずしも結び付かず、各種メディアにおいて「情報レベルで」「宗教に関する話題自体が大量に消費される」というところに本質がある<sup>(20)</sup>。断片化・素材化された宗教情報が大量に消費されるという点において、ポピュラーカルチャーの領域を観察することは一定の価値があるだろう。この領域に限ることではないが、研究者個人では困難な資料・データの蒐集やリスト化を行うことも、CERCの重要な役割の1つかと思われる。

#### 4. 結びにかえて

本稿では、CERCの教材開発の現状を報告し、特に開発中である「宗教文化に係るマンガ」が公開に際して孕む問題点について論じた。

2011年11月に行われる第1回認定試験に向け、CERCのWebページではサンプル問題の提示、「宗教文化を学ぶための基本書案内」、「宗教文化に係る基本用語クイズ」の作成・公開が行われており、受験生が「何を勉強すれば良いのかわからない」という状況は回避できているかと思われる。他、作成中の資料・データに関しても、受験生が幅広く活きた知識を得られるよう、順次開発・公開が続けられる。こうした資料・データが、受験者だけでなく、教員や広く宗教に興味を持つ人達に活用されればと思う。

#### 〈参考文献〉

- 井上順孝『新宗教の解説』筑摩書房、1992年。  
——『若者と現代宗教—失われた座標軸—』ちくま新書、1999年。  
——編『現代宗教事典』弘文堂、2005年。  
——編『映画で学ぶ現代宗教』弘文堂、2009年。  
——編『国際研究フォーラム映画の中の宗教文化報告書』文部科学省科学研究費補助金・基盤研究(A)「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」第2グループ、2010年。  
——編『第10回学生宗教意識調査報告』文部科学省科学研究費補助金・基盤研究(A)「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」第2グループ・國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所、2011年。  
児玉真由美編『Star People for ascension』vol. 24、ナチュラルスピリット、2008年。  
塚田穂高「幸福の科学の映像メディア利用—幸福実現党、映画『仏陀再誕』を中心に—」渡邊直樹責任編集『宗教と現代がわかる本2010』平凡社、2010年、74-79頁。  
中村光『聖☆おにいさん』講談社、2007年—連載中。  
平藤喜久子「現代日本における神話—現代宗教論との関わりから—」『日本文化と神道』3号、2006年、185-196頁。  
マルク・ベルナベ「マンガは日本語学習の強力なツールになる」渡邊直樹編『遠近』19号、国際交流基金、2007年、42-45頁。  
築島史恵「『エリンが挑戦！ にほんごできます。』—この教材で伝えたい考え方—」『日本語教育通信』59号、国際交流基金日本語グループ、2007年、1-3頁。  
山中弘「マンガ文化の中の宗教」島藺進・石井研士編『消費される宗教』春秋社、1996年、158-184頁。

#### 注

- (1) 2010年7月10日、筆者と共に都内の宗教施設を巡った宗教学専攻の学部生の発言より。

- (2) CERC の Web ページ (<http://www.cerc.jp/>) 「教材」 から抜粋。2011 年 8 月 30 日閲覧。
- (3) 宗教文化士認定試験では、記号選択式問題 50 問と論述式問題 1 問が出題される。共に、順次サンプル問題の数を増やしている。
- (4) たとえば、名古屋学院大学における「特色ある大学教育支援プログラム「自学自習プログラム経済学基礎知識 1000 題」」 (<http://www.ngugp.jp/index.html>) などを参照。2011 年 8 月 30 日閲覧。
- (5) 「モーニング公式サイト『聖☆おにいさん』作品情報」より抜粋 (<http://morningmanga.com/lineup/25>)。2011 年 8 月 30 日閲覧。
- (6) 作成中の資料・データはあくまで「宗教文化に関するマンガ」であるが、現代日本においてある程度人気が出たマンガはアニメ化・ゲーム化するメディアミックス戦略を取ることが多く、これらを分割して扱うのは難しい。
- (7) [築島 2007] 2 頁より転載。
- (8) [井上編 2011 : 14-115] を参照。
- (9) [平藤 2006 : 188-189] を参照。
- (10) [平藤 2006 : 190-192] を参照。
- (11) 井上順孝「ハイパー宗教」[井上編 2005 : 417] を参照。
- (12) [井上 1999 : 162] を参照。
- (13) [山中 1996 : 158-184] ならびに、弓山達也「アニメと宗教」[井上編 2005 : 6-8] を参照。
- (14) 映画の詳細については、[塚田 2010] を参照した。また、同論文では、幸福の科学が積極的なメディアミックス戦略を採用していることも指摘されている。そのため、アニメだけでなくマンガにおいても同様の指摘ができる。
- (15) [井上編 2010 : 35-58] を参照。
- (16) 弓山達也「アニメと宗教」[井上編 2005 : 6-8] を参照。
- (17) タイトルのみ挙げれば、16 位『涼宮ハルヒの憂鬱』（監督：石原立也）、25 位『天元突破グレンラガン』（監督：今石洋之）、29 位『少女革命ウテナ』（監督：神山健治）など。なお、この「30 選」にも、スタジオジブリ作品が多く選出されている。[児玉編 2008 : 14-41] を参照。
- (18) [ベルナベ 2007 : 43] を参照。
- (19) 「うさぎ年調神社 22 万人急増」『埼玉新聞』2011 年 1 月 6 日付、16 面。
- (20) [井上 1992 : 208-209] を参照。





## 圓佛教の現況と研究の動向—宗教社会学的視点から—

李 和珍

はじめに

韓国の仏教系の新宗教としては最大の信者規模である圓佛教は、中学、高校、大学の設立などの教育事業や慈善事業、文化事業、社会事業にも熱心な教団である。海外布教にも力を入れて、アメリカ、カナダ、ドイツをはじめ、日本にも支部（教堂）をもっている。同教団についての研究は数多いが、教理面についてなされたものが大部分で、宗教社会学的な視点からのものは、韓国でも日本でもあまりなされていない。

本稿では、まず圓佛教の形成と展開を宗教社会学的な視点から整理する。次に韓国における新宗教研究の中で、圓佛教がどのように位置づけられてきたかを述べる。これを踏まえて、情報時代という現代社会の特質を踏まえた場合に、これから必要とされる圓佛教についての宗教社会学的研究についてつけ加えておくことにする。

### 1. 圓佛教の概要

#### 1. 圓佛教の歴史

圓佛教の歴史については、圓佛教関係の研究者による多くの研究がある。これらに基き、圓佛教がどのような展開過程をたどったかを最初に確認しておきたい。

圓佛教は1916年に創始者の少太山（ソテサン、朴重彬、1891～1943、現在は「大宗師」と呼ばれる）によって、全羅北道益山市で開教された。教団内の見解によれば、少太山は7歳の頃から宗教的な関心をもった。9歳の頃には人生について真剣な問いを抱いてその後も求道生活を送った。一時期は苦行をした時期もあるとされる。26歳の時、1916年4月28日に大覚を成したとされるが、この日を圓佛教では「大覚節」と呼ぶ。圓佛教教団の開教日となっている。

少太山は、これからの世の中は、物質文明の発達によって精神文明が大きく弱まると予言し、人類の精神文明を導けるような新時代の宗教として圓佛教を開いたとしている。開教時の標語は「物質は開闢される、精神を開闢しよう」であり、この考えのもとに、信心深い9人の弟子<sup>(1)</sup>とともに活動を始めた。干潟の干拓事業と貯蓄組合の設立による資金などで経済的な基盤をつくった。基本経典である『正典』と各種教書などを編纂することで精神的基盤が築かれた。全羅北道益山市に中央総部（圓佛教の聖地）が置かれた1924年に、「仏法研究会」という名で本格的な活動を開始した。少太山が教団の基盤をつくったのは日本統治時代（韓国では日帝時代と呼ぶ）である。戦争が終わる少し前の1943年6月1日に53歳で死去したが、教団では彼の死を涅槃と表現する。圓佛教では開教の年からの年数を「圓紀」としているので、少太山の死去は圓紀28年の事となる。

少太山の死後、圓佛教の法統は一番弟子であった鼎山（チョンサン、宋奎、1900～1962、現在は「宗師」と呼ばれる）に継承された。1945年に日本統治から解放されると教団名を「圓

佛教」と改称した。そして戦災同胞救護事業、ハンゲル普及運動などさまざまな活動を展開するようになった。教育にも力を入れ、46年には機関「唯一学林」を設立して教団内の人材養成を始めた。これがやがて現在の圓光大学校をはじめ、傘下の各種教育機関へと発展していく。

鼎山宗師が1962年に死去した後、3代目を大山(テサン、金大舉、1914～1998)宗師が継いだ。大山宗師は宗教間の協力に関心を示し、1965年12月には圓佛教、仏教、儒教、天道教、カトリック、プロテスタントなどの6宗団からなる「韓国宗教人協議会」を設立した。さらに世界の宗教との協力、団結のための「宗教連合運動」も始め、それとともに海外教化にも力を注ぐようになった。海外への展開を考える上ではこの時期が非常に重要である。1971年には圓佛教開教50周年記念大会を1週間にわたって行い、積極的に教徒や教堂を増やすための活動を展開した。1991年には「少太山生誕100周年聖業奉讃大会」が開かれたが、その時紹介された内容から、活動は建設・学術・奉公・財政・文化広報・行事などにわたっていたことがわかる。学術分野では記念論文集や国際宗教学術会議などを通して、圓佛教の思想を教団の内外に知らせる役を担った。

1994年に4代目を左山(チャサン、李廣淨、1936～2006)宗師が継承した。左山宗師は人材育成、体制整備、経済基盤確立、教書翻訳、放送局設立、国際教化など、多面的な活動に力を注いだ。2006年に5代目を継承したのが現在の耕山(キョンサン、張應哲、1940～)宗法師である。なお現在の指導者は宗法師と呼び、過去の指導者は宗師と呼ぶのが、教団内での決まりである。耕山宗法師は、(教化大仏供、教法人格化、遵法運営、恩拡散、結福100年代)の5大経綸をかかげた。5大経綸は専門用語で分かりづらいが、内容的には大衆的な教化を進め、教師の人格を高め、教えを大切に、社会貢献をして、開教以来100年になる節目を充実させることである。

宗法師は圓佛教の最高指導者である。圓佛教教憲では6年が任期であり、最高決議機関である首位団会の在籍団員のうち、3分の2の賛成を得て選出される。

## 2. 組織について

以上述べたように、圓佛教は開教以来、代々の指導者が活動を拡充させる方向に務めてきた。その結果、組織はかなり系統立ったものになっている。そこで現在の組織の概要を示しておきたい。図1<sup>(2)</sup>は教団ウェブサイトで公開されている教団組織図である。教政院企画室で作成した「2008年教団現況」の教団機構図を簡略化したものである。

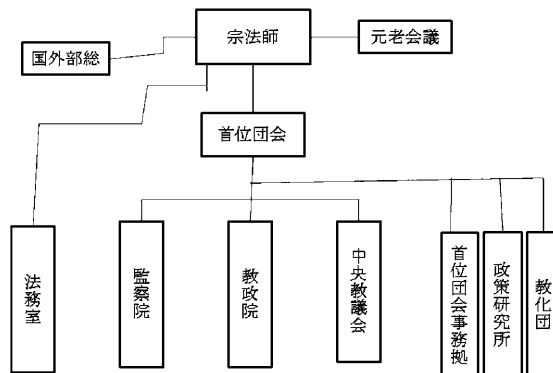


図 1

首位団会とは、首位団の会議体を指す言葉で、教団の最高決議機関で、教団の中心として教団の教化と統治において教団の指導体制をまとめていく機関である。

圓佛教教団には図1でわかるように、監察院と教政院という両院体制に加え、立法機関として中央教議会があり、三権分立体制である。

監察院は中央監察機関である。監察院長1人と監察委員で構成され、監察院事務処で事務を管掌する。教政院は教団行政の中央執行機関で傘下に7部、2室がある。

圓佛教では聖職者を「教務」と呼ぶが、「専務出身」ともいう。教務は定期教育課程を経て、教役者資格試験に合格した者で、出家教役者の名称である。主に教化の使命を持って教堂や関連機関に派遣され、奉職する。教育、行政、慈善、研究、技術、医療などの専門分野に奉仕する「道務」、勤労と機能などの分野に奉公する「徳務」もいる。一定の年限と実績によって「教監」（教区長を指す）、「教領」になる。

### 3. 教理と修行、儀式

ここでは、信仰の対象、教典などの教理に関するもの、年間を通しての儀式、修行の種類とその方法などについてまとめておく。

圓佛教の信仰の対象は「一圓相（イルウォンサン）」で「法身佛一圓相」ともいい、「○」で象徴される。少太山が宇宙の真理を悟った後、その象徴として表現したものである<sup>(3)</sup>。「一圓相」の前で、坐禅・心告・祈祷などの修行、すべての行事などが行われる。一圓相の真理へ向かう方法には、真空妙有の修行門と因果応報の信仰門がある。また三学・八条と無時禅・無処禅の修行を通して一圓相の真理に到達でき、四恩・四要と処処仏像・事事仏供の信仰を通して一圓相の真理へ入ることができる。信仰門と修行門は一圓相の両面性を説明するもので、一圓相の真理は信仰の対象であり、修行の手本になるものである。

そうした圓佛教の教理をまとめた基本経典が『圓佛教教典』である。第1部が「正典」、第2部が「大宗経」となっている<sup>(4)</sup>。「正典」は、少太山が著述したもので思想と経綸が書かれているもので、「元経」ともいう。正典は次の3つからなる。

- ①開教の動機と目的、教法の精神と綱領が記録されている「総序編」。
- ②教理が一圓相を中心に具体的に説明されている「教義編」（一圓相・四恩・四要・三学・八条・人生の要道と勉強の要道・四大綱領<sup>(5)</sup>）。
- ③真理の世界・教理の世界へ近づける方法を示している「修行編」（日常修行の要法・定期訓練と日常訓練・念仏法・坐禅法・疑頭要目・日記法・無時禅法・懺悔文・心告と祈祷・仏供法・戒文・率性要論・最初の法語・苦楽に対する法文・病める社会とその治療法・霊肉双全法・法位等級）。

第2部の「大宗経」は、少太山の言行を記録した基本経典で、一番弟子にあたえた法門で全部で15品<sup>(6)</sup>がある。一圓相の真理を実践するための指針書で「通経」ともいう。

『圓佛教教典』と佛祖要経<sup>(7)</sup>、礼典、鼎山宗師法語（世典、法語）、圓佛教教史、圓佛教聖歌をまとめたのが『圓佛教全書』である。インターネット上の経典・法門集には圓佛教教憲、大宗経選外録（22章）、ハンウルアンハンイチ（1つの棒1つの理という意味で、法門と逸話、平常心で構成）、大山宗師法門集（1輯～5輯）などがある。

圓佛教の修行については、「正典」の「修行編」に詳しく説明されており、日常修行の要法・定期訓練と日常訓練・念仏法・坐禅法・疑頭要目・日記法・無時禅法・懺悔文・

心告と祈祷・仏供法・戒文・率性要論・最初の法語・苦楽に対する法文・病める社会とその治療法・霊肉双全法・法位等級の17章がある。

こうした教理をふまえた圓佛教教徒の日課はどうなっているのでしょうか。まず朝の修養は、朝の心告をし、10分以上の坐禅、1ページ以上経典を奉読する。昼の報恩・努力は、すべての仕事に対して感謝の心を持ち、準備をし、取捨をし、誠実に報恩する。夜の懺悔では、一日の事を反省し（修行日記）、懺悔と誓願の心告をする。このような修行生活において、読経文として常に用いられるのが「一圓相誓願文」である。1938年に少太山がつくった経文で306字の短い内容であるが、一圓相の真理、四恩、三学、因果の理など圓佛教の基本教理が集約されている。一圓相誓願文は朝晩、あるいは一日何回も読経され、教団の各種の儀式行事の際にも読経文として使用されている。



図2

以上の圓佛教の教理・修行は、教理図（図2）として示されている。教理図は少太山が基本教理を分かりやすく、実践しやすくするために図式として表現したものである。教理図について、少太山は「亀のような形をしている。これは末永く伝わる萬古の大法である。私の法の真髓がすべてここにある。この通りに修行すれば、貧富貴賤・有無識・老若男女を問わず、成仏できない人はいないだろう」と語ったという。教理図を亀の形にしたのは東洋の伝統思想に基づいたもので、圓佛教の教法が亀のように数万年間ずっと長く伝わるだろうということの意味する。

次に圓佛教の儀式についてであるが、まず教団の年間の主な行事には「四祝二齋」がある。「四祝」は慶祝日で新正節、大覚開教節、釈尊生誕節、法認節である。新正節は、1月1日に

新年を祝い、新年の計画や希望を祈願する。大覚開教節は、4月28日に行われるが、少太山の覚と圓佛教の開教を毎年慶祝する全教徒の共同誕生日である。釈尊生誕節は4月8日(旧暦)の釈迦の誕生を記念する日である。法認節は、8月21日に9人の弟子の白指血印<sup>(8)</sup>の祈祷による法認成事を記念する日で、圓佛教の創立精神を表し、法界の認定を得たことを祝う。

「二斎」は大斎ともいい、六・一大斎と名節大斎を指す。六・一大斎が行われる6月1日は少太山の涅槃日を合同で追悼する日で、歴代諸仏諸聖及び父母・先祖・一切生霊を追慕するための儀礼(「享礼」と呼ばれる)である。名節大斎は12月1日に行われるすべての聖賢、父母、先祖、一切の生霊を追慕する享礼である。

圓佛教では圓佛教信仰を信じることを決意して「入教」の正式な手続きを経て、圓佛教の名前(法名)を貰った人は「教徒」になる。正式な手続きを経ていない人は「信徒」という。その差は権利と義務の行いにある。圓佛教教徒は、「教堂」と呼ばれる教徒たちが集合して各種の宗教生活をする場所に、毎日曜に集まり、「法会」を行う。教堂には「教務」と呼ばれる人物が常住して管理し、教務が法会を進行させる。法会はその性格によって、学生法会、青年法会、子ども法会、水曜夜会、月曜法会などがある。

#### 4. 教団施設及び関連事業

ここでは教団施設と関連事業などについて紹介する。圓佛教には中央総部を中心にし、全国に多くの教堂と関連機関があるが、創立初期から修養集団というより社会に貢献できる宗教団体を目標とし、事業目標を教化・教育・慈善と決めた。この三大事業を中心に教団施設と関連事業が展開されてきた。現在は教化・教育・福祉・文化の4つに分類されている。それぞれの内容のあらましを、教団ウェブサイトに掲載された記述を参照してまとめておく。

教化事業は、国内全国の教区と教堂の他、国外の複数の教堂でも行われている。また教化団及び法会活動、宗教協力運動参与、軍宗教化活動、心の勉強会運営(サイバー)、サムドン青少年会運営(サイバー)、教政教化活動(刑務所、少年院)があり、5ヶ所の聖地<sup>(9)</sup>でも行われている。聖地について簡単に説明しておく。

- ① 靈山聖地(全羅南道靈光郡)は少太山が生まれ、求道の苦行を通して真理を悟り、教化を始めた圓佛教の発祥地である。聖地施設と靈山圓佛教大学校がある。
- ② 邊山聖地(全羅北道扶安郡)は少太山が教法を制定した蓬萊精舎(蓬萊山にある教法を制定した家)の近辺で「制法聖地」ともいう。邊山聖地の守護と管理を担当する邊山圓光禪院とハドの海上訓練院がある。
- ③ 益山聖地(全羅北道益山市)は圓佛教の中央総部がある「伝法聖地」であり、「総部聖地」ともいう。少太山が総部を立て、18年間の教化活動をし、涅槃にいたったところである。いわば教団の心臓部であり、大覚殿、大宗師聖塔、聖碑、永慕殿、圓佛教歴史博物館、元老院、修道院などがある。
- ④ 萬徳山聖地は(全羅北道鎮安郡)1924年の「仏法研究会」創立総会以後、萬徳庵で圓佛教最初の夏禪(非公式)を行った(萬徳山初禪会)場所である。現在は萬徳山訓練院がある。
- ⑤ 星州聖地(慶尚北道星州郡)は2代宗法師である鼎山宗師の誕生地で、求道を行った聖地である。

教育事業として、圓光大学校、圓光保健大学校、圓光デジタル大学校を運営しており、圓



佛教の教役者養成のための靈山禪学大学校、圓光大学校の圓佛教学科、圓佛教大学院大学校、米州禪学大学院大学校がある。圓光高等学校のほか6校の中・高校、また靈山聖地高校、ハンギョレ中・高校のほか、6つの各種学校（韓国で「代案学校」とよばれるもの）や幼児教育機関を140ヶ所運営している。

福祉においては、疎外され、生活の困難な人々のための社会福祉事業展開、教団の元老のための静養施設運営、老人、障害者、保育、総合福祉施設100余ヶ所運営、圓光大学校病院をはじめとする総合病院、漢方病院など20余ヶ所の医療機関運営。ウンヘシムキ（恩を植える）運動本部と圓佛教奉公会を中心とする分け合う運動などを実践している。

文化事業として、FM圓音放送、漢方健康TV（衛星、ケーブル放送）、圓佛教TVを運営している。教典の刊行や定期刊行物としては圓佛教新聞（週刊）<sup>(10)</sup>、月刊圓光（雑誌）<sup>(11)</sup>の発行がなされている。（社）圓佛教文化芸術人総連合会の活動、全国圓音合奏祭、圓佛教美術祭なども開催されている。

韓国には軍隊に軍宗（軍隊内の宗教関連兵科）として、仏教、カトリック、プロテスタントがあるが、2006年に圓佛教が兵制編入の対象宗教として指定され、2007年6月に第1号の軍宗将教の任官式が行われ、2011年6月に第2号の軍宗将教が任官されるなど、圓佛教の将兵の信仰と修行を指導する<sup>(12)</sup>。圓佛教が韓国の軍隊の4大宗教になっている。

## 5. 日本を含む圓佛教の現況

圓佛教の活動、教団の教徒数、教堂数、機関数などは圓佛教の公式ウェブサイトの「2008年教団現況」に示されている。

現在の教徒数は、27万1,705名（海外4,248名含む）である。これに対し、韓国の統計庁で10年毎に実施する「国民住宅総調査」によると、2005年に12万9,907名で、同調査の1995年の8万6,823名より増加している<sup>(13)</sup>。2つの数値を比較すると、教団で発表している教徒数は統計庁調査の2倍である。

教団現況によると、国内に16教区505ヶ所の教堂、機関教堂31、機関137がある。国外にはヨーロッパ、米州東部、米州西部、日本、中国の5教区と20ヶ国の65ヶ所の教堂がある。アメリカ、日本、カナダ、ドイツ、南アフリカなどに100名以上の教役者を派遣しており、米州禪学大学院などでは、海外教徒の教育と訓練を行っている。

日本には70年代に大阪を中心に布教を始めたが、現在は横浜、東京にも教堂がある。東京教堂は90年代に錦糸町を拠点に活動を始めたが、2006年5月に葛飾区金町に移転した。そのおりに、日本教区庁・東京教堂の奉仏式を行い、本格的な教化活動を開始している。東京教堂には「圓佛教東京教堂韓国文化センター」という看板が掲げられている。

この東京教堂には、奉仏式の式典をはじめ、法会や行事など数回にわたって訪問し、面談調査や参与観察を行ってきている。その調査結果については別途扱う予定であるが、ここでは、日本での活動状況を補足する意味で、現在の活動状況の概略のみを示しておく。東京教堂では第2・第4目の日曜日に法会があるが、在日韓国人とその配偶者、韓国から来た圓佛教教徒の留学生が主な参加者であり、日本人の信者・教徒は少ない。韓国語講座が週3回ほどあり、10人前後の日本人が参加する韓国文化教室が開かれている。韓国語講座を通して圓佛教を知ってもらい、教徒になるケースも少数ながら、あるという。現在まで常住教務の交代が3回ほどあった。現在は日本留学の経験のある教務がいるため、必要に応じては日本語

での法会も可能な状況である。

圓佛教のウェブサイトには「ウォンマウル（圓村）」というコンテンツがあって、所属・性格・会員の対象によってそれぞれの集いのサイトをつくることができる。東京教堂もウォンマウルを2008年に作成して、現在71名の会員が加入している<sup>(14)</sup>。圓佛教のウェブサイトのIDを持っていて東京教堂について関心のある人なら誰でも加入することができる。

## II. 圓佛教の宗教社会学的研究

### 1. 韓国新宗教の中における圓佛教の位置づけ

圓佛教は韓国の新宗教の一つだが、韓国の新宗教研究においては、圓佛教をどう分類するかは研究者によって異なる。新宗教は教義上の特徴などによる系統別の分類が一般的である。また実態調査の結果からみると活動している団体の数は350以上である。

韓国新宗教の研究は1910年代から始まったが、村山智順『朝鮮の類似宗教』（朝鮮総督部、1935）が戦前の研究としてつねに参照される。

戦後、60～70年代から民族宗教に関する研究が活発に展開し始める。韓国民族宗教を研究する目的で設立された研究所がいくつかある。1962年李康五の韓国新興宗教研究所、1967年柳炳徳の宗教問題研究所、1970年に卓明煥の韓国宗教問題研究所、1977年のイ・キョンウのセ（新）宗教研究院である。

1980年代には70年代の研究をふまえ、韓国社会で「民衆」「民族」が強調される時代を背景に、民族宗教に対する研究でも社会変革思想や民衆思想に関心度が高くなった。

90年代には、民族宗教思想に基いて女性・統一・倫理・環境などの社会問題に対する対案を提示した研究や韓中日の比較研究などが注目される。

こうした韓国の新宗教研究においては、圓佛教はどう位置づけられているのであろうか。主な研究における圓佛教の区分名を示してみる。

- ・村山智順『朝鮮の類似宗教』（朝鮮総督部、1935）：（戦前は仏法研究会という名称）「仏教系類似宗教」
- ・文化広報部『韓国新興及び類似宗教実態調査報告書』（1970）：「仏教系新興民族宗教」
- ・ソウル大学校宗教学科宗教文化研究室『転換期の韓国宗教』（ジプムン堂、1986）：「韓国自生宗教」
- ・卓明煥『韓国新興宗教の実像』（国際宗教問題研究所、1991）：「純粋な韓国産仏教団体」
- ・韓国民族宗教協議会『韓国民族宗教総覧』（1992）：「韓国で自生した民族宗教」
- ・李康五『韓国新興宗教総監』（韓国新興宗教研究所、1992）：「系統不明の仏教教団」
- ・柳炳徳・金洪喆・梁銀容『韓・中・日三国新宗教実態の比較研究』（圓光大学校の宗教問題研究所、1992）：「韓国開創の新宗教」
- ・韓国精神文化研究院『現代韓国宗教変動研究』（1993）：「民族宗教」
- ・韓国宗教研究会編『韓国新宗教調査研究報告書』（1996）：「仏教系新宗教」
- ・柳炳徳・金洪喆・梁銀容『韓国新宗教実態調査報告書』（圓光大学校の宗教問題研究所、1997）：「韓国自生新宗教」
- ・韓国宗教研究会『韓国宗教文化史講義』（図書出版青年社、1998）：「日本統治時期の仏教系新宗教」
- ・チェ・ジュンシク『韓国の宗教、文化で読む2 道教・東学・新宗教』（サゲジョル出版

社、2003)：「韓国自生新宗教」<sup>(15)</sup>

これをみると、圓佛教関係者である柳炳徳他の2つの書籍の分類の仕方から分かるように、圓佛教は自分の教団が「自生宗教」、つまり土着の宗教であることを強調し、仏教系新宗教としては分類していないことになる。

しかし、日本の新宗教研究における区分法を参照すると、仏教系の新宗教としてみなしてさしつかえない。その形成過程や教義に仏教的な要素が強くみられるからである。

以上のように、圓佛教は時代ごとに韓国自生新宗教、民族宗教、仏教系新宗教などと分類され、位置づけられているが、学者によって新宗教についての定義や分類法が実に多様であることも分かる。この点は日本における新宗教研究とは大きく異なる。むしろ圓佛教独自の教理や儀礼があるが、圓佛教にもっとも大きく影響を及ぼしているのは仏教である。実際の法会の様子からでも、坐禅や木魚による読経、般若波羅密多心経・金剛教を唱えるなど仏教の要素が多い。圓佛教を仏教系新宗教とすると、その中では現在韓国最大の信者数を擁し、社会的な影響ももっとも大きい。圓佛教の形成と展開過程を検討することは、近現代の韓国社会で仏教から影響を受けた新しい教団がどのような形で社会に発言し、行動したのかを探るうえで重要であると考えられる。

## 2. 圓佛教についての先行研究と分析

これらを含め、圓佛教の先行研究においては、圓佛教に対してどのような面に焦点があてられ、どのような特徴づけがなされてきたのであろうか。当然ながら、教団内からの研究と教団外からの研究では、重視するところが異なるので、大きく教団内のものと教団外のものに分けて示したい。

まず、教団内の研究について述べる。圓佛教教団は、教育事業として学校や研究所などの教育・研究機関があり、そうした機関における研究が、圓佛教研究の大半を占めている。具体的には、圓光大学の修士・博士論文、圓光大学宗教問題研究所、圓佛教思想研究院、教団出版社の論文集、学術誌、学会誌などである。

学術誌としては、次に4つである。

- ①『圓佛教文化論叢』第1輯～第9輯(2007)(一圓文化研究財団)。
- ②『圓佛教学』第1輯(1996.2.25)～第9輯(2003.6.30)(韓国圓佛教学会)。
- ③『圓佛教学研究』1972年～80年まで発刊(圓光大学校圓佛教研究班)。
- ④『圓佛教思想』第1輯(1975)～第26輯(2002)(圓光大学校圓佛教思想研究院)。

※第27輯(2004)から『圓佛教思想』が『圓佛教思想と宗教文化』と変わり、2011年6月までで第48輯(圓佛教思想研究院・韓国圓佛教学会)になる。

上記のうち、『圓佛教学』と『圓佛教思想と宗教文化』はタイトルがすべて確認することができたので、それを参照してそのおおまかな傾向を示す。

まず『圓佛教学』は韓国圓佛教学会による学術論文集であり、特集と研究論文からなる。

特集として組まれているテーマとして、第1輯は「圓佛教学研究の現況と課題」「圓佛教信仰論の課題」など、第3輯は鼎山宗師誕生百周年記念'97秋季学術大会(宋鼎山の『建国論』)、第5～7輯は未来社会と宗教(Religions in Our Future Society)、第8輯は統一時代と圓佛教の展望、伝統思想と現代化と鼎山宗師である。

研究論文はどのようなテーマを扱っているであろうか。第1輯には、一圓相信仰の初期形

成過程の研究、圓佛教の社会倫理の儒教的接近、圓佛教の社会奉仕組織の特性研究、圓佛教研究の新科学的な試み、死に対する意識研究などの論文がある。第2輯には、圓佛教禅修行の特徴、少太山の神明思想、圓佛教の生命思想のほか「中国精神文明建設と圓佛教の精神開關思想」「韓国カトリック事例からみた圓佛教の社会奉仕」という比較研究がある。

第3輯には、「仏教と圓佛教との関係」や「解放後仏法研究会のパンフレットに関する研究」、また第4輯には、圓佛教思想と現代社会、鼎山思想の展開、東洋思想と圓佛教の三つのテーマによる論文などがある。第6輯には、「21世紀圓佛教の課題と方向」「圓佛教宗教儀礼からみた象徴体系」「圓佛教の死観の一考」「圓佛教社会事業の省察と課題に関する研究」があり、第8輯には「圓佛教研究の最近動向と課題」「圓佛教思想に基づく21世紀老人福祉の方向」「圓佛教教典」から見た圓佛教の障碍人観などがある。そして第9輯には、「21世紀道德教育の方向」「知識情報社会と青少年修練活動の活性化法案」「圓佛教サイバー教化の方向性模索」「圓佛教学研究の当面課題」などの論文がある。

以上のように研究論文としては教団の教学、思想と教団の未来に対する課題や方向性についての研究が主であることが分かる。

次に『圓佛教思想と宗教文化』に掲載された研究論文をみると、大きく3つに分類することができる。

- ①創始者の少太山大宗師と2代目の鼎山宗師の思想、意識、宗教観、人間観、建国観などに関する論文。
- ②圓佛教教団の開教過程・成立史や現況、思想、未来観、儀礼、修行、福祉、社会参与活動、医療と宗教文化、社会事業、青少年・児童教育、教堂・教化方法論、宗立大学の教化方向、「院報」（圓佛教思想研究院）についての分析、宗教連合運動など。
- ③比較研究としては、韓国伝統思想と圓佛教、仏教・儒教・道教との交渉、民族儀礼と圓佛教儀礼、韓・中・日三国の新宗教運動の性向など。

ちなみに韓国の国会図書館で「圓佛教」で論文検索すると、2,000件以上がヒットしたが(2011年8月)、そのほとんどが圓佛教教団関連の大学校・大学院の修士・博士学位論文及び上記で触れた論文などである<sup>(16)</sup>。この論文の中には若干ながら宗教社会学的な観点からのものが含まれているようだが、現時点では論文の収集が十分ではないので、これらの論文に関する分析は別稿において行いたい。

同じく図書類は200件ほどヒットした。教団関連の出版局で出版されたものの割合が高いが、これを教団内と教団内に分けて簡単に紹介する。

教団関連出版は、圓光大学校出版部、靈山圓佛教大学校出版局、月刊圓光社、圓佛教出版社、圓佛教教化研究会、圓佛教中央総部、圓佛教新聞社などによって出版されたものが主である。ほとんどが教理・思想などに関するものである。

圓光大学校出版局では、『圓佛教事典』（1974）、『圓佛教と東洋思想』（柳聖泰著、1995）、『少太山と圓佛教思想』（柳炳徳著、1995）、『圓佛教教化論』（除慶田著、1989）、『一圓相真理の諸研究』（圓佛教思想研究院編、1989）など。

靈山圓佛教大学校出版局では、『青少年の心理理解と相談』（少太山思想研究院編、1998）、『青少年イデア：現代社会と青少年の諸問題』（少太山思想研究院、1997）、『宗教的靈性フェミニズムとエコフェミニズム』（ハ・チョンナム著、1999）、『女性未来：生命共同体』（女性問題研究所、1997）。



月刊圓光社では『心の養殖：教務74人説法集め』（圓光編輯室、1989）、『真理は一つ、世界も一つ：大山宗法師法坐30年』（月刊「圓光」編集室、1992）など。

圓佛敎出版社では、『圓佛敎全書』（圓佛敎正化社、2002）、『圓佛敎敎典・聖歌』（圓佛敎正化社、1992）、『楽園の家庭を作る道』（圓佛敎法務室編、2008）、『圓佛敎の人はどんな人たちであるか』（柳聖泰著、2002）、『環境倫理と圓佛敎の恩思想』（姜ソンキョン著、2001）、『坐禅法』（呉光益編、1990）、『圓佛敎理解の第一歩』（金イルサン、2001）など。

圓佛敎思想研究院では、『圓佛敎の人物と思想』（圓佛敎思想編纂委員会編、2001）、『圓佛敎と21世紀』（2002）。圓佛敎新聞社では、『左山宗法師法門集』（左山宗法師、2005）。

圓佛敎敎化研究会『韓国近代史から見た圓佛敎』（圓光、1991）には、民族運動、儒敎思想の受容に関する研究、一圓相の道敎的考察、甌山との出会い、敎育思想と展開について述べている。

柳炳徳・金洪喆・梁銀容『韓・中・日三国新宗教実態の比較研究』（圓光大学校の宗教問題研究所、1992）には、圓佛敎についての概要が簡単に紹介されている。

圓佛敎敎材研究会編『宗教と圓佛敎』（圓光大学校出版局、2003）には、圓佛敎の歴史と思想、現代社会と圓佛敎（平等社会への道、韓半道の平和統一と圓佛敎、圓佛敎の儀礼文化、環境問題と圓佛敎など）。

敎団外の書籍については、I-1.の「韓国新宗教の中における圓佛敎の位置づけ」で紹介した書籍などが主なものであるが、それらの大半は新宗教全体を紹介する中に圓佛敎にも短くふれるだけのものがある。ただ、チャ・オクスンとチェ・ジュンシクによるものは圓佛敎を主たる対象とした書である。チャ・オクスン『韓国人の宗教経験 甌山敎・圓佛敎』（ソクァン社、2003）は、少太山の社会・思想的背景や一圓相の真理についてまとめており、チャ氏が直接面談を通して採録した体験談が中心で紹介されている。チェ・ジュンシク『韓国の宗教、文化で読む3 甌山敎・圓佛敎』（サゲジヨル出版社、2004）では、圓佛敎を「韓国型仏敎の誕生」と形容しており、少太山の人格、敎団の形成過程、圓佛敎の思想、圓佛敎の現況と問題について述べている。

ほかに短いながら圓佛敎の特徴を他の宗教と比較して述べたものに金洪喆「水雲 甌山少太山の儒・仏・仙 三敎観」、『韓国宗教』4・5（圓光大宗教問題研究所、1980）、柳炳徳『韓国思想と圓佛敎』（キョムン社、1989）、韓国宗教研究会『韓国宗教文化史講義』（図書出版青年社、1998）、キム・ソンレ他『韓国宗教文化研究100年』（図書出版青年社、1999）、キム・スンヘ他『韓国の新宗教とキリスト敎』（バオロタル、2002）など多数ある。

チャとチェによる2書とその他の圓佛敎が簡単にふれられた図書において圓佛敎がどう扱われているかをみると、次の3つの点がある。

- ①韓国の新宗教の中の1つとして分類し、全体的特徴を説明する。
- ②敎団史を記述したうえで敎理、信仰の真理、聖典、儀式、修行、組織について述べる。
- ③他の類似の新宗教との比較研究。主に水雲・甌山と少太山との思想の比較など。

### 3. 宗教社会学的視点

韓国の新宗教について宗教社会学的視点から研究が始まったのは、盧吉明「新興宗教発生の社会学的意味」（『新生命』、1975）、「新興宗教組織体形成の背景に関する研究」（『人間と未来』、1976）である。しかし、圓佛敎についての宗教社会学的研究は、以上の論文や書籍



などから見てわかるようにまだ少ない。

その中でも宗教社会学視点を導入して研究をしている学者としては、柳聖泰、韓乃昌の二人をあげることができる。二人とも圓光大学校圓佛教学科教授である。柳聖泰は「知識情報社会と教役者像」(『圓佛教学』第9巻、2003)などで、圓佛教の教務論を21世紀知識情報化社会と連関させており、特にインターネット教化に焦点を当てている。『21世紀の価値と圓佛教』(東南風、2000)、『知識社会と聖職者』(圓光大学校出版局、1999)、『競争社会と圓佛教』(圓光大学校出版局、1998)などの著書もあり、社会と圓佛教との関係、教団がどのような対応をしていくのかなどを提示している。

韓乃昌は「圓佛教教堂教化の実態分析」(『圓佛教思想』第21輯、1997)で、教化現場における教務を中心としたアンケート調査を通して、教化の状況把握、どのような要因が教化の状況に対する認識度と関わっているかなどを分析している。

また「宗教性が青少年の親社会的行動に及ぼす影響」(『圓佛教思想』第24輯、2000)ではアンケート調査・現場調査を行い、その結果を分析している。宗教は個人の倫理感覚で形成されているのかという仮説に、青少年は周辺の宗教的ネットワークによって宗教を選択しているという。佛教の学生を除いて、家族内の宗教一致度は70～80%を超えていることがわかり、青少年の宗教の選択は自分の意思より親のような1次集団の宗教的ネットワークによって決まるということが分かったという。

圓佛教についての宗教社会的視点からの研究が少ないので、筆者は圓佛教教徒を対象として2007年～08年に意識調査を実施した。1,200部以上の結果を得て、その結果を論文としてまとめた。「新宗教の先祖祭祀の日韓比較—妙智會と圓佛教の事例を中心に—」(『國學院大學研究開発推進機構紀要』第2号、2010年3月)と、「圓佛教教徒の意識調査—アンケート調査の分析を中心に—」(『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』第3号、2010年9月)である。また、圓佛教のウェブサイトの情報発信の特徴については「韓国新宗教のウェブによる情報発信—圓佛教を中心に—」(『ラク便り』第39号、2008年8月)に紹介している。

教徒へのアンケートと面談調査、教団ウェブサイトの分析はいずれも基本的に社会学的な視点によるものである。今回紹介した先行文献の多くは教団側の自己理解、理念など、教団のあるべき目標などを示したものである。教団活動についての現況と課題などを示している研究もあったが、実際の活動の展開はどうであるか、教徒たちはどう考え、どの程度実践しているかなどについては宗教社会学研究によるものによって確認する必要がある。

筆者が行ったアンケート調査とここで述べた文献で示されている内容を比較したときに、興味深く感じられた点を二、三述べておきたい。それは宗教連合活動や社会奉仕運動の教団行事についての教徒の認知度である。教団の社会活動においては5代目の宗法師になってから力を入れているが、筆者のアンケートで「圓佛教が推進している社会奉仕活動(恩作る運動、奉公会、女性会)などについて1つだけ選んでください」と質問した結果では次のような回答結果となった。「知っていて、活動にも積極的」23.4%、「知っているが、あまり活動には参加しない」55.4%、「聞いたことがあるが、詳しくは知らない」20.5%。これを見ると、半数以上があまり活動しておらず、2割は活動そのものについてもよく認知していないということが分かる。

教団は国際教化にも力を入れているとしているが、アンケートでは「圓佛教は海外に向け

での活動をしているが、海外布教についてどう思いますか。1つ選んでください」と聞いた。その結果を見てみると、回答は、「海外にも多くの教堂ができてほしい」72.9%、「日本などアジアの近い国に教堂ができてほしい」24.9%、「海外支部は特に要らないと思う」1.8%となった。教団の国際的な活動に対しては、全体的には好ましいと考えていることが分かった。国際教化に関しては、その意義が教徒たちにも共有されているとみなしていいだろう。

圓佛教のウェブサイトに関しては、非常に充実していて、情報は豊富なのであるが、アンケート結果から教徒の受け止め方を見ると次のとおりである。「インターネット上に圓佛教のホームページがあることを知っていますか」と質問した結果は、「はい」88.1%、「いいえ」11.7%となり、関心度は高いことが分かる。しかし、この質問のサブクエスチョンで、①「圓佛教ホームページについてどう思いますか」、②「圓佛教ホームページに求める情報は次のうちどれですか」と質問した結果は次のようになった。①については「充分」40.9%、「まあまあ」38.7%、「不十分」8.9%であった。

②については、多い順に「教団の紹介や活動内容をもっと充実させてほしい」32.5%、「教堂別やウォンマウル別の情報交換が可能な場を増やしてほしい」22.3%、「総部の行事様子を動画で掲載してほしい」20.6%、「教団の行事やお知らせなどを詳しく記載してほしい」15.7%、などとなった。ウェブサイトは体系的に作成されているので、教徒たちも実際にある程度利用し、信者同志の連絡手段としても機能していることが分かる。たださらに充実させて欲しいという回答もあるので、比較的充実しているウェブサイトでも、現代の信徒たちからすれば、改善を求めたいという意見も少なくない。情報時代の急速な進行を考えると、この結果は当然に思える。

## まとめに

以上、述べたように圓佛教関係者による研究は、教団の歴史や教理・儀式、創始者・指導者が目指す思想・教団の方針、教団の歴史展開については細かい分析がなされている。組織についてもウェブ上で詳しく公開されているため、教団についての情報を部外者もかなりの程度、知ることができる。しかし、それを教徒や社会側がどう受け止め、どう実践されているのか、理念と実際の状況にはズレがあることなどを探るためには、さらに社会学的な調査を重ねなければならない。

今回の文献調査で、宗教社会学的視点からの研究は少ないことが明らかとなり、日本の新宗教研究と比較しても分析の視点は多様ではない。圓佛教は韓国で4大宗団として数えられており、日本でも韓国の新宗教を扱う場合には、必ず言及されるような教団であるので、実態調査による基礎データの収集をさらに続けていくことが求められている。

今後は、圓佛教の宗教社会学的研究として、世代間の意識の差、実践における地域差、新しい活動形態などを調べることによって、戦前の日本統治時代に形成された新宗教が、情報化など新しい社会変化の局面の中で、どのような対応をしようとしているかを調べていきたい。その際は、同じようなタイプの日本の新宗教が示している変容のあり方との比較が有効であると考えている。すでに妙智會教団との比較研究に着手しているが、そうした研究を深めていきたい。情報化が宗教に与える影響は日本でも韓国でも同じような面が多いと思われるので、信者の側からの視点を重視することで、その影響についてさらに考察を加えたい。

## 参考文献

- ・イ・ソンテク『新時代の宗教：教理図を通してみた圓佛教』ソプリ、2003年。
- ・圓佛教『圓佛教経典<正典・大宗経>』圓佛教中央本部、1975年。
- ・圓佛教学教材研究会『圓佛教学概論』圓光大出版局、1983年。
- ・圓佛教教政院教化訓練部『新お釈迦様（少太山朴重彬大宗師の生涯）』教化訓練部編修委員会、2001年。
- ・韓国宗教研究会『韓国宗教文化史講義』図書出版青年社、1998年。
- ・キム・ソンレ他『韓国宗教文化研究100年』図書出版青年社、1999年。
- ・キム・イルサン『圓佛理解の第一歩』圓佛教出版社、2001年。
- ・キム・スンヘ他『韓国の新宗教とキリスト教』バオロタル、2002年。
- ・キム・ホンチョル『圓佛教思想論考』圓光大学出版局、1980年。
- ・ソウル大学校宗教学科宗教文化研究室『転換期の韓国宗教』ジプムン堂、1986年。
- ・チャ・オクスン『韓国人の宗教経験 甌山教・圓佛教』ソクァン社、2003年。
- ・チャ・ヨンジュン『伝統文化の理解5 韓国の新宗教文化編』全州大学校出版部、2001年。
- ・チェ・ジュンシク『韓国の宗教、文化で読む2 道教・東学・新宗教』サゲジョル出版社、2003年。
- ・チェ・ジュンシク『韓国の宗教、文化で読む3 甌山教・圓佛教』サゲジョル出版社、2004年。
- ・崔東熙・柳炳徳共著『韓国宗教思想史Ⅲ 天道教・圓佛教編』延世大学校出版部、1999年。
- ・卓明煥『韓国新興宗教の実像』国際宗教問題研究所、1991年。
- ・柳炳徳『韓国思想と圓佛教』キョムン社、1989年。
- ・李和珍「韓国新宗教のウェブによる情報発信－圓佛教を中心に－」『ラク便り』第39号、2008年。
- ・李和珍「新宗教の先祖祭祀の日韓比較－妙智曾と圓佛教の事例を中心に－」『國學院大學研究開発推進機構紀要』第2号、2010年。
- ・李和珍「圓佛教教徒の意識調査－アンケート調査の分析を中心に－」『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』第3号、2010年。

## 注

- (1) 圓佛教では入教した教徒には俗世の名を捨て、圓佛教人として生まれ変わるという意味で法名をつけ、入教式を行う。初めて法名がつけられたのがこの9人の弟子である。団長が少太山（朴重彬大宗師）、中央団員が鼎山（宋奎）、団員が一山（李載喆）、二山（李旬旬）、三山（金幾千）、四山（呉昌建）、五山（朴世喆）、六山（朴東局）、七山（柳中）、八山（金光旋）。圓佛教教政院教化訓練部『新お釈迦様（少太山朴重彬大宗師の生涯）』教化訓練部編修委員会、2001。
- (2) 教団公式サイト <http://www.won.or.kr/index.jsp> の「圓佛教案内」という項目にある「圓佛教の現況」には「圓紀93年（2008）統計」という名のファイルがあり、ダウンロードできるようになっている。そのファイルが「2008年教団現況」である。
- (3) 日本語版『圓佛教教典<正典・大宗経>』（圓佛教中央本部、1975）には、一圓相の真理について「一圓相は、宇宙万有の本源であり、諸仏諸聖の心印であり、一切衆生の本源であり、大小有無に分別のない境地であり、生滅去来に変化のない境地であり、善悪業報の絶えた境地であり、言語有相の頓空なる境地である。しかし、その無の境地よりあらわれた空寂靈知の光明によって、大小有無に分別があらわれ、善悪業報に差別が生じ、言語名相が歴然として、十方世界は掌中の珠のようにはっきりあらわれ、真空妙有の造花は宇宙万有を通じて無始曠劫にわたり、隠顕自在している。これが一圓相の真理である」と記されている。
- (4) 教団の初期に「仏法研究会規約」（1924年、教団統治と教徒の訓練のための教書）、「仏法研

究会統治組団規約」(1931年、教徒の勉強と事業を指導・訓練するための10人1団の組団規約)、「会員須知」(1936年、教理と制度について説明)、「三大要領」(1934年、「六大要領」を縮約したもの)、「六大要領」「修養研究要論」「勤行法」(1939年、圓佛教の基本教理、仏教教理)、「仏教正典」(1943年、小太山が制作した圓佛教の初期教書の集大成版)などを教書として使用してきたが、1962年に『圓佛教教典』を発行。<http://www.won.or.kr/dictionary/index.jsp>の圓佛教用語辞典参照。

- (5) 一圓相(真理・信仰・修行・誓願文・法語)、四恩(天地恩・父母恩・同胞恩・法律恩)、四要(自力養成・智者本位・他子女教育・公道者崇拜)、三学(精神修養・事理研究・作業取捨)、八条(進行四条・捨捐四条)、人生の要道(四恩・四要)、勉強の要道(三学・八条)、四大綱領(正学正行・知恩報恩・仏法活用・無我奉公)。『圓佛教教典<正典・大宗経>』圓佛教中央本部、1975。
- (6) 大宗経は序品、教義品、修行品、人道品、因果品、辨疑品、性理品、仏地品、薦度品、信誠品、要訓品、實示品、教団品、展望品、附属品で構成されている。日本語版『圓佛教教典<正典・大宗経>』圓佛教中央本部、1975。
- (7) 圓佛教の補助経典である。5つの経(金剛般若波羅密経、般若波羅密多心経、四十二章経、賢者五福德経、業報差別経)と3つの語録(修心訣、牧牛十図頌、休休庵坐禅文)。金イルサン『圓佛教理解の第一歩』圓佛教出版社、2001。
- (8) 少太山と9人の弟子が圓佛教創立の精神的基礎を固めるために天地神明に捧げた特別祈禱を「血印祈禱」という。これは、100日間の血印祈禱の際に、9人の弟子が「死無餘恨」と書かれている白紙に名前を書き、朱肉をつけずに捺印したところ、赤い色へと鮮明に染まっていったとされる出来事である。圓佛教用語辞典参照。
- (9) この5ヶ所の聖地については、教団のサイトにある「圓佛教案内」のところに「サイバー聖地巡礼」という項目があり、各聖地の概要・案内・巡礼道などが写真やイラストとともに説明されている。
- (10) 圓佛教新聞は <http://www.wonnews.co.kr/> のサイトでネット会員になると閲覧可能である。
- (11) 1949年創刊された教団の機関誌で日本統治時代の「会報」を継承したもの。定期的に発行したが、1948年8月120号より月刊発行することになった。「圓光」誌の発行のため「圓光社」を設立、教団の各種印刷業務を担当している。圓佛教用語辞典参照。
- (12) 圓佛教軍宗教区のウェブサイト (<http://www.wgunjong.or.kr/>) があり、軍宗教区紹介や後援事業、軍教化便りなどが紹介されている。キム・ナクピル「民族宗教研究の回顧と課題」(キム・ソンレ他『韓国宗教文化研究100年』図書出版青年社、1999)参照。
- (13) \* 国民住宅総調査の宗教別人口数

年	全人口	無宗教	仏教	プロテスタント	カトリック	圓佛教
2005	4704万 1434名	2186万5160名 (46.9%)	1072万6463名 (22.8%)	861万6438名 (18.3%)	514万6147名 (10.9%)	12万9907名 (0.3%)
1999比			40万5千人余名増	14万4千人余名減	219万5千人名増	4万4千人余名増加

- (14) <http://www.won.or.kr/wonmaeul/club/0001111/index.html>
- (15) 文化日報(1998. 2.28)に掲載された「系列別新興宗教」の区分表がある。この表には、韓国自生新宗教として、檀君系、水雲系、一夫系、甌山系、奉南系、覺世道系、巫教系、仙道系、儒教系、系統不明、関連団体も含まれている。
- (16) 教団関係者によると、修士・博士学位論文に関しては、ほとんどが教理・思想を中心にした「教理論文」を書き、教務などの聖職者や教職員などは教理・思想についての研究もするが、それをどう活用し、教化へ繋げていこうかという「実践論文」を書く場合が多いという。



## スタッフ紹介

\* 氏名、現職、専門分野、担当プロジェクト、および2010年度の研究業績について紹介しています。今年度新任のスタッフとしては、研究紹介および2010年度以前の研究業績についても掲載しています。

---

**井上順孝** 所長・教授 宗教学・宗教社会学

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

### [単行本]

- ・(編集責任)『インターネット時代における宗教情報リテラシーに関する研究』(國學院大學)、2010年7月
- ・(編集責任)『第10回学生宗教意識調査報告書』(國學院大學)、2011年2月

### [論文]

- ・「グローバル時代と企業にとっての宗教文化」(『國學院大學研究開発推進機構 日本文化研究所年報』、國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所)、2010年9月
- ・「映画・ビデオ・DVD」(渡邊直樹責任編集『宗教と現代がわかる本2011』、平凡社)、2011年3月

### [その他]

- ・(国際学会でのコメント) パネル「Mythology and Japan」(第20回IAHR会議、トロント)、2010年8月
- ・(学会でのパネル司会) パネル「メディア報道と現代宗教研究」(日本宗教学会第69回学術大会、東洋大学、2010年9月)
- ・(対談)「経営者にとっての宗教」(和田一夫氏との対談)(渡邊直樹責任編集『宗教と現代がわかる本2011』、平凡社)、2011年3月

**齊藤こずゑ** 教授 教育心理学、発達心理学

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

### [単行本]

- ・(責任編集)『児童心理学の進歩 Vol.49 [2010年版]』(日本児童研究所編、金子書房) 2010年6月
- ・(分担執筆)「第5章 保護者の特性に応じた育児支援4 多文化・多言語の保護者への支援」(藤崎真知代・大日向雅美編著『シリーズ臨床発達心理学・理論と実践2 育児のなかでの臨床発達支援』、ミネルヴァ書房)、2011年3月

### [ポスター発表]

- ・「映像ナラティブとしての映像実践の特性分析」(日本発達心理学会第22回大会、東京学芸大学)、2011年3月

**遠藤潤** 准教授 日本宗教史

担当プロジェクト「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の構築」

### [論文]

- ・「國學院大學学術資料館所蔵 羽田野神主家文書 仮目録」(『國學院大學研究開発推進機構紀要』3、國學院大學研究開発推進機構)、2011年3月

### [口頭発表]

- ・「黄泉国論争—平田国学の他界像と近代—」(日本宗教学会第69回学術大会、東洋大学)、2010年9月



- ・「近世日本のスピリチュアリズム—文人の著述にみる—」（東洋英和女学院大学死生学研究所 2010 年度第 3 回研究会、東洋英和女学院大学）、2010 年 10 月
- ・「平田国学における〈靈的なもの〉—靈魂と世界像の近代—」（日本思想史学会 2010 年度大会、岡山大学）、2010 年 10 月

## 黒崎浩行 准教授 情報化と宗教、現代社会と神社神道

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

### [論文]

- ・「神社とインターネットの結びつきの深層」（石井研士編『神道はどこへいくか』、ぺりかん社）、2010 年 11 月
- ・“Preserving the Dignity of Shinto Shrines in the Age of the Internet: A Social Context Analysis.” *Japanese Religions on the Internet: Innovation, Representation, and Authority*, E. Baffelli, I. Reader and B. Staemmler (eds.), Routledge, 2011 年 1 月

### [口頭発表]

- ・(共同発表)「日米宗教思想の再構築—思想空間法を用いた体系化の一例—」（情報処理学会第 87 回人文科学とコンピュータ研究会発表会、皇學館大学）、2010 年 7 月 31 日
- ・「宗教文化資源とまちづくりの諸相」（日本宗教学会第 69 回学術大会、東洋大学）、2010 年 9 月 5 日

### [その他]

- ・(項目執筆)「情報化」（星野英紀・池上良正・氣多雅子・島藺進・鶴岡賀雄編『宗教学事典』、丸善）、2010 年 10 月

## 平藤喜久子 准教授 神話学

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

### [論文]

- ・「植民地帝国日本の神話学—昭和前期の日本神話研究を中心に—」（竹沢尚一郎編『宗教とファシズム』、水声社）、2010 年 6 月
- ・「新出の B・H・チェンバレン、E・B・タイラー宛書状の紹介と検討」（千々和到・福島直之・石井敦・星野靖二との共著、『國學院大學研究開発推進機構紀要』3、國學院大學研究開発推進機構）、2011 年 3 月 31 日

### [口頭発表・講演]

- ・Panel “Mythology and Japan”, (organizer), XXth IAHR World Congress, 2010 年 8 月 20 日
- ・「日本神話学再考—ファシズム期を手がかりに—」（日本宗教学会第 69 回学術大会、パネル「ファシズム期の宗教と宗教研究」、東洋大学）、2010 年 9 月 4 日
- ・“What is Scientific Mythology?”, Radcliffe Exploratory Seminar on Comparative Mythology, 2010 年 10 月 7 日

### [その他]

- ・(分担執筆)「国生み」（『歴史読本（特集：ここまでわかった！日本の神話）』2010 年 4 月号、新人物往来社）、2010 年 4 月
- ・「古事記、日本書紀の神々の物語」（『一個人』2011 年 2 月号、KK ベストセラーズ）、2010 年 12 月
- ・(分担執筆)「国生み」（『歴史読本』編集部編『そうだったのか！すっきりわかる日本の神話』、新人物往来社）、2011 年 1 月

ノルマン・ヘイヴンズ (HAVENS, Norman) 准教授 日本宗教史、日本の民間信仰  
担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

松本久史 准教授 近世・近代の国学・神道史

担当プロジェクト「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の構築」

【口頭発表】

- ・ 鈴門国学と因伯神葬祭運動」（日本宗教学会第 69 回学術大会、パネル「〈靈魂の学知〉と政治運動— 19 世紀の鈴屋と気吹舎を焦点に一」、東洋大学）、2010 年 9 月 4 日

塚田穂高 助教 宗教社会学、近現代日本の宗教運動

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

【論文】

- ・ 「現代日本における「宗教」と「社会」のあいだ—政治と宗教・宗教事件・不活動宗教法人問題・裁判員制度からの眺望—（国内の宗教動向）」（財団法人国際宗教研究所編『現代宗教 2010』、秋山書店）、2010 年 8 月
- ・ 「幸福の科学とその政治進出について—この運動に我々はどう向きあうか—」（『政教関係を正す会会報』38、政教関係を正す会）、2011 年 3 月

【口頭発表】

- ・ 「日本の宗教社会学、宗社研／オウム事件以降—「宗教と社会」学会と会員は何をしてきたか—」（「宗教と社会」学会第 18 回学術大会、テーマセッション「現代社会における宗教社会学の可能性—「世俗化論」以後の課題と応答—」、立命館大学）、2010 年 6 月
- ・ 「幸福の科学とその政治進出について—この運動に我々はどう向き合うか—」（政教関係を正す会研究会、神社本庁）、2010 年 7 月
- ・ 「総論—RIRC 宗教記事データベースの特徴—」（日本宗教学会第 69 回学術大会、パネル「メディア報道と現代宗教研究—RIRC 宗教記事 DB の可能性—」、東洋大学）、2010 年 9 月

【その他】

- ・ 「北海道砂川市有地神社の最高裁違憲判断とその余波—RIRC 宗教記事データベース所収記事から見えてくるもの—（研究ノート）」（『ラク便り』46、宗教情報リサーチセンター）、2010 年 5 月
- ・ 「コメント 3. 宗教社会学・新宗教研究の領域から（テーマセッション報告「カルト／スピリチュアリティ／現代宗教の把握—藤田庄市著『宗教事件の内側』、櫻井義秀編著『カルトとスピリチュアリティ』を題材に一）」（『宗教と社会』16、「宗教と社会」学会）、2010 年 6 月
- ・ “Religious Issues in Japan 2009 : Religion and Society in Contemporary Japan” (translation by B. Dorman, P. Swanson, D. White) in *Bulletin of the Nanzan Institute for Religion & Culture* Nr.34 (2010), 2010 年 8 月
- ・ 「北海道砂川市有地上神社違憲訴訟—政教分離問題の現在とその射程—」（渡邊直樹責任編集『宗教と現代がわかる本 2011』、平凡社）、2011 年 3 月

## 星野靖二 助教 宗教学

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

### [口頭発表]

- ・“the Place of “Shinko (belief)” in “Shukyo (Religion)” in Modern Japan: An Inquiry into Narratives and Practices” in the panel “Appropriation of the Western Concept of “Religion” in Asian Cultural Traditions” organized by TSURUOKA Yoshio and IKEZAWA Masaru, at the XXth IAHR world congress, Toronto University, 2010年8月20日
- ・「熊本時代の中西牛郎一明治十年代の宗教論の位相一」（日本宗教学会第69回学術大会、東洋大学）、2010年9月5日

### [その他]

- ・「新刊紹介一坂本慎一『ラジオの戦争責任』（『近代仏教』17、日本近代仏教史研究会）、2010年5月
- ・（編集・解説・解題）島藺進監修、島藺進・高橋原・星野靖二編集『日本の宗教教育論 第2回』全7巻、クレス出版、2010年7月
- ・「書評特集『宗教の歴史のいま』（『国際宗教研究所ニュースレター』69、財団法人国際宗教研究所）、2011年1月

## 市川収 客員研究員 惑星物質科学

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

## カール・フレレ (FREIRE, Carl) 客員研究員 近代の日本史（特に社会史・思想史）

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

## 李和珍 PD研究員 宗教社会学、日韓の新宗教教団の比較研究

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

### [論文]

- ・「圓佛教徒の意識調査—アンケート調査の分析を中心に—」（國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報）3、國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所）、2010年9月

## 市田雅崇 PD研究員 民俗宗教研究

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

### [口頭発表]

- ・「能登半島における白山信仰」（日本山岳修験学会第31回白山学術大会、白山市民交流センター）、2010年10月

### [その他]

- ・「峨山道をめぐる道の宗教性」（『道の宗教性と文化的景観』（研究代表：鈴木正崇、平成20年度～22年度科学研究費補助金 基盤研究C 研究成果報告書）、2011年3月

ヤニス・ガイタニディス (GAITANIDIS, Ioannis) PD 研究員 医療人類学

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

[博士論文]

- ・『Spiritual Business? A Critical Analysis of the Spiritual Therapy Phenomenon in Contemporary Japan』, University of Leeds, 2011 年 1 月

[口頭発表]

- ・“Consuming Transcendence: Spiritual Therapists or the Otaku of the Spiritual” , White Rose East Asia Centre Away Day, University of Sheffield, 2010 年 5 月 18 日
- ・“Gender and Spiritual Therapy in Japan” , Gender Perceptions and Practices in East Asia Workshop, White Rose East Asia Centre, University of Sheffield, 2010 年 6 月 7 日
- ・“Battling with Japanese Magico-Religious Language” , Languages for the 21st century: training, impact and influence, University of Sheffield, 2010 年 9 月 2 日
- ・“Spiritual Therapists in Contemporary Japan: Consuming Explanations for Distress” , British Association of Japanese Studies Triennial Conference, SOAS, 2010 年 9 月 9 日

[その他]

- ・(研究ノート) “Socio-economic aspects of the ‘spiritual business’ in Japan - a survey among professional spiritual therapists” (『宗教と社会』16、「宗教と社会」学会)、2010 年 6 月
- ・(エッセイ)「思い込みのないよそ者」(『国際宗教研究所ニュースレター』69、財団法人国際宗教研究所)、2011 年 1 月

小林 威朗 PD 研究員 近世後期の国学・神道史

担当プロジェクト「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の構築」

[論文]

- ・『『靈能真柱』の靈魂観一宣長の継承者としての篤胤一』(『國學院大學研究開発推進機構紀要』3、國學院大學研究開発推進機構)、2011 年 3 月

[口頭発表]

- ・『『靈能真柱』に語られた神と靈魂』(日本宗教学会第 69 回学術大会、パネル「〈靈魂の学知〉と政治運動—19 世紀の鈴屋と気吹舎を焦点として—」、東洋大学)、2010 年 9 月 4 日

今井 信治 研究補助員 宗教社会学

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

[論文]

- ・「コンテンツがもたらす場所解釈の変容—埼玉県鷲宮神社奉納絵馬比較分析を中心に—」(『コンテンツ文化史研究』3、コンテンツ文化史学会)、2010 年 4 月

[その他]

- ・Anime “Sacred Place Pilgrimages” : The potential for bridging traditional pilgrimage and tourism activities through the behavior of visitors to anime “sacred places” -An analysis of “votive tablets” (ema) at Washinomiya Shrine, Saitama Prefecture- (translation by Gagne, Isaac) (國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」プロジェクト双方向論文翻訳)、2010 年 3 月

## 小田真裕 研究補助員 日本近世史

担当プロジェクト「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の構築」

### 【論文】

- ・「嘉永・安政年間の宮負定雄—幽界への関心に着目して—」（『國學院大學研究開発推進機構』3、國學院大學研究開発推進機構）、2011年3月

### 【口頭発表】

- ・「下総における幽冥観の展開—気吹舎門人とその周辺—」（日本宗教学会第69回学術大会、パネル「〈靈魂の学知〉と政治運動—19世紀の鈴屋と気吹舎を焦点として—」、東洋大学）、2010年9月4日
- ・「筑前における神職の平田国学受容—宮崎大門を中心に—」（九州史学研究会近世史部会例会、九州大学）、2011年3月5日

### 【その他】

- ・「問題提起 佐原から考える平田国学」（『地方史研究』60-4、地方史研究協議会）、2010年8月

## 一戸渉 共同研究員 日本近世文学

担当プロジェクト「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の構築」

### 【研究紹介】

国学・和学という知的営為を、①近世日本に発生した日本の古き文物をめぐる学的考究と、②それらに基いて行われた歌文・物語・書画の創作などの実践一般を指す広義のものとして捉え、特にそれが18世紀の日本において遂げた展開について、近世学芸史の観点から実証的かつ総合的に跡付けることを研究テーマとしている。これまでは上田秋成及びその周辺の橋本経亮、荷田信郷などといった諸人物を対象に上方地域を中心として研究を進めてきたが、今後はそれに加えて、江戸やその他の地域をも含む近世日本全域へと検討の範囲を拡大してゆくことで、より包括的な国学・和学の理解に及ぶことを目指している。

### 【論文】

- ・「橋本経亮の蒐集活動—『香果遺珍』研究序説—」（『近世文藝』93、日本近世文学会）、2011年1月

### 【口頭発表】

- ・「秋成と好古—天明・寛政期を中心に—」（2010年度下半期北陸古典研究会発表会、金沢大学サテライトプラザ）、2011年3月26日

### 【その他】

- ・（書評）「書評 田中康二著『江戸派の研究』」（『国語と国文学』88-3、東京大学国語国文学会）、2011年3月

### 【2009年度までの主な研究業績】

- ・「礪波今道と上方の和学者たち」（『近世文藝』87、日本近世文学会）、2008年1月
- ・「春満と信郷—『春葉集』の出版まで—」（『鈴屋学会報』25、鈴屋学会）、2008年12月
- ・「『土佐日記解』成立考—宇万伎・秋成の土佐日記注釈—」（『国語国文』78-5、京都大学文学部国語学国文学研究室）、2009年5月

## イグナシオ・キロス (Quiros, Enrique Ignacio Luis) 共同研究員 上代の国学

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」



**小堀馨子** 共同研究員 古代ローマ宗教研究

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

**【論文】**

- ・「古代ローマにおける死者祭祀—レムリア (Lemuria) 祭考—」(『東京大学宗教学年報』28、東京大学宗教学研究室)、2011年3月

**【口頭発表】**

- ・Keiko Grace Kobori, *How would Westerns Value the Similarity between Ancient Roman Religion and Shinto?*, Monotheism in Asia Bar-Ilan University – The University of Tokyo, 2010年8月30日

**エリック・シッケタンツ** (SCHICKETANZ, Erik) 共同研究員 宗教史学

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

**高橋典史** 共同研究員 宗教社会学、日系宗教の海外布教研究

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

**【論文】**

- ・(共著)「企業活動と宗教をめぐるトラブルに関する研究序説—メディア報道の分析を中心に—」(井上順孝編『インターネット時代における宗教情報リテラシーに関する研究 研究報告書』、國學院大学平成21年度特別推進研究助成金研究成果報告書)、2010年7月

**【口頭発表】**

- ・「現代日本の多様化する外来宗教と地域社会の対応—静岡県浜松市を事例に—」(慶應義塾大学東アジア研究所第25回学術大会、慶應義塾大学)、2010年6月
- ・「商業／観光資源化に直面する伝統宗教」(日本宗教学会第69回学術大会、パネル「メディア報道と現代宗教研究—RIRC宗教記事DBの可能性—」、東洋大学)、2010年9月

**【その他】**

- ・(書評)「ケネス・タナカ著『アメリカ仏教—仏教も変わる、アメリカも変わる—』」(『図書新聞』第2989号)、2010年11月
- ・「研究ノート メディアは『1Q84』をどう読んだのか?」(『ラク便り』49、宗教情報リサーチセンター)、2011年2月
- ・(共著)「宗教がわかる Book ガイド (2010年刊)」(渡邊直樹責任編集『宗教と現代がわかる本2011』、平凡社)、2011年3月

**マシュー・チョジック** (CHOZICK, Matthew) 共同研究員 カルチュラルスタディーズ・比較文化

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

**ジャン＝ミシェル・ビュテル** (BUTEL, Jean-Michel) 共同研究員

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

## 三ツ松 誠 共同研究員 幕末国学研究

担当プロジェクト「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の構築」

### [論文]

- ・「「みよさし」論の再検討」(『史学会シンポジウム叢書 18 世紀日本の政治と外交』、山川出版社)、2010 年 10 月

### [口頭発表]

- ・「飯田年平から見た平田国学」(日本宗教学会第 69 回学術大会パネル「〈靈魂の学知〉と政治運動—19 世紀の鈴屋と気吹舎を焦点に—」、東洋大学)、2010 年 9 月

### [その他]

- ・(新刊紹介)「渡辺浩著『日本政治思想史 [17～19 世紀]』」(『史学雑誌』120-2、財団法人史学会)、2011 年 2 月

## 山梨 有希子 共同研究員 宗教学

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

### [研究紹介]

英国の宗教哲学者、J・ヒックを代表とする「宗教多元主義」を中心に研究しています。「宗教多元主義」は、1960 年代以降活発になってきた「宗教間対話」の理論的基盤にもなっているということから、実際に行われているキリスト教とイスラームの対話や仏教とキリスト教の対話などにも参加し、その対話内容の時代的変遷を追うといった調査も行っています。

### [口頭発表]

- ・「21 世紀宗教間対話の潮流—各対話指針の比較より—」(日本宗教学会第 69 回学術大会、東洋大学)、2010 年 9 月

### [2009 年度までの主な業績]

- ・(翻訳)『ジョン・ヒック自伝—宗教多元主義の実践と創造—』(間瀬啓允他共訳、トランスビュー)、2007 年 11 月
- ・「グローバル化する宗教多元主義」(『大正大学大学院研究論集』31、大正大学)、2007 年 3 月
- ・「宗教多元主義は相対主義ではない」(間瀬啓允編『宗教多元主義を学ぶ人のために』、世界思想社)、2008 年 10 月

## 土屋 博 客員教授 宗教学

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

## ナカイ ケイト・W (NAKAI, Kate Wildman) 客員教授 日本思想史

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

## 林 淳 客員教授 日本宗教史

担当プロジェクト「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の構築」

星野英紀 客員教授 宗教学

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

山中弘 客員教授 宗教社会学

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」



## 出版物紹介

井上順孝著『本当にわかる宗教学—フシギなくらい見えてくる！—』

(日本実業出版社、2011年4月)

### 内容紹介

宗教学全般を広く見渡した概説書である。宗教学と宗教との違いに触れたのち、なぜ宗教史を学ぶことが必要かを具体的な事例に即して説明する。歴史的、現代的な宗教の問題を宗教学はどう扱ったらいいのかを述べる。グローバル化する社会状況で起こる問題、あるいは認知科学などが提起する問題にも触れている。教養課程の学生や社会人を対象とした書である。

序章の「宗教学」とは何か？に続いて、次の5章からなる。第1章「宗教史」を踏まえよう / 第2章 様々な宗教の特徴をおさえよう / 第3章 宗教学を構成するキーワードとは？ / 第4章 宗教が「社会」や「心」に与えた影響は？ / 第5章 広がる宗教研究のフロンティアとは？



井上順孝編集責任『第10回学生宗教意識調査報告』

(科学研究費補助金・基盤研究(A)「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」第2グループ、國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」、2011年2月)

### 内容紹介

本研究所プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」のメンバーならびに「宗教と社会」学会の「宗教意識調査プロジェクト」メンバーが中心となって行われた質問紙調査の報告書。1995年以来10回目となる調査は、2010年4月～6月にかけて行われ、全国37大学の学生4,311名の有効回答が得られた(そのおよそ半数が宗教系大学である)。信仰を持っているとの回答、宗教に関心があるとの回答が増加傾向にあることが注目される。また、「パワースポットの存在を信じるか」「散骨や自然葬を希望するか」「大学において「カルト対策」の教育が必要か」といった新たな設問も設けられた。現代日本の大学生・若者の宗教意識を知るための重要なデータを提供している。



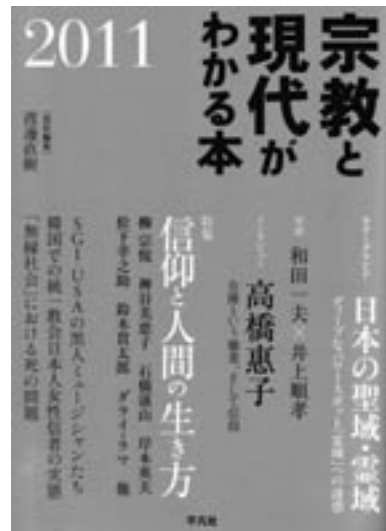


## 渡邊直樹責任編集『宗教と現代がわかる本 2011』

(平凡社、2011年3月)

### 内容紹介

2007年より毎年刊行されているシリーズの2011年版で、その年の新たな注目すべき「宗教」トピックが多く集められて一般向けに編まれている。特集は「信仰と人間の生き方」。各種の対談・インタビューや人物論(柳宗悦・石橋湛山・松下幸之助・岸本英夫ら)において、それぞれの宗教観・信仰が焦点化されている。巻末の「話題の用語解説・新語解説」「気になる数字・データ集」「気になる人物の発言集」などの「2010年データ集」も充実している。本研究所スタッフでは、井上順孝が「経営者にとっての宗教」(和田一夫との対談)・「映画・ビデオ・DVD」、塚田穂高が「北海道砂川市有地上神社違憲訴訟」、高橋典史が「宗教が分かるBookガイド」(共著)をそれぞれ執筆している。全324頁。



## 竹沢尚一郎編『宗教とファシズム』

(水声社、2010年6月)

### 内容紹介

両大戦間である1920年代、30年代のヨーロッパや日本では、ファシズム(的)な運動が盛り上がっていった。その背景にある文化的な状況に、「宗教」を手がかりに焦点を当てたのが本論集である。ファシズム運動の宗教性、宗教運動とファシズムとの関わり、また宗教研究がファシズムにどう接近していったか、ファシズム運動につながった文化運動、といったテーマが主に取り上げられている。本研究所スタッフでは、平藤喜久子が「植民地帝国日本の神話学」を執筆している。ほかの執筆者は編者である竹沢尚一郎をはじめ、川村邦光、大谷栄一、新免光比呂、深澤英隆、山中弘、有田英也、久保田浩、江川純一、松村一男である。全367頁。



## 石井研士編『神道はどこへいくか』

(ペリカン社、2010年11月)

### 内容紹介

本書は、現代社会と神社・神道との関わりを扱った13本の論文をおさめている。戦後の日本人の神社・神道に対する意識の変化を量的調査から分析した石井研士の巻頭論文は、単純に伝統宗教の衰退論を唱えるのではなく、多様な変化をミクロに把握すべきであると説く。それに呼応して、初宮参りや厄年といった人生儀礼、神葬祭墓地、女子神職、神社と行政との協働、都市の氏子区域の変化、過疎地域の神社、バリアフリー化と神社空間の変容、神道・神社の本の出版状況、ラジオ放送、パワースポットとしての神社、インターネットとの関わりが、個別のフィールド調査に基づいて具体的に論じられる。本研究所スタッフでは、黒崎浩行が「神社とインターネットの結びつきの深層」を執筆している。



## Erica Baffelli, Ian Reader, Birgit Staemmler, (ed)

## Japanese Religions on the Internet : Innovation, Representation, and Authority

(Routledge, 2010年12月)

### 内容紹介

本書は日本宗教とインターネットとの関わりについての10本の論文を収めているが、副題にあるように宗教の技術革新、表象、権威をめぐる問題に特に焦点を当てている。この関心はイアン・リーダーが日本宗教の現世利益を扱った前著 Practically Religious (ジョージ・タナベと共著) やチュービンゲン大学の Cyberreligion プロジェクトの関心を発展させたものである。本研究所スタッフでは、黒崎浩行が “Preserving the Dignity of Shinto Shrines in the Age of the Internet” を執筆している。



## テレビ放映・番組紹介

本研究所関連の過去のシンポジウムの様子などが、「スカイパーフェク TV! ベターライフ Ch」(216Ch)の「精神文化の時間」((株)精神文化映像社撮影・制作)において、数度にわたって放映されているので紹介したい。

○国際研究フォーラム「イスラームと向かい合う日本社会」(2010年10月3日開催)

放映日時:2010年11月25日(木)・28日(日) 21:30～22:30

2011年1月12日(水)・1月26日(水) 21:30～22:30

2月9日(水)・2月23日(水) 21:30～22:30

○特別番組『スタートする<宗教文化士>制度』

宗教文化教育推進センター発足式(2011年1月9日開催)

放映日時:2011年2月24日(木)・2月27日(日) 21:30～22:30

○国際研究フォーラム「映画の中の宗教文化」(2009年9月20日開催)

放映日時:2011年3月9日(水)・3月23日(水) 21:30～22:30

○公開講演会「観光と宗教」(2010年12月11日開催)

放映日時:2011年3月27日(日)・3月31日(木) 21:30～22:30



放映番組の様子:特別番組『スタートする<宗教文化士>制度』より

國學院大學研究開発推進機構 日本文化研究所年報 第4号

---

平成23年9月30日 発行

発行者 井上順孝

編集担当 遠藤 潤

塚田穂高

印刷者 日経印刷株式会社

発行所 國學院大學研究開発推進機構 日本文化研究所

東京都渋谷区東4丁目10番28号

郵便番号 150-8440

電話 03-5466-0162

FAX 03-5466-9237

